真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

§ K&N §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双〜冷静と情熱の狭間〜

【Nコード】
N6996X

【作者名】
§K&p;N§

【あらすじ】
俺こと北郷一刀は孤独だった。
両親と妹を事故で失い、じいちゃんに引き取られたが、じいちゃんも俺を残して逝ってしまった。
そしてあの日、俺はじいちゃんの遺言に従い一振りの刀を手にしたんだけど…………今思えば、あれが全ての始まりだったんだ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

手を抜くつもりはありません。

全力を尽くします。

原作より強く賢い一刀君が見たい方は、ぜひ読んでみてください！

prologue（前書き）

皆さんこんにちは！

§K&Ｎ§と申します。

よろしくお願いします！

prologue

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

心電図の規則正しい電子音を聞きながら、病室のベッドの脇にある椅子に深く腰掛け、俺はじいちゃんの手を両手で握っていた。

「じいちゃん……」

おもわず声が漏れる。

ベッドで静かに眠るじいちゃんは、医者の話では今夜が山らしい。

思い返せば、俺はじいちゃんがいなかったらどうなっていたんだろうか？

９歳の時に、両親と俺と妹が乗る車にトラックが突っ込み、両親と妹はこの世を去ったが、神の気まぐれか、俺だけが生き残った。

その後、親戚達と共に葬儀をしたけど、俺を引き取ってくれる人は誰もいなかった。

もともと俺の両親は駆け落ちをして結婚したので、親戚からしたら俺は厄介なお荷物だったらしい。

周りから冷たい視線を受ける中、そんな俺を引き取ってくれたのがじいちゃんこと、北郷一心さんだった。

じいちゃんは俺の父親の叔父に当る人で、性格は正に現代の生きる侍そのもの。

北郷家の先祖が開祖である北郷御影流剣術の師範代をしていたが、弟子もおらず、独身のまま鹿児島の山奥で修業に明け暮れ、親戚達からもうとまれていたようで、厄介者は厄介者に任せるのが一番だったらしい。

そして俺はじいちゃんに引き取られ、一緒に鹿児島で暮らすこととなったんだけど、引き取られた当初、俺は事故のショックで心を閉ざし、誰とも関わろうとしなかった。

そんな俺が立ち直ったきっかけは、じいちゃんが師範代を務める北郷御影流剣術を始めたことだった。

地元の学校に通いながら、じいちゃんと共に剣術の修業に明け暮れる内、次第に心を取り戻し、5年の歳月を有したが、俺は両親と妹の死を乗り越えることが出来た。

また、毎日剣術の修業に明け暮れる内に、どんどん腕も上がっていき、つい半年前、１５歳の誕生日に北郷御影流の免許皆伝をじいちゃんから言い渡された。

免許皆伝を言い渡した時、じいちゃんは喜んでくれたし、何より俺自身認められたことは本当に嬉しかった。

そんな矢先、じいちゃんが道場で倒れた。

救急車を呼び急いで病院に向かい、診察を受けた。

その結果は心筋症。

長年に渡る激しい修業が心臓に負担をかけ、もはや心臓が限界らしい。

そして今に至る。

「うっ……」

目の前のじいちゃんの瞼が微かに開く。

「っ！　じいちゃん！」

おもわず身を乗り出し叫んだ。

「一刀か……」

普段のじいちゃんからは想像も出来ない程弱々しい声をあげる。

じいちゃん……もう永くないな…。

くそっ、泣くんじゃねぇぞ俺！
笑顔で見送ると決めただろう！
「じいちゃん……体調はどうだ？」
俺は努めていつも通りを装う。
正直、気を緩めたら泣きそうだ。
「……一刀」
「…何だ？」
「私はもう永くないのだろう…？」
「っ！？
おもわず息が止まる。
「私の体のことは…私が一番わかる。」
やめろ。
「お前が立派な剣士になるのを見届けられないのは残念だが……まあ、致し方ないな。」
やめてくれ！
「……フッ、何を泣いておる？」

「えっ？」

気付けば一粒の雫が頬を流れていた。

「一刀……私はお前に免許皆伝を言い渡した。だが、その証となるものをまだお前に授けていない。そうだな？」

「あぁ…。」

「そこで、私はお前の師匠として、道場の神棚に奉ってある刀をお前に与え、それを免許皆伝の証とする。」

ゾクリとした。

じいちゃんのその言葉は、俺が真の意味で北郷御影流を継承するということに違いないのだから。

あの刀にはそれだけの価値があるのだ。

「…一刀、死とは人間であればいつか必ず訪れる別れだ。だが、それよりも大切なものがある。何だかわかるか？」

じいちゃんは臨終間際とは思えない程鋭い眼差しでそう俺に尋ねた。

だけど……俺にはわからねぇよ…。

「死んだら終わりじゃねぇか……。」

もう涙は止まらない。

声も震えている。

「それは違う。終わりではない。私が死んでもお前がいる。お前は私の業(わざ)を、剣士としての心得を引き継いだ。一刀、お前はもう、北郷御影流を修めた侍なのだ。」

衝撃的だった。

俺が……侍？

「良いか一刀、お前が学んだ北郷御影流もまた、そうして代々受け継がれたものなのだ。私が受け継いだそれもお前に渡せた。私はそれで満足だよ。」

そう言ってじいちゃんは穏やかに笑う。

「でも…俺はまだまだ未熟だよ？人に教えられる余裕なんてないよ。」

そう、未熟なのだ。

俺自身、侍と呼べる程、精神も業(わざ)も完熟していないと思ってる。

ましてやそれを俺が誰かに伝えていくなんて……

「ハッ！そんなこと、今のお前に期待してなどいないわ。それにお前は、免許皆伝になったからといって、修業を止めるか？」

「それはない。断言出来る。」

「ならばそれで良い。お前自身が誰かに教えていけると思った時にやればよい。それまでは自らを高めよ。お前はこれからなのだからな。それに、たとえここで私の肉体が滅びても、魂はお前と共にある。だから大丈夫だ。」

ニッコリと笑いながら、じいちゃんは一通り言いたいことを言うと、疲れたように目を閉じた。

俺はこれから……そうだ。

俺は何をすべきか、これからゆっくり考えていけば良い。

もう涙は出ない。

悲しくないと言えば嘘になるが、それより今じいちゃんに伝えなきゃいけないことがある。

「じいちゃん…」

「……何だ？」

じいちゃんがこちらへ振り向く。

「この6年間、貴方から学んだことは俺の誇りです。本当にありがとうございました。」

じいちゃんの目を見てそう言って、深々と頭を下げた。

じいちゃんは驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になって、

「あぁ……安心した……。」

そう呟いて、穏やかな顔をしながら永い眠りについた。

じいちゃんの葬儀は、亡くなった翌日に近所の方々が中心になって行ってくれた。

葬儀の様子を見て、あらためてじいちゃんがどれだけ近所の方々に慕われていたかがよくわかった。

それから一週間、親戚達に連絡をして回ったが、誰ひとりとしてじいちゃんの墓参りに来なかった。

まあ、俺もじいちゃんも、あんな薄情な親戚に来られても嬉しくないけどね。

そして一週間経った今、白い胴着に黒い袴を着た俺はじいちゃんの

道場にいる。

理由は一つ、じいちゃんから授かった刀、「千代桜（ちよざくら）」を神棚から降ろすため。

台座に乗り、神棚の刀を手に取る。

ずっしりとした重量感は刀自体の重さだけでなく、歴史の重みもあるのだろうか。

それなのに、ぴったりと俺の手に吸い付く感覚もある。

鞘はワインのように赤黒いが、漆塗りなのか赤黒さを引き立てるように艶やかで、鍔には龍の彫刻が施してあり、職人の技が際だっている。

そして、柄の部分には刀の名と同じ桜色の当て布が巻いてある。

じっくりこの千代桜を見たことはなかったけど、あらためてこの刀を手に取り、正直俺は気圧されている。

これが受け継がれ続けた重み。

だけど、俺はコイツを離すつもりはない。

じいちゃんの葬儀の時、俺はじいちゃんの誇れる侍になると決めた。

そのためには、今までのような木刀だけの鍛練じゃダメだ。

北郷家に代々伝わるこの刀を使いこなしてこそ、真の意味で北郷御

影流の継承者になれると信じている。

台座から降り、俺は道場の真ん中で立ち止まると、柄に手をかけた。

……じいちゃん、見ていてくれよ。

俺は……じいちゃんを超えてみせる！

高ぶる気持ちを抑えるように深呼吸をすると、俺はゆっくりと千代桜を抜いた。

シャリン、と金属が擦れる独特の音が道場に響いた。

そして、抜いた千代桜の刀身を見た時、俺は言葉を失った。

微かに青みがかり透き通った刀身は、鏡のように磨き貫かれており、その刃は触れたもの全てを切り裂くと思えるほど鋭利である。

なんて美しい……。

素直にそう思った。

だが、その時、異変は起きた。

キィィィィン！

刀身からまばゆい光がほとばしる。

「えぇっ！？ちょっ！？いきなり何が！？」

待て待て待て！

何だこれっ！？

ってか、これ刀に吸い込まれる！？

「うわぁぁぁぁぁ！！！」

断末魔が道場に響く。

光が止んだ時、そこにはもう誰もいなかった。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

今作品の一刀君はそこそこ強いです。

ただ、現段階では一般兵より強いといった程度。

当然将軍クラスには太刀打ち出来ません。

徐々に強くしていきたいと思います。

そして、ネタバレになってしまいますが、ここの一刀君の一番の売りは、御遣い補正がないことです。

まあ、要するにここの一刀君は天の御遣いなんていう胡散臭い存在にはならないということですな（「▽｜；）

ならべくご都合主義にはしないように気を付けますので、どうか皆さんも楽しく読んで頂けたら幸いです。

～第一話～侍、荒野に立つ（前書き）

一人称ムズイ（ーωー；）

とりあえず出来ました。

どうぞ！

～第一話～侍、荒野に立つ

「…うっ……」

一体どれだけの時間気を失っていたのだろうか…。

目を覚ました俺は、先程のまばゆい光のことを思い出す。

刀から光が溢れ出るとか何てファンタジー？

何故千代桜から光が出たのか……考えてもわからないので、とりあえず自分の体に異変がないか確認することにした。

着ている服はさっきと変わらず、白い鍛練用の胴着に黒い袴。

見た目的に怪我もなく至って健康体である。

俺は自身の体に何の問題もなく、とりあえずは安心した。

まあ、安心はしたのだが……一つだけ困ったことがある。

一つとは言ったものの、その一つが今のところ一番問題なのだ。

俺は一体誰に説明しているのかはわからないが、とりあえず、一つだけ言わせてくれ。

「ここ何処だぁぁぁ！！！」

俺の魂の叫びが虚しく荒野に響いた。

数時間後、とりあえず落ち着いた俺は、腰に下げた刀、千代桜を揺らしながら宛てもなく荒野を歩いていた。
ちなみに、千代桜は何故か鞘に納まって俺の足元に転がっていた。

……もう訳がわからん…。

俺の目の前には、見渡す限り荒野が広がり、遥か先には岩で出来た柱なのか山なのかよくわからないものが鎮座しているのみである。

「はぁ……一体どうなってんだよ…？」

今日何度目かわからない溜息と呟きが漏れる。

その時、俺は遠くからこちらへ走り寄ってくる3人組を見つけた。

やっと人がいた！

宛てもなく歩くことにも飽きていた所だったので、俺は嬉しくなって叫んだ。

「おーい！こっちだこっち！」

近付くにつれ３人の容姿がハッキリしてきた。

一人はガッシリとした体つきの中年の男で、その両隣には身長が小さくギョロ目の男と関取のように太った男という何とも凸凹した３人である。

そして、極めつけはその格好。

３人とも、黄色い頭巾をかぶり、簡易的な鎧のようなものを纏（まと）い、腰には中華風の剣を下げている。

……コスプレだろうか？

まあ、格好に関しては現在の自分も人のことを言えないので黙っておこう。

それより、これでこの荒野から抜け出せる！

「良かった！実はこの辺りで迷っ」

「おう、兄ちゃん！金目の物があるなら大人しくだしな。」

ん？

この人達はそういうキャラのコスプレなのか？

なら！

「ふっ…俺を誰だと思っている？天下の剣豪、北郷一刀様だぞ！」
仮面ライダーの変身ポーズを取りながら、俺はそう叫んだ。
こういうの一度やってみたかったんだよな！
だけど、目の前の３人は目を点にしてア然としている。
……やべぇ……俺は何処で間違えた？
もしかして、この人達は大人し目の人なのか…？
「てめぇが誰だか知らねぇが、ふざけてるなら殺すぞ？」
中年の男が腰の剣を抜き、それに従い後ろの二人も剣を抜く。
……待て待て待て！
それ明らかに本物じゃねぇか！
「ちょっ、コスプレじゃなかったの！？」
「こすぷれ？兄貴、コイツ何言ってんすかね？」
「ハッ、んなの知るか。おいガキ、良いから金目の物を出せ！」
ギョロ目の男が中年の男にそう言うが、中年の男はそれを鼻で笑いながら俺に剣の切っ先を向ける。
「……あれ？もしかして、アンタ真面目に言ってる…？」

そんな…まさか……。

「当たり前だ！良いから早く出せ！」

「出せ！なんだな…。」

中年の男と太った男がまくし立てる。

……オーケー。

少しクールになれ俺。

状況を整理しよう。

荒野で人発見→金目の物よこせと言われる→俺がふざける→相手は激怒して剣を抜く→剣は本物→真面目かどうか聞いて当たり前と言われる。

あぁ……なるほど。

「本物の強盗！？」

マジかよ！？

これ洒落にならない状況なんじゃ……。

「いやいやいや！見ればわかるでしょ！金目の物なんてないよ！」

携帯や財布とかは俺の部屋だし、だいたい金目の物なんて胴着に着

替えた時に全部置いてきたよ！

「あぁ？あるじゃねぇか。てめぇの腰にある剣は何だ？」

腰にある剣？

……まさか、千代桜のことか…？

「……それは……それだけは出来ない。」

「……何？」

中年の男は怪訝な表情している。

まさかこの状況でそんなことを言われるとは思ってなかったんだろうな…。

だけど、

「これはじいちゃんから授かった大切な刀だ。他の物だったらまだ考えたけど、これだけはダメだ。……どうしてもって言うなら…」

俺は千代桜の柄に手をかける。

そう、これだけは譲れない。

これは北郷御影流を継承した証だから…。

それを奪おうと言うのなら……斬り捨てるまでだ！

俺は勢いよく千代桜を抜いた。

太陽の光に反射してキラキラと輝く刃を、俺は3人に向け正眼に構える。

俺の気配が変わったのを前の3人も気付いたのだろう。

それぞれ己の剣を構え直す。

だが、3人とも俺の気迫に負けて腰が退けている。

「おっ…おい！お前ら、行け！」

「「っ！」」

中年の男に激を飛ばされ、後ろの二人が突っ込んできた。

…遅い。

「ぎゃっ！」

「へぶっ！？」

ギョロ目男が剣を振りかぶった瞬間、俺は開いた胴に横薙ぎの一閃をみまう。

そして、そのまま勢いを殺さず、遅れてきた太った男の胴を通り抜けざまに斬り捨てた。

ドサリと二人が倒れる音が聞こえる。

俺の眼前にいる中年の男は、目の前の光景に目を見開き、完全に戦意が喪失しているようだ。

「おい。」

「ひぃっ！？」

俺が声をかけると、中年の男は引き攣った顔を向ける。

「そこの二人を連れてどっかに行きな。峰打ちだから死んではいないからね。」

俺はそう言いながら、倒れてる二人に目を向ける。

二人は痛がって悶絶はしているものの、やはり死んではいない。

「どうする？まだやるってんなら……」

刀を握り直してそう聞くと、中年の男は慌てた様子で倒れた二人を起こして走り去って行った。

「はぁ……」

溜息をつきながら、静かに納刀する。

まさか本物の強盗に襲われるとは……。

生まれて初めて強盗に襲われたけど、本当に千代桜持ってて良かった…。

でも何か忘れてるような気がするんだよな……。

……っ！？

「俺アイツらにここが何処か聞いてねぇ！」

おもわず叫び声を上げ、頭を抱えた。

また振り出しかよっ！？

「ぐぬぬぬ……」

唸りながら己の馬鹿さ加減に自己嫌悪していると、ふと遠くから聞き慣れない音が聞こえた。

「これは……」

音の聞こえる方に目を向けると、遠くの方で砂煙が見える。

それにこの音は……馬の蹄の音だ。

音と砂煙はどんどん近付いてくる。

目を凝らしながら砂煙を凝視すると、何人もの人が乗っているのがわかる。

またさっきみたいに強盗紛いな奴じゃないだろうな…？

でも、このままじゃどうしようもないしなぁ……。

仕方ない。

また声をかけるしかないか…。

「おーい！」

俺は馬に乗った軍団に向け、大声で呼び掛けた

side　？？？

「天の御遣い？」

私は部下の言葉に眉をひそめた。

「ここ最近、民達の間ではこの話題で持ち切りです。ここまで噂になっていると、あながちその噂も嘘ではないのではないか、と私は考えています。」

我が部下、莉昂（りこう）は報告書を見ながら私にそう語りかける。

「ふむ……話はわかったが、貴公は私にどうして欲しいのだ？」

イマイチ意図が見えん。

こやつのことだ。

意味もなくこのような話をする奴ではない。

だが一体何が……？

「私の意見としましては……“天の御遣い”を見付け次第保護するべきかと。」

真剣な表情で莉昂は言った。

「何故だ？まさかその“天の御遣い”の威光を使い天下統一……なんて言わないだろうな？」

私は怪訝な表情を浮かべながら莉昂に問う。

そう、私に天下統一などという野望はない。

今、任されている幽州の統治ですらままならないのが現状なのだ。

故に、私にはこの大陸を統一するに値する器量はない。
それは私自身が一番よくわかっていることだ。
だからこそ、わざわざ“天の御遣い”を保護する理由がわからない。
「そうではありません。むしろ、幽州の周辺にいる諸侯に、“天の御遣い”の威光を使わせないために先手を打つのです。もし、義遠(ぎえん)様が“天の御遣い”を保護した場合、周辺の民達に“我等は天の威光と共にこの地を統治する”とでも言っておけば、諸侯達も迂闊に我等へ出兵出来ないでしょう。民達の反感はならべく買いたくないでしょうから。」
莉昂は私の目を真っすぐ見つめてそう言った。
「なるほど……筋は通っているな。ところで、この話は他に誰が知っている?」
「今のところ、私と義遠様、そして権陽(けんよう)様だけです。」
権陽か……。
「その権陽はどう言っておった?」
「権陽様ですか?権陽様は、義遠様の判断に従うとのことでした。」
「そうか……。」
奴も反対しないということは、恐らくそれなりに効果があるという

ことなのだろう…。

「良かろう。この件は我が名の元、糜竺(びじく)、貴公に一任する！」

「御意！我が主、陶謙(とうけん)様の名に恥じぬよう、全力を尽くします！」

糜竺こと、莉昂はそう言って一礼すると、私の執務室から出ていった。

それにしても……天……か。

思い出すのはあの男。

たった2年だが、若かりし頃の私と権陽と共に戦場を駆け抜けた親友であり、流星と共に現れ、光の中に消えていった、誇り高き剣士。

30年程経った今でも、あの男の姿は忘れられない……。

……いかんな。

まだ政務が残っているというのに、感傷に浸ってなどおれぬ。

そう思いながら、私は机に乗る書簡に手を伸ばした。

side out

side ???

先程、莉昂から義遠様が“天の御遣い”を保護することに決められたという報告を受け、私はある思いを抱いていた。

恐らく、義遠様も同じことを考えていらっしゃるだろう。

私と義遠様にとって、“天”という言葉は特別だ。

まだ私が10代半ばの、義遠様に仕えて間もないあの頃、ちょうどその時期に出会ったのが、彼だった。

たった一降りの剣のみで、現在の我等の未来を切り開いた恩人とも言えるお方。

流星と共に現れ、光の中に消えた彼は、まさしく天から遣わされたと言わざるを得ないほど気高かった。

たった2年の月日だったが、彼の考え方は今の私の根本とも言える程、影響を及ぼしてしている。

あれから30年、愛する妻と息子が出来るなど……あの時の私からすると想像も出来ないだろうな。

そう思いながら、私は一人苦笑していると、

「親父！入るぜ！」

乱暴に扉を開けて、我が息子が入ってきた。

「士陽（しょう）……お前は礼儀というものを知らんのか？人の部屋に入る時は、一言声をかけろといつも言っているだろう。」

あまりにも礼儀知らずな入り方をする息子に呆れながら、私は息子を睨みつける。

「何怒ってんだよ。それに、ちゃんと声はかけたぜ。入るってな。」

我が愛する妻から受け継いだ赤髪を揺らしながら、何故か威張ってそう言う息子の姿に頭が痛くなる。

「……まあ、良い。して、用件は何だ？」

「“天の御遣い”の話だ。何でそんな胡散臭い奴を保護するために、俺がソイツを探さなきゃならねぇんだよ！莉昂の兄貴から、親父が俺をその役に推薦したって聞いたぞ！」

なるほど、そういうことか。

「それはお前が適任だからだ。賊風情には遅れを取らぬ実力を持ち、かつ我が軍で単独で動き回れるのはお前だけだ。だからお前を推薦したのだ。」

私がそう言うと、士陽はいかにも不服そうな顔をする。

「おいおい、何で俺が単独で動けるんだよ。俺の部隊はどうすんだ？」

確かに最もらしい言い方だが、私は知っている。

「ほう…？お前、私が知らぬとでも思っているのか？お前の部隊はほぼ莉昂が調練しているそうじゃないか？」

「うっ！？」

気まずそうな顔をする士陽。

士陽が調練をサボっている話はすでに所々から聞いている。

まったく……その話を聞かされる私の身にもなれ、馬鹿者が！

「いや、あのな親父？あれは莉昂の兄貴が…」

「言い訳はいいから、とっとと準備をせぬか！この馬鹿者め！」

「りょっ、了解！」

慌てて私の部屋を部屋を出る息子の姿に、おもわず溜息を漏らす。

その時、扉の外に人の気配を感じた。

「陳珪（ちんけい）様、入ってもよろしいでしょうか？」

「構わん、入れ。」

そう命じると、部下が部屋に入ってくる。

「あの……ここに来る前に、陳登(ちんとう)殿が半泣きで走り去って行きましたが…大丈夫なのですか？」

「……構わん、ほって置け。」

息子の情けなさに再び頭痛を感じるが、無視して部下からの報告に私は耳を傾けた。

side out

side 陳登

親父からの指示―という名の命令―で、俺はここ数日、幽州内のあらゆる場所で、“天の御遣い”に関する情報を探した。

莉昂の兄貴からは、もし本人を発見したら、至急城に連れて来いって言われた。

だが、得る情報はいつも一緒で、有名な占い師がそう言ったから、だそうだ。

……兄貴よ、いくらなんでも無謀過ぎねぇか？

つか、占い師マジでふざけんな！

てめぇが適当なこと抜かすから、俺がこんなことする羽目になっただろうが！

だいたい、容姿なり持ってる物なり、何かしらの情報がねぇと探しようがねぇよ！

まあ、何の情報もないからこそ、誰かが集めなきゃいけないんだろうけど……。

何もそれが俺じゃなくても良いだろうが！

しかも兄貴も情報を集めてるなら、俺の意味なくねぇか！？

心の中で一人ぶつくさと文句を言いながら、俺は馬の上で顔をしかめる。

「これだけ探していねぇんだ。帰っても文句は言われねぇはずだ。」

そう独りごちて、俺は眼前にある義遠様の城に目を向けた。

視線を下げると、俺の乗っている馬も疲れの色が見える。

「ありがとな。もうすぐ城に着くから、着いたらゆっくり休みな。」

俺はそう言って馬の首をさすってやる。

その時、東の空からまばゆい光が辺りを包んだ。

「っ！？何だ！？」

太陽ではない。

太陽の光はこんなに白くまばゆくないから。

俺は東の空を見上げると、空から光の筋が降っている。

「あれは……流星！？」

おもわずそう叫んだ俺は、そのまま流星を見ていると、城から3里ほど離れた場所に落ちたのを確認した。

あそこは確か、荒野が広がる場所だったな……。

まあ、何でも良い。

今は親父達に知らせる方が先だ！

「悪いな、もう少し頑張ってくれ！」

俺はそう言って馬の腹を軽く蹴って、急いで城に戻った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

side　陳珪

またもや突然乱暴に扉を開けて入ってきた息子に、今度こそゲンコツの一発でもくれてやろうとしたが、息子の話を聞いて、私は義遠様の下へ急いでいた。

“天の御遣い”の話、そして動乱の予感漂うこの後漢の時代、そして先程息子から聞いた流星の話。

いくらなんでも話が出来過ぎている。

これではまるで、30年前の状況と同じではないか！

まさか……あの流星は彼だというのか！？

逸(はや)る気持ちを抑え、義遠様の部屋へ飛び込む。

「義遠様！」

「おぉ！権陽か！」

義遠様はもうすでに出陣の準備を終えているようだ。

義遠様の横には、莉昂も控えている。

「義遠様、士陽の話はもうお聞きになられましたか？」

「うむ……権陽、貴公はどう思う？」

複雑な心境なのだろう。

義遠様は顔を歪めながら私に聞いてくる。

「……正直、私も複雑です。あまりにも３０年前と状況が似過ぎています。それに、流星の話が本当なら……“彼”の可能性も否定できません。」

私がそう言うと、義遠様は頷きながら私の意見に賛同する。

「やはり貴公もそう考えるか……。何はともあれ、実際に行ってみなければわからん。莉昂、城のことは貴公に任せる！義遠、貴公は私と共に、私の騎馬隊で流星が落ちた場所に急ぐぞ！」

「「御意！」」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　陶謙

あれから急いで出陣した我々は、士陽の言っていた城から3里ほど離れた荒野に来ていた。

「士陽、本当にこの辺りに流星が落ちたのか？」

隣で馬に乗る権陽が、士陽に確認している。

「間違いねぇよ。あんな異常な物が空から降ってきたんだ。忘れる訳がねぇ。」

そう言って、士陽も辺りを見渡す。

士陽は弓の名手である。

故に、その目の良さは信用に値する。

その時、

「っ！？親父、北東の方向に誰かいるぞ！」

「何っ！？義遠様！」

私は士陽が言った方向に目を凝らす。

……確かに、人影のようなものが見える。

「全軍、進路を北東に向け前進！」

まさか……本当に奴が帰ってきたというのか。

しばらく馬を走らせると、徐々に人影の姿が私の目にも見える程ハッキリとしてきた。

どうやら男のようだ。

それと同時に、向こうもこちらを呼んでいるのがわかる。

そして、男のすぐ側まで寄り馬を止め、あらためて男を凝視して、胸が締め付けられるのを感じた。

私の記憶が正しければ、男が着ているのは胴着、袴と呼ばれる服であり、その腰に下げているのは……千代桜という名の刀剣であったはず。

隣をちらりと見ると、権陽も目を見開いて驚愕している。

まあ、そうであろうな。

私もかなり驚いている。

何せあの刀剣……あれの所有者は、私の知っている中ではただ一人。

３０年前、光の中に消えた我が親友、“北郷　一心”が持っていた物なのだから……。

side　out

side　一刀

俺の前で馬を止めた人達は、今だ何も言わずただ俺を見ている。

まあ、ぱっと見た感じ、さっきの奴らよりは気品を感じるし、強盗の類いではないだろう。

でも、何でさっきから何も言わずこっちを見るだけなんだろう？

特に真ん中にいる二人はすごく驚いた顔をしているのが、傍から見てもわかる。

うーん……気まずい。

とりあえず、声だけかけてみるか。

「あの……実は道に迷ってしまいまして、助けて頂けないでしょうか？」

俺の声を聞いて、真ん中の二人はビクリと体を震わせた。

その二人の内、じいちゃんと同じくらいの歳の、髭を伸ばした老人が馬を降り俺に近付いて、一言呟いた。

「……一心」

その一言に、俺も驚愕する。

「じいちゃんを知ってるの！？」

「じっ、じいちゃん？」

目の前の老人がまた驚いた顔をする。

この人、じいちゃんの知り合いなのかな？

良かった！

こんな訳のわかんない場所で、じいちゃんの知り合いに会えるなんてラッキーだ！

「あっ……まだ俺の名前を言ってませんでしたね。」

名を名乗る前からこんなに馴れ馴れしくしたら失礼だ。

じいちゃんがくれた誇り高い名を、ちゃんと名乗らなきゃな。

「俺は、北郷御影流剣術継承者、北郷　一刀です！」

向こうに控える方々にも聞こえるよう、俺は大きな声でそう言った。

「北郷　一刀……？それが貴公の名か？」

目の前の老人は依然として目を丸くしながらそう問いかけてきた。

「はい。それで……貴方は？」

「っ！？これは失礼した。私は陶謙、字は恭祖（きょうそ）。今はこの幽州で刺史（し）を務めさせてもらっている。」

……ちょっと待て。

今このご老人は何て言った？

俺の記憶が正しければ、陶謙って三国志にいたよな？

ってことはアレか？

さっきの黄色い頭巾の奴らは黄巾賊か？

なるほど、だから本物の剣なんて持ってたのか。

ハハッ、つまり俺はタイムスリップしたわけだ！

「どこまでファンタジーなんだコンチクショォォォォォォォォ！！！！！」

目の前の陶謙さん達は、どうしていいかわからず目を白黒させるのみだった。

～第一話～侍、荒野に立つ（後書き）

オリ設定満載ワロタなんですけど、大丈夫ですかね？

うーん、不安だ（ー”ー）

～第二話～侍、師の駆けた軌跡を知る（前書き）

ねつ造し過ぎたｗｗｗｗｗ

正史の陶謙はこんな良い人じゃないらしいですねｗｗ

まあ、とりあえず第二話をどうぞ！

～第二話～侍、師の駆けた軌跡を知る

side　一刀

とりあえず落ち着いた俺は、陶謙さん達に連れられ、城に向かっていた。

それにしても、まさか三国時代にタイムスリップするとは……我ながら稀有（けう）な体験だと思う。

まあ、依然として何故こうなったのかは皆目見当もつかない。

しかも、陶謙さんはどうやらじいちゃんを知っているようだ。

これまた何で知っているのかわからないけど、とりあえず、じいちゃんの知り合いに会えたってのは不幸中の幸いだと思うことにした。

まあ、そうじゃねぇとやってらんねぇってのが本音だ。

だけど実際、今俺はこの世界にいる。

ぶつくさ文句を言っても、何かが変わるわけでもない。

それに真の侍ならば、どんな場所にいても冷静なはずだ。

だから、とりあえず、しばらくは陶謙さんにお世話になろう。

俺は心にそう決めると、隣で馬を走らせる陶謙さんを見る。

先程までは少々取り乱していたようだけど、今はただまっすぐ前を見て、眼前に迫る城を見つめている。

ちなみに、俺は今馬に乗っている。

修行の一貫として、じいちゃんから馬術を習っていたから、当然俺は馬に乗れる。

車やバイクがあるこのご時世、馬なんて乗る機会はないだろうなんて思ってたけど、まさか今そのスキルがフルに活用されるとは……本当、じいちゃん様々である。

「北郷殿……っとお呼びして良いかな？」

隣にいる陶謙さんがそう言いながら俺を見ている。

「あっ……じいちゃ…じゃなかった。我が師の知り合いのお方であるならば、私のことは一刀とお呼びください。」

そう、この人がじいちゃんの知り合いの人であるならば、失礼などあってはならない。

それはじいちゃんの顔に泥を塗る行為だ。

そんなこと、俺自身許せるわけがない。

「そうか……ならば一刀、もうすぐ城に着く。着いたら君と話がしたいのだが、良いかな？」

「はい、私としましても、陶謙様に色々とお伺いしたいことがあり

ます故、その提案をお受け致します。」

「うむ、では着いたら私の侍女を君の下に向かわせる。君は彼女の案内に従ってくれ。」

「承知しました。」

俺がそう答えると、陶謙さん……いや、もう陶謙様と言った方が良いか。

とにかく、陶謙様は満足げに頷いて再び前を向く。

そして、城門が開くと、軍団は城内に入っていった。

さて、どうなることやら……。

side out

side 陶謙

城内に着き、侍女に一刀の下へ向かうよう指示を出し、私は自室である執務室に足を運んだ。

私の後ろには権陽も控え、いつでも話が出来る程には落ち着いているようだった。

執務室に着き、会議用の円卓に座る。
隣に座る権陽に、私は声をかけた。
「権陽、貴公は一刀を見てどう思った？」
権陽は少し考えるそぶりを見せ、そして口を開く。
「……私が若かりし頃に見た一心様にそっくりです。そして、本人も一心様をじいちゃんと呼んでいる事から、一心様の親族と見て間違いないでしょうな。」
「ふむ……やはり貴公もそう思うか。」
「はい。それに、彼の腰に下がっていた刀剣、あれは一心様が持っていた千代桜です。」
「ふむ……」
やはり権陽とは同じ結論に至ったようだな…。
まあ、何にせよ聞いてみなければわからんか……。
その時、扉の外から侍女の声が響いた。
「陶謙様、北郷殿をお連れしました。」
「うむ、通せ。」

扉が開き一刀が入ってくる。

そして、こちらに向かって歩く姿は隙がなく、かつての親友の姿を思い出す。

なるほど……流石は一心の弟子といった所か。

「ご苦労だったな。とりあえず、座りたまえ。」

「はい、失礼します。」

そう言って、一刀は腰に下げた千代桜を円卓に立て掛け、一礼すると静かに座る。

ふむ……まあ、一心が弟子に礼儀を教えていないわけがないか。

さて、どんな話が聞けるのやら……。

side out

side 陳珪

「はい、失礼します。」

そう言って彼は一礼すると静かに座る。

その動作に無駄はなく、礼儀作法も抜かりはない。

流石は一心様の弟子。

……どこかの馬鹿息子に垢を煎じて飲ませてやりたい所だが、恐らく無駄であろう。

まったく……私はどこで教育を間違えた？

……まあ、良い。

今はそんなことより彼だ。

雰囲気はどこと無く一心様に似ているが、まだ幼さの残る顔立ちで、未熟さが隠しきれていない。

しかし、その眼光は鋭く、彼が一心様の弟子であることは良くわかる。

「まずは陶謙様、この度は私のような者を城に招いて頂き、厚く御礼申し上げます。」

そう言って彼は義遠様に頭を下げた。

本当に礼儀の良く出来た子だ……。

隣にいる義遠様も感心している。

まあ、一心様が鍛えた子ならば当然と言えば当然だが……。

「うむ、気にせんでよい。して、一刀よ。話をする前にいくつか確認するが良いかな？」

「はい、構いません。」

義遠様の問いかけに彼は真っすぐ目を見て答える。

「まずは、我等が知っている北郷　一心は、北郷御影流剣術継承者かつ師範代であったと記憶しているが、相違ないか？」

「はい、間違いありません。」

「では、彼が持っていた刀剣は、君が持っている刀剣に良く似ていたが、その刀剣の名は何と言う？」

義遠様が彼の剣に目を向ける。

「これですか？」

彼は脇に立て掛けた刀剣を手に取る。

「……これは我が北郷家に代々伝わるもので、北郷御影流剣術継承者しか持つことの許されない刀です。名は千代桜。私はこれを、北郷御影流免許皆伝の証として、師から譲り受けました。」

愛おしそうに千代桜を見る彼の姿からは、本当に大切な物なのだという感情が伝わってくる。

「……権陽、これはもう間違いないと見て良いだろうか？」

義遠様は私を見てそう言う。

「はい、よろしいかと。彼の説明を聞く限りでは、我等の知っている千代桜の話と相違点は見られません。」

間違いない。

彼は本当にあの一心様の弟子なのだ。

私は胸が熱くなるのを感じる。

「ふむ……一刀よ。どうやら我等の知る一心と、君の知る一心は同一人物のようだな。……感慨深い物だ。」

義遠様はそう言って顔を伏せた。

恐らく、一心様を思い出しておられるのだろう…。

「あの……陶謙様？とりあえず、お隣の方は何とお呼びしたら……？」

彼は困った表情で義遠様にそう言う。

私としたことが……そういえばまだ名乗っていなかったな。

「失礼した。我が名は陳珪、字は漢瑜（かんゆ）。今は義遠様の将として仕えている。」

「ありがとうございます。すでに知っておられるでしょうけど、私の名は北郷　一刀です。字はありません。」

そう言って、彼、一刀は私に頭を下げる。

本当に良く出来た子である。

あのくらいの歳でここまで出来る者は中々いない。

それを平然とやってしまう辺り、一心様と良く似ている。

「ところで、お二方は私の師とどういったご関係で？」

不思議そうな表情で一刀が問いかける。

「まあ、至極当然の疑問だな。」

義遠様は納得したような表情でそう言われた。

「さて……何から話したら良いものか……」

そう呟く義遠様はとても穏やかな顔だった。

side　out

ｓｉｄｅ　一刀

陶謙様が話された内容は、俺にとって驚愕に値するものだった。

話を要約するとこうだ。

３０年前、俺と同じように―まあ、俺自身自覚はないが―流星に乗って現れたのがじいちゃんだった。

陶謙様は突然のことに慌てたが、じいちゃんと話す内に意気投合。

じいちゃんは陶謙様と行動を共にし始め、ちょうどその頃に陳珪様とも知り合ったらしい。

当時、陶謙様はこの幽州で治安維持のため、軍を率いて賊討伐を行っていた。

そこに協力したのがじいちゃんだった。

話を聞く限りでは、じいちゃんの実力は当時からかなり高かったらしく、その活躍は一騎当千だったそうだ。

そして、じいちゃんが陶謙様と行動を共にしてちょうど一年がたった頃、後漢皇室から直々に陶謙様へ指令が下る。

その内容は、韓遂という者が起こした後漢皇室への反乱を鎮圧せよとのことだった。

陶謙様達は直ちに軍を編成し、韓遂の反乱軍がいる涼州へ出陣した。

出陣した当初、まだ反乱軍の勢いは凄まじく、陶謙様達も負けが続いた。

しかし、陶謙様達はそれでも一年あまり戦い続け、徐々に反乱軍の勢力を削っていった。

流石に反乱軍も、一年にも及ぶ戦いによって受けた損失は甚大であり、士気もかなり下がっていた。

そこにトドメを刺したのがじいちゃんだった。

この時じいちゃんは将軍として陶謙軍に参加。

北郷隊と名付けた隊を率いて反乱軍と衝突し、見事に韓遂を討ち取った。

こうして一年にも及ぶ反乱軍との戦も終わりを迎え、陶謙様はこの功績として幽州刺史を務めることになった。

陶謙様はじいちゃんに何か役職を与えようとしたが、じいちゃんはそれを全て辞退。

そして、じいちゃんは元いた世界でやらねばならぬことがあると言い残し、じいちゃんを迎えにきたと言う妖術師と共に、光の中に消えていった。

これが陶謙様の話した全容だ。

「その後、私の師とは……？」

「一度も会っていない。私も権陽もな……。」

陶謙様がそう言うと、目の前の二人はとても寂しそうに笑う。

二人にとって、じいちゃんがどんな存在なのかはよくわかった。

そういえば、以前じいちゃんから、私には、今は離ればなれになっているが、心の底から信用できた者達がいる、という話を聞いたことがある。

それって、陶謙様達のことだったのかな……。

「して、今は一心はどうしているのだ？」

陶謙様の問いかけにドキリとした。

でも……こればっかりは言わなきゃダメだよな。

「師は……一週間前に亡くなりました……。」

俺は覚悟を決め、二人にそう伝える。

「なんと……！」

「一心様が…！？」

二人は目を見開き驚いたようだが、やがてすぐに沈痛な面持ちになった。

「そうか……アイツは逝ってしまったか……。」

陶謙様は落胆した様子でそう呟く。

隣の陳珪様はア然として言葉も出ないようだ。

俺は二人の様子に、不謹慎ながら嬉しくなった。

向こうの世界では、近所の方々以外、じいちゃんは時代遅れの変人として親戚達や様々な人たちにうとまれていた。

だけどこっちの世界は、じいちゃんの実力を正しく理解し、素直に認めてくれる人がいる。

それだけで、俺は胸が熱くなって涙が出た。

「っ！？……すまぬ。君にとっても辛い話だったな。」

陶謙様は俺の顔を見て申し訳なさそうにそう言う。

「いえ……そうではないのです。ただ、この世界ではちゃんと師が評価されていることが嬉しくて……。」

俺が涙を拭いながらそう言うと、二人はとても驚いた表情をした。

「なんと……天の世界はあれ程の男が評価されないのか！？」

「馬鹿な……一心様が評価されないとは……。天の世界はどうなっているのだ？」

二人は信じられないとでも言いたげな表情で俺を見る。
まあ、この世界の住人ならそういう反応になるだろうな。
なんせ俺達の世界とは常識も違う。
……話してみるか。
俺達の世界のこと、親戚達のこと、今までのこと。
俺はそう決めて、二人に語り始めた。

side out

side 陳珪

一刀の話により、天の世界のことはだいたいわかった。

確かに、そこまで平和ならば、武を学ぶ必要はないのかもしれない。
だが、それと一心様が評価されないことは別問題だろう。
しかもそれが親族達なのだから、なんと愚かなことだろう。
しかし、私はそれよりも衝撃を受けたことがある。
一刀のことだ。
同じ子を持つ親として、私は親族達に怒りを覚えた。
例え親がどんな者であっても、子供に罪はない。
にも関わらず、一刀をほって置いた親族達は、人として間違っている。
そして、その時一刀に手を差し伸べた一心様は流石である。
だが、その一心様も亡くなり、とうとう一刀は一人ぼっちだ。
親戚からは愛してもらえず、唯一愛情を注いでくれた一心様はもうこの世にはいない。
あまりにも可哀想ではないか。
我が恩人たる一心様が大事になされた一刀が、こんな哀れなことになっている。

私に何か出来ることはないのか？

その時、私は心の中である思いが生まれた。

「一刀、君はこれからどうするのだ？」

私の問いに一刀は考えるそぶりを見せる。

「……突然だったので、特に考えがあるわけではないですね。」

「なるほど……。ならば、私の家に来ないか？」

そう言うと、一刀は驚いたように目を見開いた。

「良いのですか？ご迷惑になるのでは？」

まったく……気配りが出来るのは良いが、少し自分を蔑にし過ぎなのではないか？

そういう所も含めて色々教えてやらねばならぬと思う。

それに、一心様への恩返しの意味合いもある。

一心様は様々な面で私を育ててくれた。

今度は私が一刀を育てる番だ。

「構わぬよ。私の家にも君と同い年の子がいてな。仲良くしてくれると嬉しい。義遠さまも、そういうことでよろしいですか？」

私は隣で静かに様子を見ていた義遠様に目を向けた。

「良いのではないか？私は貴公の判断に任せるさ。」

義遠様は納得した表情でそう言う。

「では……よろしくお願い致します。」

そう言って、一刀は私を見ながら頭を下げた。

side out

side 陳登

流星の件があった日から一週間がたった。

当初の予定通り、義遠様が天の御遣いを保護したんだが……

「士陽、これはここで良いのか？」

何故かその天の御遣いは俺の家にいる。

「お前……よく働くな……。」

「そりゃあそうさ！タダで住まわせてもらってるんだ。このくらいやらないと罰が当たっちまう！」

ニッ、と笑いながら、一刀は酒の入った木箱を蔵に置く。

最初、一刀が来た時はかなり驚いた。

普通ならば、保護対象者は城の客室に住まうはずである。

にもかかわらず、何故か俺の家に居候することになったらしい。

初めは真面目で固い奴なのかと思ったが、意外と気さくで面白い奴だった。

俺はすぐに一刀を気に入り、真名を教えたが、真名を知らないと言われた時は流石に焦った。

そんな奴いるのかと思ったが、天の国では真名なんてものはないらしい。

真名の意味を教えた時は、かなり驚いていた。

どうやら、義遠様の真名を言おうと思っていたらしく、言ってもいないのに焦っていた一刀の姿は笑えた。

そんなこんなで今に至るが、親父から一刀の事情を聞いた時、大事にしてやろうと思った。

だってそうだろう？

頼れる家族がいないなんて、悲しすぎる。

俺はよく親父と喧嘩のような言い争いをするが、一刀はそんな相手すらいないのだ。

ならば俺がそんな相手になれば良い。

嬉しい時に共に笑い、悲しい時に共に泣き、悔しい時に共に怒る。

これから先、どう転がっていくかわからねぇが、俺は一度“友”と決めた者を見捨てたりしねぇ。

だから、これからも仲良くしていこうぜ、一刀。

～第二話～侍、師の駆けた軌跡を知る（後書き）

士陽君に親友フラグが立ちました。

まあ、ウチの陶謙さん達はこんな感じです。

外史ってことで勘弁してくださいｗｗｗ

～第三話～侍、命の重さを知る（前書き）

お待たせしました！

第三話です。

では、どうぞ！

～第三話～侍、命の重さを知る

side　一刀

陳珪様の屋敷に居候し始めてから、はや三カ月が過ぎようとしていた。

季節的にはもう秋も終わり、冬の足音が聞こえ始めている。

この世界に来て、俺は最初に文字を習うことにした。

この世界の文字は、陳珪様の奥様である美玲（みれい）様に教わっている。

俺も驚いたんだけど、美玲様の本名は盧植（ろしょく）、字は子幹（しかん）。

正史で若き日の劉備と公孫賛を教え導いた、あの盧植である。

陳珪様とは幼い時から知り合いだったそうで、結婚することを約束した仲だったのだという。

でも、両家の親はそんなことを認めておらず大反対だったが、それでも二人は結婚することを諦めず、極秘裏に結婚し士陽を出産した。

しかし、極秘裏の結婚だったため、官職を辞めることが出来ず、美玲様は仕方なく盧江（ろこう）太守を続けた。

そして二年前、美玲様本人の意思とは別に、四府からの推挙を受け北中郎将に任命され、軍を率いて黄巾賊の討伐に向かっていたのだ

が、ちょうど霊帝が小黄門の左豊を軍の監察の使者として派遣してきた。

左豊は美玲様に賄賂を要求したが、美玲様はこれを断ったため、左豊は霊帝に「盧植は戦おうとしない」と讒言(ざんげん)した。

美玲様は怒った霊帝により罪人に落とされ、死一等を免じて官職剥奪で収監されることとなったが、その時動いたのが陳珪様である。

陳珪様は、美玲様が囚人車で都に護送される途中、賊になりきりこれを強襲し、護衛の者達を皆殺しにした後、美玲様を奪還。

陶謙様の領地まで引き返すと、美玲様を人目から遠ざけさせ、世間に“盧植は賊に襲われ死亡した”という噂を流し、追っ手の者達の追跡を見事にかわした。

その後、美玲様は真名である“美玲”を名乗り、陳珪様の下で静かに暮らしている。

……何というか、波乱万丈という言葉しか出てこない…。

でも、俺はあの盧植に学問を教われるんだから、幸せ者なんだろうなぁ……。

そんなこんなでちょうど先程、俺は美玲様に教わりながら今日の分の学習を終わらせ、今は士陽と兵専用の食堂で昼食を取っている。

「お前は毎日よく飽きないよな……。俺だったら三日で逃げ出す自信がある。」

ポニーテールにした赤髪を揺らしながら士陽はそう言って、その手に持つ肉まんにかぶりつく。

「別に俺だって好きであんなことしてる訳じゃないさ。だけど文字が読めなきゃ不便だろ？」

「あん？別にそんなことねぇだろ。文字の読めねぇ奴なんか、この世の中には沢山いるが、皆それでも逞しく生きてるぜ？」

「そうかもしれないけど、俺がそんなんじゃ、いつまで経っても陳珪様の政務の手伝いが出来ねぇだろうが。」

俺が器の中の麺を啜りながらそう言うと、士陽は「うわ…」と言って顔をしかめる。

「真面目だねぇ……。もっと俺みたいに楽しく生きれば良いのに。」

「こればっかりは性分だから仕方ねぇだろ？だいたいお前の場合、ただ単にサボってるだけじゃねぇか！」

「おいおい、失礼なことを言うなよ？俺だって必要なものには参加するさ。他は必要性を感じないだけ。まあ、要するに要領が良いんだよ、俺は。」

「……ものは言い様だな……。」

からからと笑う士陽に呆れながら、俺はそう呟いた。

昼食後の一休みを終えた俺達は、鍛練場に来ていた。

「さて……両者共に準備は良いか？」

陳珪様は俺達二人に視線を向ける。

「いつでも良いぜ！」

士陽はそう言ってその手に持つ漆黒の青龍偃月刀、覇黒（はこく）を構える。

「こちらも同じく。」

俺は腰に下げた千代桜を抜くと、正眼に構えた。

「良いな？では……始めっ！」

陳珪様の合図と共に、俺達は地面を蹴った。

「うおぉぉぉっ！」

叫び声と共に、士陽が覇黒を振り下ろす。

「っ！」

それに反応し、俺が素早く右側に避けると、覇黒が地面を割った。

その隙を逃すはずもなく、俺はガラ空きになった胴に横一閃を放つ。

が、それで終わることなく士陽が体を捻り、体勢を崩しながらそれをかわす。

それを見て、俺は縦横無尽に剣撃を繰り出すが、士陽もそれに対応し覇黒を繰り出した。

一合、二合、三合、四合、……。

絶え間無く激しい打ち合いが続く。

だが、俺は打ち合いには少々自信がある。

北郷御影流の教えの一つ。

『打ち合いになったら敵の初動を狙え』

日本刀というのは、よく世界最強の刀剣と言われるが、無敵ではない。

数多く打ち合えば刃が欠けてしまうし、かなり強い衝撃を受ければ当然折れる。

だからこそ、初動を狙うのだ。

初動の段階では、まだ力の篭った一撃を放てない。

故に、刀の負担を減らせるし、相手に主導権を渡さないのだ。

まさに、素早く小回りの効く刀だからこそ出来る業（わざ）である。

打ち合いが二十合を過ぎた辺りから、士陽は強引に覇黒を押し込んでくる。

だが、俺は愚直に初動を狙い、隙が出来るのをひたすら待つ。

たまらず士陽は一気に後ろに下がり、一旦間合いを取った。

「はぁ…はぁ…はぁ……相変わらず…はぁ…やらしい…はぁ…攻め方だ…はぁ…」

息を整えながら、士陽はそう呟く。

「はぁ…はぁ…きついけど…それが…はぁ…俺の…はぁ…戦い方…だからね…はぁ…」

俺は肩で息をしながらそう言った。

そう、きついのだ。

初動を狙うということは、相手の動きを読み、より素早く判断し対処しなければならない。

それ故、体力の消耗が激しいのだ。

「ふぅ……まどろっこしい打ち合いはもうやめだ。次で決める。」

そう言って士陽は突きの構えを取る。

俺は千代桜を下段に構え、間合いを取る。

士陽が一本前に足を出せば俺が下がり、逆に俺が一本前に出れば士陽が下がる。

互いの間合いの探り合い。

互いに一瞬でも気を抜けば、一気に間合いを詰められ、討ち取られる。

周囲が張り詰めた空気になり、静まり返っている。

その時、士陽が突然動き出した。

「はっ！」

俺は足に力を込め、一気に間合いを詰める。

北郷御影流の奥義の一つ。

歩法『蛇歩（だっぽ）』

獲物に狙いを定めた蛇の如く、地を這うように一瞬で敵の懐に潜り込む、神速の歩法である。

「はっ！」

俺は士陽の覇黒が突き出される前に下段から斬り上げ、覇黒を弾き飛ばした。

無防備になった士陽に千代桜を突き付ける。

「勝負ありだな？」

ニヤリと俺は笑った。

「それまで！」

陳珪様の声が鍛練場に響き渡った。

「チクショー！あとちょっとだったのに！」

士陽はそう言って、そのままその場に寝転がった。

「馬鹿者が。その短気な所がお前の欠点なのだ。間合いもしっかり取れてない内から突っ込んでどうする。」

陳珪様は呆れたようにそう言い放つ。

「だけどよぉ、一刀のあの歩法は反則だろ？避けれねぇよ、あんなの。」

士陽はふて腐れた顔で俺を見る。

「まあ、確かに一見そうかもしれないけど、実はいくらでもやりようはあるんだぜ？なんせ、蛇歩は真っすぐにしか進めないからね。」

そう、一見無敵の歩法のように見えるが、実は欠点も多い。
その一つとして、真っすぐしか進めないというのがある。
真っすぐしか、それも精々１０メートル程しか進めないので、蛇歩を出す直前の体の向きで、動きを予測されれば終わりなのだ。
それに、もし避けられると、急激な加速により視界がぶれ、一瞬敵が認識出来なくなり、大きな隙が生まれてしまう。
このように弱点も多いのだ。
「もし、士陽がこれを見抜けていたら、俺は負けた可能性だってあったんだよ。」
「一刀の言う通りだ。お前はもう少し冷静になれ。これが戦場だったらお前は死んでるぞ？」
「そうは言ってもよぉ、俺は敵を観察してその弱点を突くなんて出来ねぇよ？ましてや戦闘中にやるなんて器用な真似なんて……」
起き上がり士陽は頬をかきながらそう呟く。
「器用じゃねぇとかどの口が言いやがる？お前、覇黒をあれだけ振り回せるくせに、弓の技術も高いじゃねぇか。って言うか、弓なんてまさに敵の隙を突く道具だろ？」
俺はそう言って、その場に腰を下ろし胡座をかく。
「そうは言ってもねぇ……。めんどくせぇし……。」

士陽はぽつりと呟く。

この野郎……本音が出やがった。

「その怠惰さがお前のダメな所だ。いつも言っているだろうが、馬鹿者が！」

陳珪様はそう言って士陽にゲンコツをみまう。

うわぁ……痛そう……。

「一刀、お前の腕は確かに良いが、私からすればまだまだ甘い。今後も己の研鑽（けんさん）を忘れるなよ？」

「御意」

こちらに向き直った陳珪様からそう言われた。

まあ、俺としてもこの程度のレベルで満足してる訳じゃない。

もっと上へ。

そして、いつかじいちゃんを超える。

俺はあらためて心にそう誓った。

side out

side 陳珪

一刀が我が家に居候して、早いようで三ヶ月が過ぎた。

一緒に暮らしてきてわかったが、一刀はまだ人を斬ったことがないらしい。

しかし、一刀の目標を聞いて、私はそれではマズイとすぐに思った。

当時一心様は、仕方ないとはいえ、数多くの人を斬っている。

賊討伐、そして戦。

あの人は、罪のない民達が賊や戦に巻き込まれるのを良しとしない人だった。

だから戦った。

義遠様が統治すれば、きっと民達は幸せになれる。

そう信じ、一刻も早く戦いを終わらせるため、義遠様の敵となる者は容赦なく斬っていった。

もし、一刀が一心様を超えようとするならば、一心様と同じような

志の下、人を斬らねばならない。

でなければ、一心様を超えるなど不可能だ。

一心様と同様に、一刀が天に帰るのかどうかはわからないが、少なくとも当分の間はこの世界で生きるだろう。

その間、私は一刀を少々鍛えようと思っている。

それが、一心様の恩に報いることだと思うから。

故に、私は一刀にこの世界の武人の在り方を教える。

言い方は悪いが、己のために人を斬れなければ、武人としてはやっていけない。

まずは戦場に出て、一刀に人を斬る経験をさせねばならぬな。

そんなことを思いながら、私は部屋で政務を行っていいると、気になる情報を記した報告書が目に留まった。

漁陽郡の方で、黄巾賊が増えてきたらしい。

……これだ。

恐らく、近い内に軍を編成し討伐に向かうだろう。

その討伐隊に一刀も加える。

初陣なので、萎縮して戦えぬかもしれんが、士陽の補佐役としてな

らば大丈夫だろう。
士陽は馬鹿だが、愚か者ではない。
もし一刀に何かあっても、士陽ならば対処出来るはずだ。
そうと決まれば、早速義遠様に相談しなければ。
私は報告書を机に置くと、義遠様の部屋へ向かった。

「なるほど……。確かに貴公の言う通りだ。」
義遠様の部屋に着くなり、私は早速先程の考えを伝えた。
義遠様は納得したように頷いている。
「一心を超える……か。随分と難しいことを目標にしているな……。」
義遠様は顔をしかめながらそう呟いた。
「私もそう思いました。ですが、一刀は本気でしょうな。私にその話をした時の一刀の顔は本気でした。」
そう、あの時の一刀の目は本気だった。
意思の篭ったあの目は、まさに一心様のようで、私自身、少々たじ

ろいだのを覚えている。

「ふむ……ならば致し方ないか……。権陽、賊討伐の軍の編成、及びその指揮権を貴公に与える。今日より一週間後、軍を率いて出陣せよ。」

「御意。」

私は一礼して義遠様の部屋から出た。

急ぎ過ぎだな、私は。

実際、私は一刀のためというより、一心様から与えられた恩を早く返したいだけなのかもしれん……。

そうだとしたら、私は最低だな。

我がことながら、情けない…。

そう思いながら、微かに苦笑する。

さて、一刀と士陽をどう配置しよう……。

美玲に相談してみるか…。

そう決めた私は、妻のいる部屋へと足を運んだ。

ｓｉｄｅ　盧植

権陽から話を聞き、私も正直悩んでいた。

もちろん一刀のことである。

「なあ……まだ一刀には早過ぎないか？あの子は一心様とは違うのだぞ？」

一心様は出会った頃、すでに人を斬った経験をお持ちだった。

だが、一刀は違う。

一刀から聞いた話では、一刀のいた世界は平和だったそうだ。

故に、人を斬る覚悟も必要ない。

だが、この世界は違う。

恐らく、そう遠くない未来、大きな戦が始まるだろう。

そんな時、覚悟のない者は真っ先に殺られる。

だから、権陽が一刀にその覚悟をつけさせたい気持ちもわかる。

だが、それは急いでつけさせるものではない。

我が弟子、公孫賛と劉備には一年かけてその覚悟をつけさせた。
我が息子においては、二年以上も時間をかけた。
人を斬る覚悟を急につけさせようとすれば、その前に心が壊れてしまう恐れがあるからだ。
「わかっている。私が一刀に無茶なことをさせようとしているくらいな。だが、一刀は一心様を超えると言った。故に、近い内に起こるであろう大きな戦にも参加するだろう。しかしその時、その覚悟がないまま参加すれば、　一刀は死ぬ。私はそんなことにはなって欲しくない。だから、出来るだけ早くその覚悟をつけさせたいのだ。」
権陽が顔を歪める。
どうせお前のことだ。
自分のせいで一刀を壊してしまうとでも思っているのだろう。
あの子が壊れるかどうかは、あの子次第だというのにな。
「……もうお前の中で、一刀を賊討伐に出すことは決定事項なんだろう？なら、どう配置するか考えよう。」
「……いつも済まないな。」
「はぁ……」
おもわず溜息が漏れる。

まったく……お前はいつもそうだな？

何でもかんでも自分が悪いと思い込む。

そのくせ、自分がこうだと決めたことならば意地でもやめない。

まあ、だから私はお前から離れられないんだがな…。

幼い頃、私達は結婚の意味も知らないまま婚約した。

その後、互いに成長し、恋仲にはなったが、私は結婚を諦めていた。

当時の私は、幼い頃の約束など、歳を取るにつれ忘れてしまうだろうと思っていた。

だが、コイツは周りの反対すらも無視して、それを実現させた。

何故と聞いたら、そう決めていたから、とあっけらかんと言ったな。

まさか覚えているとは思ってなかったから、極秘裏だったとしても、涙が出る程幸せだった。

そして二年前、囚人車に乗る私を助けるため、賊に見せかけ護衛隊を襲撃し、私を取り戻してみせた。

自分の立場も弁えず、こんな大それたことをして、バレたらどうするつもりだ、と私は怒ったが、それでも、そう決めたから、と言って笑うだけだった。

正直、嬉しかった。

なりふり構わず、私のためだけに行動してくれた。

女として、これほど嬉しいことはない。

故に、私は決めたのだ。

権陽のためだけに生きると。

そして私は真名以外全て捨て、権陽と暮らしている。

今は幸せだ。

それは自信を持って言える。

でも、たまに見せる権陽の辛そうな顔には胸を締め付けられる思いだ。

そして今も、権陽は目の前で辛そうな顔をしている。

……なぁ、権陽？

私はお前を愛しているし、どんな時でも味方であるつもりだ。

もちろん、一刀は大事だ。

わずか三ヶ月だが、私は一刀を本当の息子のように思ってる。

だけどな、一刀以上に、私は権陽、お前が大事なんだ。

だからそんなに思い詰めないでおくれ。

そう思いながら、私は権陽と共に軍の編成を考え始めた。

side out

side 一刀

今、俺は猛烈に緊張している。

一週間前、俺は陶謙様に呼ばれ、賊討伐に参加するよう指示された。

賊討伐をすること自体に異論はない。

賊達には気の毒だが、略奪行為をしてしまった段階で、討伐されるべきだと俺も思う。

だが、問題は俺が初陣であるということだ。

俺は人を斬ったことがない。

俺のいた世界では、人を斬ることは犯罪だし、そもそも斬る必要がない程平和だった。

でも、この世界は違う。

この世界を知って、陶謙様や陳珪様の手伝いをすると決めた段階で、いつか人を斬る日が来ることはわかっていた。

でも、いざこの問題に直面して、こうも恐怖でいっぱいになるとは思ってなかったなぁ……。

「一刀、大丈夫か？」

俺の隣で馬に乗る士陽が心配そうにしている。

「大丈夫だ……と言いたい所だけど、結構緊張してるよ。」

我がことながら情けない。

そう思いながら、俺は苦笑した。

「まあ、お前は初陣なんだし、しょうがないさ。武人なら誰しも通る道だからな。」

士陽はそう言って、いつものように笑う。

「悪いな。まあ、とりあえず頑張るさ。」

「ハハッ、その息だ。いつも通りやれば大丈夫さ。お前の腕なら、

賊程度に遅れを取ることなんてないからな。」
士陽はそう言って前を向いた。
敵はわずか二千程度。
対する俺達は六千の兵を連れている。
確かにこの差を考えれば、なんら心配することなんてない。
ただ……俺に人が斬れるだろうか……？
足手まといにならなきゃ良いが……。

それから一刻程経った時、陳珪様から全軍停止の指示が出た。
俺達は馬を降りると、事前に指示された配置につく。
「一刀、そろそろ来るぜ。」
隣にいる士陽が真剣な顔でそう言った。
来るか……。
俺の心臓は張り裂けそうなほど鳴っている。

その時、遠くから賊のものと思わしき雄叫びが聞こえた。

それと同時に、先遣隊がこちらに帰還する。

どうやら、作戦の第一段階は成功のようだ。

作戦の内容は至ってシンプルで、本隊はU字型の陣形を取り茂みに隠れ、先遣隊が賊達をU字の中心まで引き付け、賊達が釣られた所を一気に飛び出し撃退する。

シンプルだが、タイミングが重要な作戦だ。

とりあえず、その第一段階は終了した。

後は陳珪様の合図を待つのみだ。

……来たっ！

賊達は何も考えていないのか、先遣隊を追っている。

「全軍、突撃！」

陳珪様の合図が出た。

「良し、俺達も行くぞ！」

「「「おおっ！」」」

周りの兵達が雄叫びを上げ、走り出す士陽に着いていく。

俺は心に靄(もや)を残しながら、急いで士陽の後を追った。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

俺は今、一人の賊と対峙している。

賊はどう見ても素人で、いつもなら一瞬で片が付くような相手だ。

だが、俺はそんな素人に苦戦していた。

周りは血の匂いと悲鳴で溢れている。

これが戦場。

俺は完全にこの雰囲気に呑まれていた。

極度の緊張で手足は震え、まともに刀も振るえない。

「おおおっ！」

雄叫びを上げ賊が突っ込んで来る。

頭が真っ白な俺は、ただ振るわれる剣を受け止めることしか出来ない。

その時、突然賊の頭に矢が刺さった。

「ひっ！」

俺はおもわずのけ反る。

「一刀！大丈夫か！？」

声がした方へ振り向くと、士陽が弓を構えていた。

正直、士陽は凄い。

近くの敵は覇黒で斬り裂き、遠くの敵は背負った弓で撃ち抜く。

普段の士陽からは感じられない鋭さが、そこにあった。

それに比べて俺は……情けない。

悔しさを胸に秘め、とりあえず士陽に声をかける。

「すまん！大丈夫だ…っ！」

俺は気付いた。

士陽の後ろから迫る一人の賊を。

士陽は…気付いてない！？

ヤバイ！

アイツが殺られる！

……そんなこと……させてたまるか！

俺は蛇歩で賊に急接近し、そして……

「ぐぁっ！」

返り血が胴着に飛ぶ。

斬った。

とうとう斬ってしまった。

人を、この手で……。

俺は呆然と倒れた賊を見つめていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　陳登

油断した。

まさか後ろから来るとは……。

「一刀、助かっ……」

一刀の表情を見て、俺は言葉を失った。

呆然と倒れた賊を見るその目に写るもの……それは恐怖。

そうだ、コイツは今日が初陣だ！

そして、今、初めて人を斬ったんだ！

「……一刀、下がれ。戦いはもうじき終わる。ここは俺達だけで大丈夫だ。」

「……済まない。」

ぽつりと呟き、足早に本陣に戻る一刀を見て、俺は自分に対して怒りが沸いた。

当初、俺は徐々に戦場に慣れてもらおうと思っていた。

急に慣れるなんて無理だろうし、俺もそこまで期待していない。

それは、俺も初めての時はそうだったから。

二年間、親父やお袋に着いていき、戦場を知り、そして人を斬る覚悟をつけた。

一刀もそうすれば壊れずに済む、そう思っていた。
だけど結果はどうだ？
戦場で警戒を怠り、賊だからと慢心した。
……何をしているんだ、俺は！？
これでは一刀が壊れてしまうかもしれないじゃないか！？
「畜生……畜生ぉぉぉ！」
俺は怒りを賊にぶつけるように、覇黒を振り回した。

それから半刻後、無事討伐は終わり、俺達は城へ帰還した。
途中、一刀の様子を見るが、俯いていてよくわからなかった。
城に着くと、一刀は親父に呼ばれ、連れていかれた。
どうしよう……。
もし、一刀が壊れてしまったら、俺は…！？
そんなことを思いながら、俺はお袋の部屋へ帰還報告に来た。

「お帰り。無事終わったようで……どうした？」

俺が俯いていることに気が付いたのか、お袋は心配そうに声をかけた。

「俺……俺…っ！」

悔しさが頬を伝う。

「……何かあったんだな？私に言ってみろ。」

お袋の言葉に頷き、俺は今日あったことを話し始めた。

ｓｉｄｅ　盧植

士陽の話を聞いて、だいたいのことはわかった。

それにしても……本当によく似た父子だ。

確かに戦場で油断したことは武人としてあってはならぬことであり、猛省すべきだろう。

だが、それと一刀の問題は別物だ。

それは一刀の問題であって、士陽に責任はない。

だが、コイツも自分が悪いとでも思っているのだろう。

「俺……一刀に助けられて…でも…そんなことを今日させるつもりはなくて…」

よほど悔しかったのだろうか。

先程から泣きながら士陽は語っている。

私はそんな士陽を優しく抱きしめた。

「今は権陽が一刀と話をしているのだろう？ならば大丈夫だ。お前の父を信じろ。」

そう言って優しく士陽の頭を撫でる。

まあ、一刀は権陽に任せるとして、問題は士陽だ。

今、コイツは激しい自己嫌悪に苛(さいな)まれているだろう。

「それより士陽、お前は今日の自分をどう感じた？」

私は腕の中にいる士陽に尋ねる。

「……情けねぇ。俺は大馬鹿野郎だ。武人としても大馬鹿だし、一刀の友としても大馬鹿だ。」

士陽は拳を握りしめ、そう呟く。

まあ、わかってはいるようだな。

「で、お前はこれからどうしたいのだ？……わかっているのだろう？」

「俺は……天下に名を轟かす武人にならなくたっていい。だけど……友の足を引っ張るような情けねぇマネはもう二度としねぇ。だから、必ず強くなる。人が気軽に助けを求めてくれるような、そんな男にいつかなってやる。」

私から離れた士陽は真剣な顔でそう言った。

「お前ならなれるさ。お前は私と権陽の息子だぞ？やってやれないことなど、あるはずがない。」

息子の成長に喜びを感じながら、私は窓の外に目を向ける。

今日は満月だな……。

……後は一刀だけだ。

権陽、頼んだぞ？

side out

ｓｉｄｅ　陳珪

先程、一刀を私の部屋へ連れてきたが、一言も喋らない。

よほど精神的に参っているのだろう。

まさか最悪の状況になるとはな。

これも私の見通しの甘さが招いた結果か…。

だが、起こってしまったことは仕方がない。

何とかしてみせよう……。

「さて、一刀。お前は何故私に呼ばれたかわかるか？」

「俺が……いつまでも情けないから……。」

俯きながら一刀はそう呟いた。

ふむ……これは重傷だな。

「一刀、少し昔話をしよう。」

一刀は意外そうな表情でこちらへ向き直る。

まあ、それはそうか。

この場面で昔話などと言われればそういう顔にもなるな。

「若い頃、お前と同じように、どうすれば人の死に慣れることが出来るのか、という疑問を私も持ったことがある。」

「陳珪様が…？」

一刀は意外そうな顔をしている。

……さては、何か大きな誤解があるようだな。

「一刀、お前もしや、この世界の人間は、初めから人を殺すことに慣れていると勘違いしてないか？」

「違うのですか？戦の絶えない時代ならば、ある程度慣れているものなのでは？」

驚いた一刀の顔を見て、私は一刀が大きな勘違いをしていることを確信する。

「馬鹿なことを言うな。初めから慣れているわけないだろう。皆、少しずつ戦場を経験し、少しずつ折り合いをつけながら戦っているのだ。お前の場合、それが急過ぎただけだ。……まあ、その点については、申し訳なかったと思っている。済まない……。」

「そんな！？顔をお上げください！全ては未熟な俺が悪いのです。」
「ふむ…一刀、昔話の続きだが……私が戦場で人を斬ることに躊躇(ためら)いを持たなくなったのはな、一心様のおかげなのだ。」
「じいちゃんが！？」
だいぶ驚いてるようだ。
いつもなら、我が師と呼んでいるのにな。
まあ、それだけ余裕がないということか……。
「左様。若い頃の私は一心様に聞いたのだ。どうすれば、人を斬ることに慣れるのか……と。」
思い返せば、あの時は私も今の一刀の様だったな。
一心様の言葉がなければ、私はどうなっていたのか……。
「それで……じいちゃんは何て？」
一刀は答えを急かすように身を乗り出した。
「一心様は苦笑しながら言っていた。『人を斬ることに慣れたと感じたことは一度もない。』とね。」
「えっ？」

一刀が間抜けた表情をする。

まあ、そういう反応をするだろうと思っていたよ。

私も同じ反応をしたからな。

「一刀、まず覚えておいて欲しいのは、あの一心様でさえ、人を斬ることに慣れたことはないのだよ。では、一心様は何故あれ程の武勇を戦場で誇ったのか？その答えが、今の武人としての私の原点であり、全てでもある。」

そう、あの時の一心様の言葉が、今の私を創ったのだ。

「……」

一刀は黙って私の話を聞いている。

先程の沈みきった表情ではない。

どうやら……一刀の中で答えがまとまりつつあるようだな。

ならば後一押しか…？

「一刀、例えどんなに正義だなんだと言い繕っても、人を斬ることに正当性などない。それが賊であったとしてもだ。何故だかわかるか？」

一刀は考えるそぶりを見せるが、しばらくして首を横に振る。

「答えは簡単だ。それは自己満足でしかないからなのだ。正義や理

想のためと言う者は、己の正義や理想を守るために人を斬る。困っている人を守るためと言う者は、困っている人を見たくないから人を斬る。結局は全て自分のため。故に、そこに正当性などありはしない。いや、むしろあってはならぬ。どんな理由にせよ、己の意思で斬ったのだからな。ここまでは良いか？」

一刀は静かに頷く。

その目には力が戻っているし、もう大丈夫だろうが、私はどうしても一心様の言葉を一刀に聞かせてやりたい。

「だからこそ、一度人を斬ったならば、二度と躊躇ってはならぬのだ。躊躇うということは、今まで己の自己満足のために斬っていった相手を冒涜しているのと同義だ。一心様が強い理由は、もちろん高い技術があったこともあるが、それを知っていたからだ。一心様は斬ることに慣れていたのではなく、斬った相手に恥じぬよう、躊躇いを捨てていた。だからあれ程の武勇を誇ったのだ。」

当時一心様が私にこの話をされた時、私は一心様が強い理由を驚くほど素直に理解出来た。

そして、それが私にとって大きな転機だったのだ。

本当に……一心様には感謝してもしきれない。

「でも……俺には一つだけわからないことがあります。」

「ほう……何だ？」

「自分が斬った相手に対する罪悪感が、どうしても拭えないのです。

その人が生きた人生を俺の手で奪ってしまった。それが堪らなく申し訳なくて、どうすれば償えるのか……わからないのです。」

一刀は悔しそうに手を握りしめている。

なるほど、一刀の考えはだいたいわかった。

まあ、気持ちはわからんでもないが、その答えは一つしかない。

「一刀、それは無理だ。」

「えっ…？」

一刀は唖然とした表情になる。

「確かに、お前の気持ちはわかる。優しいお前のことだ、それが堪らなく辛いのだろう？だがな、斬った者が具体的に何かを償うなど、出来はしないのだよ。先程も言っただろう？どんな理由があろうとも、己の意思で斬ったのだ。だからこそ、己が斬った者に恥じぬように生きねばならぬ。斬られた者が黄泉で、あんな奴に斬られたのか、と思うような無様を晒してはならぬのだ。それが、人を斬った者に出来る唯一のことだ。」

「己が斬った者に、恥じぬ生き方……」

「そうだ。そして、お前が感じた罪悪感、それは一生拭われることはないだろう。だが、それは武人の運命（さだめ）だ。むしろ、武人はそれを背負って生きていかねばならない。だから武人と呼ばれる者は皆気高く見えるのだ。良いか、一刀。真の武人とは、ただ技術が高いだけではない。高い志と、斬った相手に恥じぬ気高き生き様が、周り

の者に真の武人と呼ばせるのだ。」

これこそ、私が一心様に教わったこと。

今の私の出発点。

「一刀、今日、お前は人を何故斬った？」

「それは……士陽が殺られそうになって……俺はそれが嫌で必死になって……」

「なるほど。ならば、お前はそれを後悔しているか？」

「それはありません。あそこで俺が斬らなければ、士陽を失う所でしたから。」

力強く一刀はそう言った。

うむ、ちゃんとわかっているようだな。

「今日のお前はそのように明確な目的を持って人を斬った。それで良いのだ。これは一心様も言っていたことだが、人を斬る時は、明確な意思を持って斬れ。意思なき剣は、ただの殺人だ。このことを、生涯忘れないで欲しい。」

私は一刀の目を見てそう言う。

一刀の様子を見るに、私が言いたいことは伝わったようだ。

「陳珪様……ありがとうございます。貴方から教わったことを忘れ

ず、これからも弛(たゆ)まぬ努力をしていきます。」

その眼に覇気をたぎらせ、覚悟を決めた一刀のその顔は、まさしく私が知る北郷　一心そのものだった。

もう大丈夫だな。

あぁ、その前に一つだけ言い忘れたことがあった。

「一刀、最後に一つだけ言わせてくれ。私の大事な息子を、士陽を救ってくれて、本当にありがとう。」

そう言って私は一刀に頭を下げた。

side　out

side　一刀

陳珪様の部屋を出た後、俺は城の城壁の上に登り、城下の町を眺めていた。

月明かりに照らされた夜の町はとても美しく、俺はここから見える景色が大好きだ。

「ふう……」

溜息が漏れる。

俺は陳珪様に言われたことを思い返す。

己が斬った相手に恥じぬ生き様。

言葉で言うだけなら簡単だが、実践するとなれば、相当難しい。

だけど、これで一つハッキリしたことがある。

何故、じいちゃんや陳珪様があれほど気高く見えるのか。

二人とも、人を斬ることに慣れた訳じゃなく、斬った相手に恥じぬように生きているから気高く見えるんだ。

俺は……あの二人のようになれるだろうか？

いや、なれるかではなく、なるんだ。

俺の目標は、じいちゃんを超え、じいちゃんが誇れる侍になること。

その道を歩む過程で、沢山の人を斬るだろう。

確かに、今でも人は斬りたくない。

だが、俺はもう斬ってしまった。

後戻りは出来ないし、するつもりもない。

これから、いよいよ本格的に三国時代が始まる。

沢山の英雄達が現れるこの時代で、未熟な俺がどこまで通用するのかはわからない。

けど、俺は負ける気も、死ぬ気もない。

誰よりも強く、誰よりも気高く。

そうでなければ、じいちゃんを超えるなど不可能だ。

もういい加減、甘い自分から生まれ変ろう。

今日から、本当の意味で俺の人生は始まる。

北郷御影流剣術継承者、北郷　一刀の第一歩目。

俺は腰に下げた千代桜を抜き、煌々と光る満月にその刃を向ける。

「じいちゃん、そして先祖の方々、俺はここに誓います。貴方達が誇れる侍に、必ずなってみせると。だから、それまで見守っていてください。」

俺は月光に照らされキラキラ光る刀身を見ながら、誰もいない城壁の上で覚悟を決めたのだった。

～第三話～侍、命の重さを知る（後書き）

今回は難産でした。

命の重さ云々の話はやっぱ難しいですね（ーωー；）

そして、盧植先生はこういう設定にさせてもらいました。

これはご都合主義になってしまうんでしょうか？

まあ、そうだと言われても今更直せませんがねｗｗｗｗｗ

では、次回をお楽しみに！

～第四話～侍、旅立ちの時（前書き）

遅れました！

とりあえず、どうぞ！

～第四話～侍、旅立ちの時

side　一刀

「寒すぎる……。」

隣を歩く士陽がポツリと呟く。

「言うな。俺は今、考えないようにしてるんだ。」

俺は寒さを忘れるため、わざと何も考えないようにしているが、所詮は無駄なことである。

時期的にはもう年末で、雪の積もる外での兵の調練はまさに地獄だ。

さっさと部屋に戻って暖を取りたい所だが、生憎この後に城門の警備があるのでそれも出来ない。

権陽様の方針で、俺達を特別扱いはしないそうだ。

故に、城門の警備、町や城の警邏、馬小屋や武器庫の掃除、等など一般兵と同じことを俺達も順番でやらされる。

身内贔屓しないっていう方針には賛成だし、権陽様の考えもよくわかる。

だが、これだけ寒ければ文句の一つも言いたくなるのは自然なことだろう。

まあ、だからといって何かが変わるわけではないのだが……。
俺はそんなことを思いながら、城門の二階に備え付けられた警備室にいる二人の兵士に声をかけた。
「お疲れ様です。交代の時間ですよ？」
「おぉ！やっとか！今のところ異常はないぜ？じゃ、後は頼んだよ。」
「お疲れ様～。」
そう言って、二人は足早に戻って行った。
「ほら、士陽！やるぞ？お前そっちの窓だろ？」
二つある窓のうち一つの前に立つよう士陽を促し、俺は残った一つの前に立った。
窓と言っても、風を防ぐガラスの扉なんてない。
故に、風が思いっ切り入ってくるので猛烈に寒い。
今、この場にある寒さを凌ぐ道具は毛布のみで、正直ここでの仕事は一番キツイ。
隣にいる士陽はすでに毛布に包まり、全く喋らない。
本人曰く、少しでも体力を回復するためだそうだ。

果たしてそれで体力が回復するかどうかは甚だ疑問だが、言っても無駄なのでとりあえずほって置く。

俺は城門の窓の外に広がる荒野を眺めながら、物思いに耽(ふけ)た。

あの初陣から早いことでもう一年が過ぎた。

この一年間、俺は本当に色々なことを学んだ。

文字の読み書きがある程度出来るようになった俺は、義遠様や権陽様の政務を手伝い始めた。

ちなみに、二人の真名は俺の１６歳の誕生日に教えてもらった。

政務の手伝いをするうちに、最近は政治というものもある程度理解してきた。

おかげで、今の世の中の政治がどれだけ腐敗しているのかがよくわかったよ。

最初は、ここまで汚職で溢れてるのに、何で誰も摘発したりしないんだと思っていたけど、よく考えたら中央が腐ってる段階で摘発する場所なんてすでにないことに気が付いた。

本当、世も末とはまさにこのことである。

こんな有様じゃ、そりゃあ賊も増えるよなぁ…。

だけど、その賊もほって置くことは出来ない。

いくら政治が乱れたからといっても、善良な民から略奪して良い理由にはならないからだ。

故に、賊討伐も引き続き行っていて、俺もそれに参加している。

やはり人を斬ることには慣れないが、それでも躊躇いは捨てたつもりだし、少なくとも初陣の時のように戦場で震えることはなくなった。

これでまた一歩じいちゃんに近付けたなら、不謹慎だけど嬉しい。

義遠様曰く、俺は将来的に兵を率いる将軍になってもらいたいらしい。

俺にそんな器があるかどうかはわからないが、いざなった時、何も出来ないと困るので、半年前から美玲様に兵法や軍務に関することを教わっている。

流石美玲様と言うべきか、俺みたいな凡人でもわかりやすく教えてくれる。

おかげで、最近は戦場でも敵の動きが読めるようになったし、俺のいる部隊でも独自の策を提案できるまでになった。

まあ、じいちゃんを超えるなら、いつか自分の隊を率いて活躍しないとなぁ…。

超えるべき壁はまだまだ高いけど、こうやって日々積み重ねていけば、いつか届くはずだ。

そのためにも、もっと鍛錬を積んで、強い奴と戦って、自分を高めていこう。

じいちゃんにも言われただろう？

俺はまだまだこれからなのだ。

真の侍に、いつかなるために……もっともっと上へ。

そんなことを考えながら、俺は警備を続けた。

五日後、俺は義遠様の政務を手伝いながら、気になる報告書を見つけた。

「あの……義遠様？聞きたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「む？何だ？申してみよ。」

義遠様はその手の報告書から目を俺に移す。

「この報告書にある陶商（とうしょう）様とは……義遠様のご子息の方ですか？」

「おお！義雄（ぎゆう）のことか！そういえば、まだ貴公には紹介していなか

ったな？」

義遠様はそう言って、嬉しそうに語りだした。

名は陶商　字は示葉(じょう)。

義遠様の一人息子だそうだ。

気遣いが良く、状況判断能力に優れていて、頭も良いため、今は徐州の刺史として働いている。

それを聞いて、俺は少々疑問を感じた。

俺の記憶が正しければ、正史の陶商ともう一人の息子、陶応は出来が悪かった。

だから陶謙は、徐州を自分の息子には渡さず、劉備に渡そうとしたはずである。

俺はてっきり、遠くない未来に、義遠様が黄巾賊の討伐のため、徐州刺史に任命されるとばかり思っていた。

そう思っていたからこそ、徐州については何も調べなかった。

ところが、実際の陶商さんは優秀で、義遠様の代わりに徐州刺史になっている。

そして、驚いたことに陶商さんは幼い時にじいちゃんと会ったことがあるらしい。

義遠様曰く、陶商さんはじいちゃんに良く懐いていたらしく、じいちゃんから色々教わっていたようだ。

これらをふまえて、俺は一つの仮説を建てた。

この世界は、ただ単に俺達がいた世界の過去というわけではなく、全く別次元の世界、世間的に言うパラレルワールドなのではないだろうか？

そして、今いる世界はじいちゃんの介入によって、本来の歴史とは変わった未来になったのだ。

ということは、俺の持つ三国志の知識はあまり当てにならない可能性がある。

困ったな……。

実はこの状況、ヤバイんじゃないか？

「一刀、聞いておるか？」

「っ！？」

義遠様の声で我に返る。

「大丈夫か？お前は良く頑張っているからな。疲れが溜まっているのではないか？」

義遠様は俺に心配そうに声をかけた。

「いえ、大丈夫です。すみません、自分で聞いておきながら、ぼうっとするなど……」

いかんな……。

深く考え込み過ぎて周りが見えなくなるのは俺の悪い癖だ。

「大丈夫なら良いのだが……。あぁ、そういえば私の孫も紹介していなかったな。ついでだから紹介しておこう。」

「お孫さん……ですか？」

「うむ。名は陶応（とうおう）、字は幹路（かんじ）。コイツは本当に優秀でな。恐らく、歴代陶家の中で一番頭が切れるだろう。」

ちょっと誇らしげに言う義遠様の姿から、本当に優秀なんだということがわかる。

って言うか、陶応が孫！？

確か陶応って陶謙の息子だったよな？

……やっぱり少しずつ俺の知ってる三国志とズレてる……。

「そうなんですか……。」

うーん……訳がわからん。

……まあ、良い。

とりあえずゴチャゴチャ考えるのは後だ。

俺はそう思いながら、今は義遠様の手伝いを優先した。

義遠様の手伝いを終えた後、俺は権陽様の家の自室で義遠様の話について考えていた。

陶商が徐州の刺史だったこと。

陶応が義遠様の孫という立場だったこと。

この二つだけでも十分おかしい。

もし、昼間俺が建てた仮説が正しいのだとしたら、同じ三国志の世界でも、全く違う結末を辿るかもしれない。

何がどう転がるかわからないことが、こんなに恐ろしいことだなんて思いもしなかった。

「俺は……これからどうすれば良いんだ……？」

おもわず呟いてみたが、その答えは出るはずもない。

勿論じいちゃんを超えるという目標を変えるつもりはない。

でも、それだけで良いのだろうか？

この一年間、俺は確かにこの世界で生きていた。
様々な人の手を借り、様々な人の優しさを受け取り生きていた。
俺は……彼らに恩を返したい。
でも、どうすれば良い？
それは、歴史を変えてまですべきことなのか？
そもそも、歴史を変えても良いのか？
グルグルと頭の中で自問自答するが、一向に答えは出ない。
ふと千代桜を見つめる。
じいちゃんはどのように考えていたのだろう？
俺と同じようにこの世界に来て、何を思い、何を成すため剣を振るったのか？
「あぁぁっ！わかんねぇ！」
おもわず叫んでしまう。
その時、部屋の扉の外から声がした。
「一刀、今入っても良いか？」

士陽？

どうしたのだろう？

夕食はまだのはずだし……。

「あぁ、良いぜ。」

俺はそう言って扉を開けると、そこにはお茶とお菓子を持った士陽がいた。

「よう！ちょっと良いもん貰ったんだ。一緒に食おうぜ！」

士陽はそう言って、ズカズカと部屋に入ってくると、机にお茶とお菓子を置いて椅子に座った。

「お前……夕食前に良いのかよ？美玲様に怒られるぞ？」

「良いの良いの！それより大事なことがあるからな。」

「大事なこと？」

腰掛けた椅子に深く座りながらニッコリと笑う士陽に、俺は訝(いぶか)しげな表情を浮かべる。

「お前……最近どうした？」

「えっ？」

「特に今日なんか、随分と悩んでたみたいじゃねぇか。」

「っ！？」

驚いた……。

バレてたのか？

「何でわかった？」

「お前な……周りに人がいるのに、それさえ気付かずあれだけ考え込んでる姿を見りゃ、普通気付くわ。」

呆れた表情で士陽が皿のお菓子を摘む。

「それにな、親父やお袋、義遠様まで心配してたぞ？」

「義遠様達まで！？」

マジか……。

皆に心配をかけてたなんて……。

「で、一体どうしたんだ？」

士陽が真剣な表情を向けてくる。

「……」

話しても良いのだろうか？

未来から来たこと。

この時代に誰がどんなことをするのか知っていること。

だけど、俺の知ってる歴史と変わってしまったこと。

普通こんな話、誰が信じる？

「言えないか……？」

俺の前に座る士陽の目が俺を見透かすように感じる。

言いたい。

言ってしまいたい！

言って、話をして、俺がどうすべきか教えて欲しい！

けど……拒絶されるかもしれない。

俺はそれが怖いのだ。

「なあ、一刀……。俺はよ、お前の親友であるつもりだ。だけど俺はお前じゃねぇから、お前が何で悩んでるのかはわからねぇし、具体的に力になれるかどうかもわからねぇ。」

力強い士陽の視線に、俺はただ黙って話を聞く。

「けどな、お前が悩んでる時、話くらいなら聞いてやれる。俺はお前がどんな話をしようと馬鹿にする気はねぇし、お前がくだらねぇ

嘘をつく奴じゃねぇのも知ってる。だから、話してみろよ、親友。」

本当に……俺はこの世界に来て良かった。

土陽なら大丈夫だ。

話してみよう。

何たって、コイツは俺の親友なのだから……。

side out

side 陳登

「なるほどねぇ……。」

一刀の話を聞き終えた俺は、感慨深くそう呟いた。

まあ、確かにこんな話は言えねぇよな。

下手したら、頭のおかしい奴だと思われるし……。
でも、多分一刀は嘘をついていない。
コイツの目を見ればわかる。
これは嘘をついてる奴の目じゃない。
それに、真面目なコイツがこんな無駄な嘘をつくはずがない。
それにしても……まさか一刀が未来人だったとはねぇ……。
まあ、流星に乗ってきた段階で、この世界の住人ではないと思ってたけどな。
「信じられないだろ？自分で言っててもおかしな話だと思うしな……。」
自嘲気味に一刀は苦笑する。
確かに、にわかには信じられねぇ話だろうな。
だけどな？
「いや、俺は信じるぜ。」
「えっ？いや、でも…」
「でもじゃねぇよ。信じるって言ったんだ。嘘じゃねぇんだろ？」

「あぁ…。」

俺は一刀の話を信じる。

どっちにしろ、疑った所で得る物なんて、何もねぇからな。

「で、結局お前は何に悩んでるわけ？」

一刀の話でイマイチよくわからん所が、ここ。

今の話で、悩まなきゃいけない所なんてあったか？

「俺は……何をすべきか、わからなくなったんだ……。」

沈んだ表情で一刀がそう呟く。

「じいちゃんを超えたい気持ちは今も変わらない。でも、それだけじゃダメだと思ってる自分もいるんだ……。俺は……この世界で世話になった人に恩返しがしたい。少なくとも、世話になった人が悲しい思いをするようなこの時代を、変えたいと思ってる。」

それが本心か。

相変わらず真面目だねぇ……。

誰も恩返しなんて求めてないのにさ。

「なら、お前が君主になるなり、この時代を平和に出来そうな君主に仕えるなりすれば良いじゃねぇか？」

そう、それだけの話だ。

それだけなのに、何故悩む？

「さっきも行ったろ？俺が動けば、本来在るべきはずだった歴史が変わってしまう。それは俺がこの世界の住人じゃないからだ。もし、俺の知らないことが起きた場合、俺は世話になった人に迷惑をかける可能性がある。迷惑で済めば良いけど、下手したらその人が死んでしまうかもしれない。俺は……それが怖いんだ……。」

一刀は目を伏せそう言った。

あぁ、なるほど……。

だいたいわかった。

それがお前の悩みか。

……気にくわねぇな。

「らしくねぇな。」

「えっ？」

一刀が驚いた表情でこちらを見る。

「俺は、歴史の流れがどうとか、そういう小難しい話はよくわかんねぇ。けどな、これだけはわかる。お前は一つ勘違いしてるぞ？」

「勘違い？」

一刀は驚いて目を丸くする。

馬鹿野郎め。

普通気付くだろうが……。

「確かに、未来人のお前にとっては、知っていることと違う結果になりゃ困るだろうさ。お前のことだ、その知識を使って、ある程度予測して行動するだろうからな。」

「まあ……そうだな。でも、俺のことは別に良いんだ。正直な話、俺の知ってる歴史は、もう当てにならないと思ってる。だから、これからはそれに頼らず、自分で周りを見て生きていかなきゃならない。でも、俺が行動することで、歴史が変わって誰かに迷惑がかかったらと思うと、俺はどうすべきか、わからないんだ……。」

一刀は悔しそうに拳を握る。

「お前……そこまでわかっておきながら、肝心要の部分で勘違いしてんじゃねぇよ。お前からしたらこの時代は過去のことかもしれねぇが、俺らにとってはこの時代が今なんだ。」

「っ！？」

一刀は何かに気付いたように息を呑む。

やっと気付いたか、馬鹿野郎め。

「迷惑とかそういう話じゃねぇんだよ。俺達は俺達のやり方で今を

生きていく。例えその途中で死んだとしても、それは他でもねぇ自分の責任で、お前は関係ないんだ。それとも、お前は誰も犠牲にならないやり方を知ってるのか？」

「……知らない。って言うか、そんな方法あるわけがない。」

わかってるじゃねぇか。

まったく……苦労かけさせやがって。

「なら、お前のやりたいようにやれよ。未来が変わる？ハッ、だからどうした。どうせ先のことなんざわからねぇんだ。だったら、今自分がやりたいことをやった方が、よっぽど健全だ。そうは思わねぇか？」

ニヤリと笑って俺はそう締めくくった。

「お前は……すげぇ奴だな。」

そう言って一刀は苦笑する。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる？」

盧植と陳珪の息子だぞ？

「ハハッ…そうだな。」

一刀が穏やかな笑みを浮かべる。

もう大丈夫だな。

「まったく……せっかくの茶が冷めちまったぜ。」

俺は苦笑しながらそう呟いた。

それにしても……まさか一刀が時代を変えたいと言い出すとはな……。

多分、近い内に一刀は義遠様の城を出る。

一刀の性格から考えて、自ら君主になるのではなく、誰かに仕えるはずだ。

さて……そろそろ俺も身の振り方を考えねぇとな……。

そう思いながら、俺は冷めた茶に口をつけた。

side out

side 一刀

士陽に全てを話した翌日、俺は権陽様の部屋へ向かっていた。

俺は昨日、ある決意をした。

この時代に生きていく者として、何か出来ることはないか？

自問自答を繰り返し、すごく悩んだけど、最高の親友が答えをくれた。

気付いてしまえば何てことはない。

アイツの言う通りだ。

少なくとも、じいちゃんが来た段階で、すでに歴史は変わっているのだ。

今更、俺が歴史を守ろうとしても無駄なことだし、例え歴史が変わったとしても、それが新しい歴史に刻まれるだけである。

ならば、俺は俺の道を歩むだけ。

ただ単にじいちゃんを超えるだけじゃなく、じいちゃんから受け継いだ北郷御影流剣術が、この世界でも通用するのだということを証明する。

それが俺の新たな目標。

だけど、そのためには天下に名を轟かす武人達と戦わなければならない。

恐らく、彼らと出会う確率が一番高い場所は戦場だろう。
もし俺の目標を達成させるならば、今いるこの場所から出なければならない。
これは俺の自己満足だ。
だからこそ、義遠様達を巻き込むわけにはいかない。
恩人である義遠様の治める幽州に、要らぬ戦火を撒き散らすことなどあってはならないからだ。
とは言え、俺の我が儘が義遠様の迷惑になる可能性もある。
だから、まずは権陽様に相談をしに行く。
権陽様なら、客観的に判断してくれるはずだ。
そんな思いを抱きつつ、俺は権陽様の部屋の前で声をかけた。
「権陽様、一刀です。ご相談したいことがあります故、参りました。」
「一刀か、入れ。」
「失礼します。」
権陽様の返事を聞いた俺は、そう言って扉を開けた。

「権陽様、お忙しい所申し訳ありません。」

「気にせずとも良い。それより、まずは座りなさい。」

権陽様に促され、俺は椅子に座る。

「して、相談したいこととは何だ？お前の悩み事は解決したと士陽が言っておったが……。」

「そちらはもう大丈夫です。ご心配をおかけしました。今日はそのことではなく、別の案件で参りました。」

俺は権陽様をまっすぐ見据えてそう言った。

「……申してみよ。」

「はい、実は……」

俺は心に抱いた思いを権陽様に伝えた。

権陽様は頷きながら、俺が話し終えるまで、口出しをすることなく聞いていた。

「ふむ……なるほどな。」

権陽様は何故か納得した表情で呟く。

「あの……自分で言うのも何ですが、驚かれないのですか？」

俺がやろうとしていることは、だいぶ突拍子もないことである。

にも関わらず、権陽様は驚かれないとは……。

「まあ、お前の目標を聞いた時から、何となくこうなるだろうとは思っていたからな。さほど予想外なことではない。」

そう言って、権陽様は穏やかな笑みを浮かべる。

「そうでしたか……。なら、もし俺が今すぐ行動を起こした場合、義遠様に迷惑がかかるでしょうか？」

そう、問題はこれ。

もし義遠様に迷惑がかかるなら、また別の方法を考えなければならない。

「いや、特に義遠様が迷惑を被ることはないだろう。お前は特別な役職についているわけでもないしな。」

権陽様はそう言って机にある茶を飲む。

「だが、足りないな。」

「えっ？」

権陽様は茶器を机に置くと、俺に向き直った。

足りない？

一体何が……？

「一心様を超え、天下にお前の剣術が通用することを証明したい気持ちはわかった。それ自体は悪いことではない。だが、それだけでは足りんのだよ。その様では、ただの腕自慢の野望に過ぎない。お前は一心様を超えるのだろう？一心様は常に平和への理想を目指していた。また、そのために剣を振るった。ならば、お前は何を理想とする？」

俺の理想……か。

確かに、そこまで考えてなかったな……。

「そんなに難しく考える必要はないさ。私はお前が世の中に対して、直感的にどうしたいのか聞いているだけだからな。」

考え込もうとする俺に、権陽様は苦笑する。

俺がこの世界に対して、直感的に感じること？

それなら……ある。

「俺には、義遠様や権陽様、そして美玲様のように、民を正しい方向へ導くなんて出来ません。ましてや、君主として君臨し、この時代を変える英雄になる器もありません。でも……」

「……でも？」

「それが出来る英雄を支えることなら出来ます。剣しか取り柄のない俺ですけど、この戦乱の世を終わらせ、皆に普通の幸せを手に入れてもらいたいという願いはあるんです。」

俺に国を率いる器はない。
ならば、それが出来る君主に仕え、少しでも手助けが出来れば本望だ。
「それが……お前の理想か。」
「はい。」
真剣な表情で、権陽様と視線を合わす。
俺の気持ちが伝わるよう、俺は決して視線だけははずさない。
「……わかった。そこまで考えているのならば、最早何も言うまい。私から義遠様に話を通しておいてやる。」
「本当ですか!?」
それは助かる。
権陽様からそう言ってもらえるのはラッキーだ。
これなら、幽州を出ることも、義遠様に許してもらえるかもしれない。
「そういえば、お前はこの城を出て、一体誰に仕えるつもりだ?」
「あっ……」

……しまった。

そこまで考えてない……。

「はぁ……。その様子では何も考えていないな？」

「すみません……。」

呆れた表情で権陽様が見つめてくるが、目を見れない。

俺、詰めが甘いなぁ……。

「……まあ、焦る必要はないだろう。とりあえず、莉昂に周辺の諸侯の情報でも聞いてみると良い。」

権陽様はそう言って苦笑した。

「そうします……。」

俺は恥ずかしさに耐えながら、そう呟いた。

side out

ｓｉｄｅ　陶謙

先日、権陽から一刀の話を聞いた。

まあ、予想通りと言えばそうだが、当初は正直な話、賛同しかねた。

一刀には、ゆくゆく我が軍の将軍になってもらおうと思っていたからだ。

だが、権陽から詳しく話を聞いて、その考えは無駄だと気付いた。

一刀は一心とよく似た所が多々ある。

その一つが、一度決意したことならば、最後まで貫き通す意思の強さだ。

話を聞く限りでは、恐らくもう決意したことなのだろう。

ならば、止めても無駄だ。

また、莉昂の話では、一刀は劉備の義勇軍へ加わるつもりだそうだ。

どうやら、劉備の理念に共感したらしい。

以前劉備に会った時、確かに人徳は感じた。

だが、彼女は甘すぎる。

優しさだけで通用するほど、他の諸侯は甘くない。

あのままでは、ただ時代の波に揉まれて終わりなのではないだろうか？

一刀は馬鹿ではないし、政治的なことも教えたから、それがわからないはずがない。

にも関わらず、何故劉備を選んだのだ？

……まあ、本人なりの考えがあるのだろう。

一心がそうだったからな。

一心も時たま、私達には考えつかない、突拍子もない行動に出ていた。

だが、それは暴走ではなく、一心の確固とした理念に基づいた行動だった。

故に、最終的にはそれによって状況が良くなっていたし、私も幾度となく助けられた。

恐らく、一刀のそれもそうなのだろう。

……懐かしいものだ。

30年という月日は、私にとってあっという間だったが、一心にとってはどうだったのだろうか。

一心は何を思い、何を願って、一刀に己の剣を教えたのだろうか。
奴が死んだ今となっては、それを聞くすべがないことはわかっているが、私はそう思わずにはいられなかった。

side　out

side　一刀

権陽様に相談してから一月が経った。
この一月、俺は莉昂さんに貰った資料で色々と調べた。
後漢王朝のこと。
周辺諸侯のこと。
黄巾賊のこと。
そして、後に活躍するであろう、三国の英雄達のこと。

驚いたのは、三国の英雄達が女だったことだ。

これにより、間違いなく俺の世界の過去とは違うと確信した。

まあ、だからといって今更何かが変わるわけではないけどな。

例え女であっても、英雄達の武勇は凄まじいらしい。

とりあえず、俺より強いってことはよくわかった。

また、それぞれの思想も、わかる範囲で調べた。

皆それぞれに野望を持っていたが、俺が本当に仕えたいと思う者はなかなかいなかった。

ある一人を除いて……。

その一人こそが、劉備　玄徳である。

彼女は大陸に己の覇道を打ち立てるためではなく、ただ民達が笑顔で過ごせる世界を創るため、義勇軍を立ち上げたそうだ。

まさに、俺の理想とする君主の姿だ。

流石、大徳と呼ばれるだけはある。

実際に見てみないとわからないけど、俺は彼女を手伝いたいと直感的に思った。

まあ、確かに甘いと思う部分も多々ある。

彼女は、ならべくは誰とも戦わず、話し合いで解決したいと言っているそうだ。

確かに、この世界が俺のいた世界のように、広く文化的に発展しているならば、それがベストの選択だ。

むしろ、戦争なんて始めようものなら、問答無用で国連からボコボコにされ、その指導者がテロリストとして扱われてしまうだろう。

だが、この世界は違う。

己の理想を叶えたいならば、当然それなりの力を示す必要がある。

しかも、戦わずに話し合いで平和な世を創るなど、出来るはずがない。

故に、他の諸侯からは甘いと言われ、実際俺もそう思う。

だが、時代を変える者は、得てしてそうした異端児だ。

劉備もまた、異端児だろう。

他とは違う考え方をするからこそ、それが時代を切り開く力となる。

事実、少ないまでも劉備に従い、ついていく者もいる。

ならば、俺も彼女の理想のために、剣を振るおう。

それが、俺の理想を叶える一番の近道なのだから。

そう思いながら、俺は劉備についていく旨を、義遠様に伝えに行った。

義遠様に俺の考えを伝えてから一週間後、ついに旅立ちの日となった。

今朝はいつも通り起き、いつも通り美玲様の出す朝食を食べる。

俺、士陽、権陽様、そして美玲様の四人で一緒に食べる朝食が今日で最後だと思うと、少し寂しくなった。

この一年間、二人は俺を本当の息子のように可愛がってくれたし、俺もまた二人を本当の親のように思っていた。

元いた世界では、じいちゃん以外は注いでくれなかった愛情を、二人は俺に注いでくれた。

それが本当に嬉しくて、感謝してもしきれない。

そして士陽は、親友としていつも俺を助けてくれた。

まあ、時には困らされたこともあったけど、それもまた良い思い出だ。

……寂しいけど、お礼を言わないとな。

「権陽様、美玲様、そして士陽、俺はこの一年間、とても幸せでした。教えてもらったことは決して忘れません。本当にありがとうございました。」

俺は感謝の念を込め頭を下げる。

「礼などいらぬ。私はお前を息子のように思っているからな。息子の世話をしただけに過ぎん。」

「権陽の言う通りだ。一刀、帰りたくなったら、いつでも帰って来るが良い。ここはお前の家でもあるのだからな。」

二人は微笑みながらそう言う。

俺は……本当に幸せ者だ。

「あのさ……俺、一刀に言わなきゃならないことがあるんだ。」

士陽はそう言ってニヤつく。

「……何だ？」

何だろう……？

すごく嫌な予感がする……。

「俺もお前と一緒に劉備の義勇軍に加わるわ。」

「……はぁっ！？」

いやいやいやいやっ！

ちょっと待て！

「お前、良いのかよ！お前は俺と違って権陽様の隊の副官だろ！？抜けたらまずいだろうが！」

「大丈夫だよ。義遠様と親父には許可貰ってるし。」

ニンマリと笑う士陽を余所に、俺は権陽様を見る。

「本当だ。コイツがどうしてもと言うから仕方なくだがな。」

そう言って権陽様は苦笑する。

「そうなんですか？……それにしても、また何で？」

俺は士陽に向き直る。

「まあ、俺も自分の可能性ってやつを試したかったのさ。この天下で、俺は一体どこまで通用するのか…とね。」

そう言って士陽は自分の拳を見つめる。

その目は本気のようだ。

なら、俺が口を挟むのは無粋だな。

「まあ、お前がその気なら俺は構わないけど……。」

正直、士陽が一緒に来てくれるのは心強い。

一年間この世界で過ごしたとはいえ、まだ俺はこの世界の常識に慣れてない。

故に、士陽がいれば、かなり助かる。

「話は纏まったようだな？では、一刀、士陽。旅立つ前に、私達からお前達に、餞別の品を渡そう。」

そう言って、権陽様は美玲様に目配せする。

すると、美玲様は奥の部屋から、包み紙に包まれた何かを持ってくる。

「まずは士陽、お前にはこれをやろう。」

権陽様がそれを渡す。

士陽が包み紙を開けると、そこには黒い武官用の士官服と、襟の部分の濃い水色が目立つ白い陣羽織があった。

陣羽織の背中には、金色の糸で龍を模った刺繍（ししゅう）が施されている。

「これは私が若い頃、まだ義遠様に仕えて間もなかった頃に、義遠

様から貰った士官服だ。私はこれを着て、義遠様や一心様と共に戦ったのだ。」

権陽様は懐かしそうに服を見る。

「……良いのかよ？そんな大事な物、俺に渡して……。」

「良い。むしろ、みっともない格好をされる方が私は困る。」

そう言って、権陽様は服を渡した。

「……わかった。親父……ありがとう。」

気恥ずかしそうに士陽はそう言って、大事そうに服を受け取った。

「さて、一刀よ。士陽には私の物を譲ったが、今からお前に渡す物は私の物ではない。」

権陽様は神妙な表情をする。

「そうなのですか？」

てっきり俺も権陽様の物を貰えると思ってたんだけど……まあ、貰えるなら感謝だな。

「これはな……一心様が義遠様の下で将をしていた時に着ていた物だ。」

「えっ？」

……驚いた。

じいちゃんの服がまだ残っていたなんて……。

「この服を纏い、一心様は戦場を駆け抜けた。これもまた思い出の品でな、捨てることが出来ず取って置いたのだが……まさか一刀に譲ることになろうとはな。本当に何が起こるかわからん世の中だ。まあ、譲る相手が一刀なら、黄泉路の一心様も喜んでくれるだろう。」

そう言って、権陽様は包みを開けて、俺に手渡した。

包みに入っていたのは、白っぽい灰色の長ズボン、黒のタートルネック、こげ茶色の目立つ詰襟のロングコート、黒革のブーツ。

じいちゃんはこれを着て戦ったのか……。

「茶色の着物の背中を見てみろ。」

コートのことか？

そう思いながら、俺はコートの背中を見た。

「っ！」

そこには、銀の糸で刺繍の施された、我が北郷家の家紋、島津十字が輝いていた。

「これは……」

今の俺がこれを着ても良いのだろうか？

……いや、良いとかダメとかの問題じゃないな。

北郷御影流剣術継承者としてじいちゃんを超えるなら、この家紋は背負わなければならない。

ならば、俺の取るべき行動は一つだ。

「ありがたく頂戴致します。」

俺は権陽様に頭を下げ、服を抱きしめた。

着替え終えた俺達は、城の南に位置する城門へ向かっていた。

向かう途中、仲間だった兵達や、城下町に住む民達から温かい声援を頂いた。

……頑張らないとな。

いつか必ず、この温かい人達が安心して暮らせる世の中を創る。

それが、俺なりの恩の返し方だ。

そう思いながら、俺はふと隣の士陽を見る。

いつも使っている弓を背負い、後ろ腰には木製の矢筒を革帯に下げ、その手には漆黒の青龍偃月刀“覇黒”を握っている。

対する俺の武器はただ一つ。

革帯をベルト代わりに使い、千代桜をそこに差した。

出奔の準備は万端である。

「もうすぐ城門に着くけど、別れの挨拶は考えたか？」

俺は隣の士陽に話しかけた。

「そんなもん、考えてるわけねぇだろ？その場で感じたことを言うさ」

あっけらかんと言う士陽に俺はおもわず苦笑する。

本当に表裏のない奴だ。

だけど、それが士陽の良い所だな。

一人でそう納得していると、城門が見えてきた。

城門前には義遠様、権陽様、美玲様、莉昂さんがいる。

そして、俺達が乗る二頭の馬が、荷積みを済まして待っていた。

「ほう……二人共よく似合っているじゃないか。」

権陽様は微笑を浮かべる。

「ふむ……二人共、昔の一心と権陽にそっくりだ。まさか、再びこのような光景を目にするとはな……。感慨深いものだ。」

義遠様は顎髭を弄りながらそう呟く。

「一刀、士陽、これからどこに行くか、ちゃんと把握しているかい？」

莉昂さんが俺達の前に立つとそう聞いた。

「はい、徐州の陶商様の城へ向かえば良いのでしたね？」

俺が答えると、

「その通り。今、劉備の義勇軍はそこで補給を行っている。今から行けば、まだ間に合うだろう。」

と、納得した表情で莉昂さんはそう言った。

「そういえば、莉昂の兄貴、義雄さんにはもう話は通ってるのかい？」

士陽は思い出したように尋ねる。

「大丈夫。すでに文は送ってあるし、向こう側からも了解を知らせた文が昨日届いたからね。」

士陽の質問に莉昂さんは即答する。

しかも、俺達の知らない内に、陶商様にも了解を取る手際の良さは流石である。

「一刀、たまには文を送りなさいね。」

美玲様が微笑みながらそう言う。

「お袋……それは俺にも言う台詞じゃねぇのかよ。」

士陽は不思議そうな表情をする。

「ほう……ならば士陽、お前は自分の近況をこと細かに私へ説明してくれるのか？」

士陽に向き直り、美玲様は悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「あー……一刀、これは間違いなくお前の仕事だな。俺には向いてねぇ。ってか、めんどくせぇ。」

「いや、それくらいやれよ。」

俺がツッコムと、義遠様と莉昂さんはクスクスと笑い、権陽様と美玲様は呆れて頭を抱えていた。

「さて……一刀、私から貴公に渡すものが一つだけある。」

「渡すもの？」

義遠様は俺に向き直るとそう言った。

何だろうか？

じいちゃんが使っていた何かがまだ残ってたのかな？

「一刀、貴公には真名がなかったな？」

「まあ……そうですね。」

「それでは何かと困るだろう。故に、私から貴公に新たな名をやろう。」

「えっ…？」

新たな名を？

「まあ、そう慌てるな。何も北郷一刀という名を捨てろと言っているわけではない。」

俺の様子を見て義遠様は苦笑する。

改名するんじゃないなら一体……？

「貴公は、妙名を北郷、そして、真名を一刀と名乗れ。」

「妙名を北郷？つまり、俺に新たな字を名乗れと？」

「そうだ。貴公には私から字を与える。私、権陽、美玲の三人で相談し決めたものだ。一つの信念を貫いて欲しいという私達の願いを込めて、貴公の字を一信（いっしん）とする。」

その読みはじいちゃんの名と同じものだ。

ゾクリとした。

それは俺の尊敬する師の名を継ぐ行為。

今の俺の状況にはピッタリだった。

素直に嬉しい。

また、義遠様達に返さなければならない恩が出来たな……。

「ありがたく頂戴致します。今日より、妙名は北郷、字を一信。そして、真名は一刀と名乗らさせて頂きます！」

声を出して新たな名前を宣言する。

俺は決めた。

生涯この世界で生きていく。

この名はその誓いと覚悟の証だ。

「んじゃ、そろそろ行くか？」

「そうだな……。」

俺は士陽の言葉に返事をすると、用意された馬に跨がった。

「では、気をつけて行くのだぞ。」

「士陽、一刀、体は大事にしなさい。それも兵(つわもの)の勤めですからね？」

俺達を真っすぐ見据えて権陽様がそう言い、その隣で美玲様は美しく微笑む。

「二人共、活躍を期待しているよ。」

莉昂さんはそう言って優しく笑う。

「貴公らは間違いなく、この乱世の英雄になれる。この私が保証しよう。だから、思い切りやれ。貴公らは無限の可能性を秘めているのだからな。」

義遠様はそう言って、俺達の馬を押した。

「では、行って参ります！」

「行ってくるぜ！」

俺と士陽は大声でそう言うと、馬の腹を軽く蹴って走り出した。

城門から離れていくにつれ、寂しさが込み上げるが、俺はそれを耐える。

ここは俺にとって故郷だ。

いつか、胸を張って帰って来れるよう、頑張らないとな。

俺は心にそう誓い、空を見上げる。

そこには、俺達の門出を祝うように、澄み切った青空が広がっていた。

～第四話～侍、旅立ちの時（後書き）

まず、遅れて申し訳ない。

言い訳は致しません。

どんな理由があろうと、遅れたことには変わりはないので。

さて、いよいよ一刀君が旅立ちました。

今回は結構悩んだんですよね（ω；）

陶商、陶応の設定はオリジナルです。

一応理由としては、一心さんが関わったことにより、歴史が微妙に変わった、ということにしましたが、ご都合過ぎますかね？

そして、一刀君と士陽君の衣装ですが、戦国ＢＡＳＡＲＡの片岡小十郎と上杉謙信の衣装を参考にしました。

まあ、あまり派手過ぎないように意識しましたが、士陽君は結構派手かもしれん（；～；）

さて、ここまで書いてきて、私は重要なことに気が付きました。

恋姫キャラが今だ誰も出てねぇｗｗｗ

これは想定外でした。

本編に入る前に、まさかこんなに書きたいことがあるとは、自分でもびっくりです。

ですが、次回からは出てくるのでご安心をｗｗ

まあ、ここまでが“プロローグ”だったと思ってくださいｗｗｗ

では、また次回でお会いしましょう！

～第五話～侍、徐州の地を踏む（前書き）

お待たせしました！

第五話です！

どうぞ！

～第五話～侍、徐州の地を踏む

side　一刀

燦々と照らす日光が、一面に広がる雪原に反射してキラキラと光っている。

俺はその眩さに目をひそめながら、ここから一里程離れた巨大な城門を眺めた。

「ふぅ……やっと野宿生活から解放されるぜ。」

隣でそう呟く士陽は、疲れた表情で陶商様の城を見据える。

義遠様の城を出た俺達は、一か月かけて義遠様のご子息、徐州の刺史である陶商様の城へと辿り着いた。

思い返せばこの一か月、色々あったなぁ……。

道中、村へ行けば賊に襲撃されそれを村人達と共に撃退し、途中知り合った商人の人と一緒に歩けば賊に襲われそれを返り討ちにし、野宿している最中賊の夜襲を受けるがそれを斬って捨てた。

……あれ？

何だか賊に襲われた記憶しかない……。

……まあ、とりあえず陶商様の城に無事着いたんだから良しとしよ

う。

「で、これからどうする？着いたらまず陶商様の所へ挨拶に行くか？」

俺は隣で疲れ切った表情をする士陽に問いかける。

「まずは腹ごしらえだ。最近ロクな飯にありつけてなかったからな。やっとまともな飯が食える！」

士陽は目を輝かせてそう叫んだ。

まあ、確かに俺も嬉しい。

今は季節的にまだ冬なので、当然狩りをしようとしても動物なんてほとんどいない。

故に、主食はもっぱら干し肉などの保存食ばかりだった。

一か月間毎日保存食とか、流石に飽きる。

だが、そのおかげで路銀はほとんど使わなかったため、たっぷり残っている。

「まあ、路銀も結構残ってるし……たまには贅沢するか！」

「良いねぇ！そうと決まれば、さっさと行こう！」

士陽はそう言って馬を走らせた。

飯が食えるとわかった途端に元気になりやがったな……。

やれやれ……。

俺は苦笑しながら、土陽の後を追った。

「うめぇぇぇっ！これ超うめぇ！」

城下町に入った俺達は、とある定食屋に入ったのだが……。

「お前……もう少し落ち着いて食えよ……。」

この通り、土陽がうるせぇ……。

そりゃ俺だって多少は歓声を上げたさ。

まともな飯なんて久しぶりだし、口に入れた時おもわず涙が出たくらいだ。

だが、ここまで酷くない。

「何言ってんだよ！落ち着いてなんてられるかっ！何日ぶりだと思ってんだ！」

「そりゃそうだけど……」

鼻息荒く士陽は語るが、正直周りの視線が痛い。

こっちの身にもなって欲しいが、恐らく今の士陽には何を言っても無駄だろう。

「はっはっはっ！兄ちゃん、良い食いっぷりだねぇ！」

定食屋のおじさんが士陽を見て笑っている。

「すみません、騒がしくしてしまって……」

「良いってことよ！これだけ嬉しそうに食ってくれれば、オイラも腕を奮った甲斐があったってもんだ。」

申し訳ない気持ちでいっぱいの俺に、おじさんはガハハと豪快に笑って俺の肩を叩く。

「それにしても、何でまたこの時期に幽州から来たんだい？別に雪解けを待ってからでも良かっただろうに。」

「確かに、ごもっともな意見ですね。ですが、私達の目的は、今、陶商様の城で補給を行っている劉備殿の義勇軍に加えて頂くことです。恐らく、雪解けと同時に義勇軍はここを出るでしょう。故に、雪解けを待ってからでは遅いので、今回無茶を承知でこの時期にこちらに来た次第です。」

まあ、その無茶の結果、士陽があんなことになっているわけだが…

…。

「ほう、兄ちゃん達は義勇軍に入ろうとしてたのか。だったら劉備様の軍で正解だな。あのお方はお優しい人でな、以前この店にお食事に来られた際、たくさんの客が彼女に魅せられていたよ。あれは良い君主になるぞ？」

おじさんはそう言ってウンウンと一人頷いていた。

やはり、劉備は噂通り人格者のようだ。

まあ、美玲様の弟子である段階で、小物に成り下がるわけがないけどな。

そんなことを考えていると、士陽が声を上げた。

「おっちゃん、おかわり！」

「あいよ！」

まだ食うのかよ……。

俺は士陽のあり得ない食欲に軽く引きながら、溜息をついた。

食事が終わって店を出た俺達は、陶商様の下へ向かっていた。

ちなみに、食事代だけで持ってきていた路銀の三分の二が吹っ飛んだ。

その大半は俺が食ったものではないということを、一応言っておく。

俺の隣で満足そうにしているこの馬鹿（士陽）は、どんだけ食ったんだ……。

「はあ……」

「どうした？溜息なんかついて。」

誰の所為だと思ってるんだ？

まあ、言った所でコイツはわからないだろうけど。

「ん？まあ、良いや。ところで、義雄さんに挨拶に行った後、俺は桃香の所に行くけど、お前も来いよ。」

「は？桃香って誰だよ？」

聞きなれない名前に俺はおもわず聞き返す。

「劉備のことだよ。桃香は劉備の真名だ。」

「はあっ！？お前いつの間に劉備と仲良くなったんだよ？」

俺は驚いて声を上げる。

「あのな……お前、劉備の師匠は誰だ？」

「そりゃあ……ああ、そういうことか。」

よくよく考えてみればわかることだった。

劉備の師は美玲様だ。

故に、その息子の士陽とも面識があったとしても、なんらおかしくはない。

「んで、お前も俺と一緒に来いって言ってんの。桃香にお前を紹介しようと思ってたしな。」

士陽はそう言って肩をすくめる。

なるほど、めんどくさがりの士陽が何故副官という立場を捨ててまで俺に着いてきたかよくわかった。

そういうコネを持ってるなら、すぐにでも自分の武を誇れる地位に行けるもんな。

俺は一般兵から始めようと思ってたけど、そこで士陽と見解の相違があったわけだ。

でも、俺は別に士陽に苛立ったりはしない。

そりゃそうだ。

士陽には士陽のやり方があり、俺には俺のやり方がある。

だからこそ……

「悪いけど、劉備の所にはお前一人で行ってくれ。」

俺は士陽の提案を断った。

「はあっ！？何でだよ！？お前も自分の武がどこまで通用するか試したいんじゃなかったのかよ？」

士陽はあり得ないといった表情でそう言う。

「それは本当だよ。確かに、お前の提案は魅力的だ。お前の紹介があれば、すぐにでも兵を率いる立場になれるだろうさ。でもな、俺は一から始めたいんだ。誰の力も借りず一から始めて、どこまで行けるのか、試したい。」

俺は士陽をまっすぐ見据えてそう言った。

「……最悪、一生一般兵のままって可能性だってあるんだぞ？」

「それでも構わない。それは俺にその程度の実力しかなかったってことだ。その程度で幹部になったところで、他の武将に喰われるだけだろうしね。……これは俺の我儘だ。士陽は自分の道を進んでくれ。」

そう、これは俺の我儘。

士陽がこれに付き合う必要はない。

「……わかった。なら、俺は俺のやり方をさせてもらうぜ？」

士陽はそう言ってニヤリと笑った。

「……悪いな。」

士陽は俺のことを思って提案してくれたはず。

にも関わらず、俺は士陽の気持ちを無下にしてしまった。

俺は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「気にすんな。お前はお前のやりたいようにすれば良い。」

士陽は気にした様子も見せずに微笑む。

やっぱ、コイツは良い奴だ。

俺はそんなことを思いながら、陶商様の下へ歩みを進めた。

side out

ｓｉｄｅ　陶商

「父上、士陽と例の彼が到着したようです。」

政務をしていた私に、我が息子の義景（ぎけい）がそう告げた。

「来たか……。義景、通してやるよう侍女に報告しなさい。それと、お前も準備をするように。」

「はい、父上。」

義景は返事をすると、準備のため部屋を出た。

「ふう……」

私は机の脇にあった茶に口をつける。

それにしても、まさか一心様の親族が再びこの大地に降り立とうとは……。

本当に、世の中何が起こるかわからぬものだな。

３０年前、父上達と一緒に一心様を見送ったことを、私は昨日のことのように覚えている。

私は一心様に、人の上に立つということがどういうことか教わった。

『人の上に立つ者は、人の痛みがわかる者でなければならない。』

それが今の私の理念になり、義景にもちゃんとそれを伝えられた。
一心様には感謝してもしきれない。
「陶商様、陳登様と北郷様をお連れしました。」
侍女の声で我に返った私は部屋に入るよう侍女に促した。
「こんちはー！」
「失礼します。」
一人は士陽君の声とわかるが、もう一人は聞き覚えがない。
私は扉の方へ向き直り、入ってきた二人に目を移すと息を呑んだ。
士陽君が着ている服は、紛れもなく権陽さんが昔着ていたものだ。
そして、士陽君の隣にいる彼は、３０年前、私が慕った一心様と同じ服を着ている。
「ようこそ、私の城へ。士陽君は久しぶりだね。元気そうで何よりだよ。そして……」
士陽君の元気そうな姿に安堵しながら、私は隣の彼に目を移す。
「初めまして。姓名が北郷、字を一信、真名を一刀と申します。突然の訪問にも関わらず、寛容なお計らいに厚く御礼申し上げます。」

彼は礼儀正しく頭を下げる。

その身のこなし、一心様に良く似ている。

「我が名は陶商、字を示葉、真名を義雄と申す。よろしく頼む。」

私はそう言って一刀君を見据える。

「あの……差し出がましいようで申し訳ありませんが、会ったばかりの私に真名を授けてもよろしいのですか？」

一刀君は驚いた表情を浮かべている。

「我が父は君に真名を授けたのだろう？ならば、君はそれに値する人物だということだ。何も気にすることはないよ。」

私はそう言って微笑みかける。

「そうですか……。では、改めて義雄様、よろしくお願い致します。」

一刀君も幾分か表情も和らげてそう言った。

その時、

「父上、準備が整いました。」

と、義景が扉の外から声をかけてきた。

「入れ。」

私の言葉を聞き、義景が入って来る。

そして、そのまま二人の隣に並んだ。

「よう！久しぶりじゃねぇか、義景！」

「久しぶりだね、士陽。そして、初めまして……北郷殿。」

義景はそう言って一刀君に向き直る。

「陶応さん……でしたよね？こちらこそ、初めまして。私は姓名は北郷、字を一信と申します。あと、陶商様のご子息ならば、真名で一刀とお呼び下さい。」

「これはご丁寧に……。僕は陶応、字を幹路、真名を義景と言う。これから僕も君達の同僚になるんだ。もっと楽にしてくれると嬉しい。」

そう言って、義景は一刀君に微笑んだ。

それにしても……この三人が並ぶと、感慨深いものがあるな……。

義景は文官用の士官服を着ているが、その色が通常と違う。

普通、文官用の士官服は薄緑の落ち着いた色だが、義景は全体が灰色で裾の部分だけ黒い士官服を着こみ、膝丈まである深紅の着物を肩から羽織っている。

これは、３０年前、父上が一心様や権陽さんと共に戦場を駆け抜け

た時に着ていた服だ。

「は？おい、義景。お前、これからは俺達の同僚って、一体どういうことだ？」

士陽君が不思議そうな顔をする。

まあ、それはそうだろうね。

このことは私と義景しか知らないのだから。

「そのことについては私が説明しよう。」

私がそう言うと、士陽君と一刀君は私に向き直る。

「義景は確かに、歴代陶家の中で最も頭が切れるだろう。私の後を継ぐのか、その他の場所で重要な地位に就くのか、それはいずれ義景自身が決めることだ。しかし、どっちを選んでも、この子には経験が足りない。故に、劉備殿の義勇軍と行動を共にするよう私が義景に命じたのだ。」

そう言って、私は義景を見る。

表情も引き締まっているし、驕(おご)りもないようだ。

「まあ、俺は何でも良いけどな。」

士陽君はカラカラと笑ってそう言う。

「何でも良いって……。まあ、とりあえず桃香の所へ行こう。彼女は今、城の鍛練場で彼女の部下といるはずだ。では、父上、また後

ほど。」

義景はそう言って、私に背を向け歩き出した。

「義雄様、しばらくの間、お世話になります。では、失礼します。」

「んじゃ、義雄さん、しばらくよろしくな！」

「ふふっ……。二人共、頑張りなさいね。」

性格の違いがよくわかる二人の挨拶に、私は苦笑しながらそう言って、視線を三人に向ける。

「っ！」

私は息を呑んだ。

扉に向かって歩く三人の後ろ姿は、３０年前、私が幼い頃に見た父上達と瓜二つだったのだ。

義景達が部屋から出た後、私は一人苦笑する。

陶家、陳家、そして北郷家。

３０年の時を越え、この三家が再び肩を揃えるとは……な。

これもまた、天命なのだろうか？

私は言い知れぬ嬉しさを感じながら、再び政務に取り掛かるのだった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　陶応

父上の部屋を出た後、僕達は桃香のいる鍛練場に向かっていた。

ちなみに、一刀は途中で一般兵の募集場所へ行くため別れた。

まだ少ししか話せなかったが、良い奴ではあるようだ。

まあ、まだわからないことも多いが、それは追い追い知っていけば良いだろう。

「それにしても、一刀の奴は何を考えてるんだか、さっぱりわかんねぇなぁ……。」

隣でぶつくさと士陽が呟く。

「何がわからないんだい？一から始めて、どこまで成り上がれるか

試したい。実にわかり易いじゃないか。」

僕は士陽に視線を向けてそう言った。

「俺が言ってんのはそんなことじゃねぇよ。その必要性がわからねぇって言ってんだ。何で、わざわざ一から始めるなんていう、めんどくせぇことをする必要があるんだ？」

「……それをめんどくさいことだと思っている段階で、君には一生理解出来ないと思うよ……。」

僕は呆れながらそう呟く。

一刀は少し話しただけでもわかる程真面目だ。

故に、コツコツと物事を進めることに何ら疑問もないのだろう。

一方、士陽は不真面目ではないが、極度のめんどくさがりだ。

故に、自分が必要だと思うこと以外はやりたがらない。

「まあ、アイツの選んだ道なら、俺が口を挟むことじゃねぇけどな。」

士陽はそう言ってカラカラと笑う。

そう、ここが士陽の良い所だ。

他人は他人、自分は自分、という分別を士陽は持っている。

それ故、自分の価値観を人に押し付けたりはしない。

まあ、事務処理は押し付けてくるがな……。

僕が御祖父様の城にいた時、何度士陽に事務処理を押し付けられたことか……。

思い出しただけで溜息が出る。

「なあ、桃香達がいる鍛練場っていつになったら着くんだ？さっきから城の中ばっかり歩ってるだろ？」

「もうすぐ着くさ。……ほら、あの扉を出れば、もう鍛練場だ。」

僕はそう言って、鍛練場へと続く扉を開けた。

鍛練場では、義勇軍の兵士達が、二人の少女の指示の下、陣形の確認を行っていた。

その兵士達の動きを、三人の少女達が端の方で見ている。

僕は士陽を引き連れ、端の方にいる三人の少女達の方へ向かった。

「桃香、調練中に悪い。少し良いか？」

僕はその中の桃色の髪の目立つ少女、桃香こと劉備　玄徳に話しかける。

「あっ！義景君！ううん、大丈夫だよ。どうかしたの？」

「ああ、少し君と話がしたいって奴を連れてきたんだ。」

「私と？」

桃香は不思議そうな表情を浮かべる。

「よう！俺が誰だかわかるか？」

すかさず、士陽が後ろから声をかけた。

「えっ？……っ！士陽君！？」

「ご名答。久しぶりだな、桃香！」

士陽は僕の前に出ると、そう言って微笑んだ。

「うわぁぁぁ！士陽君だ！久しぶりだね！元気にしてた！？」

そう言って桃香は、嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「おう！俺はいつも通り元気だぜ！ところで、お前こんなにすごい義勇軍なんて持って、大したもんじゃねぇか。」

「そんなことないよ。皆が協力してくれたから、ここまで来れただけ。私一人じゃ、何も出来ないもん。」

桃香は恥ずかしそうにそう言って笑う。

「そっか。で、お前はお袋の所を卒業してから何してたんだ？白蓮の噂はよく耳にするけど、お前は一切音信不通だったろ？心配して

たんだぜ？」

「うっ……。それは白蓮ちゃんにも言われたよぉ……。」

ワイワイと騒ぎながら、二人が旧交を温めているのを見ていると、僕の服の裾がクイクイと引っ張られた。

「ん？朱里、雛里、どうした？」

二人のちびっ子軍師殿が、僕に困った表情を向けていた。

「あの……あちらの方はどなたでしょうか？」

朱里こと、諸葛亮はオドオドしながらそう聞く。

「ああ、そうか。君達はまだ彼と面識がなかったね。おい、士陽！」

僕は桃香と話し込んでいる士陽に向けて、声を上げた。

side out

side 陳登

「おい、士陽！」

後ろから義景に呼ばれたので、俺は桃香との会話を一旦中断して振り向いた。

「何だよ？こっちで話してるんだから、邪魔すんなよな。」

俺は苦い顔をして文句を言う。

「別に話すなとは言わないけど、話す前に、自分の名くらいこの二人に名乗ったらどうなんだ？二人が困っているだろう？」

義景はそう言って、義景の後ろからこちらを眺めるちびっ子二人を俺の前に押し出す。

「こっ、こっ、こんにちゅわ！」

「ちっ、ちわ……ですぅ……。」

金髪の少女は、アワアワと慌てながら盛大に噛み、青みがかった銀髪の少女は、個性的な帽子のツバで顔を隠しながら恥ずかしそうに呟く。

この子達は誰だ？

桃香の侍女達かな？

まあ、挨拶されたなら返さないとな。

「おう！こんにちは！」

「「ひうっ！？」」

俺が大きな声で挨拶を返すと、二人は小さく悲鳴を上げ、義景の背中に隠れてしまった。

んなっ、いきなり嫌われたっ！？

何故っ！？

「やれやれ……。君はもう少し穏やかに挨拶出来ないのかい？君の無駄に大きい声に、二人が驚いて萎縮してしまったじゃないか。」

義景は呆れた表情を浮かべて、目元まで伸びた黒髪を掻き上げながらそう言う。

うぜぇ……。

義景の奴……カッコつけやがって……。

「ふっ、二人共、大丈夫だよ！？士陽君は怖くないからね！？」

桃香が慌てて庇ってくれた。

良い奴だなぁ…。

この場で俺の味方はお前だけだ……。

あれ、何だか目元が潤んできた。

「士陽、二人に自己紹介くらいしたらどうなんだ？」

「そう言うお前がまずしろよ。」

「僕は桃香達が父上の城に来た時すでに自己紹介しているから、全員の名を把握している。つまり、今は君待ちなんだよ。」

そう言って、義景はジト目で俺を睨む。

チクショウ……やっぱ口喧嘩じゃコイツに勝てねぇ……。

そんなことを思っていたその時、

「桃香様、調練が終わりました。」

「お姉ちゃん、ただいまなのだー！」

桃香の義勇軍の将なのだろうか、二人の少女がこちらへ向かってきた。

「あっ、お帰り！愛紗ちゃん、鈴々ちゃん！」

桃香は満面の笑みで二人を出迎える。

「あっ、義景のお兄ちゃんなのだ！ん？そこのお兄ちゃんは誰なのだー？」

赤髪の少女が俺を見て不思議そうな表情を浮かべる。

「こら！鈴々！我が義妹が失礼した。しかし、貴公は一体…？」

もう一人の少女が、綺麗な黒髪をなびかせながら、俺にそう尋ねる。

「士陽、今ここにいる者達が義勇軍の将達だ。ちょうど全員いることだし、僕らも目的を果たそう。」

義景が俺の目を見てそう言った。

まあ、それが無難だな。

「劉備殿。」

俺は義景の隣に並ぶと、桃香の目を見てその名を呼ぶ。

「へぇっ！？いきなり改まってどうしたの？」

桃香は俺が真面目な表情になったことに驚いたようだ。

ちなみに、義景の後ろに隠れていた二人は、俺が近付くとさりげなく桃香の後ろに逃げて行った。

……超嫌われてるんだけど……。

どういうことなの…？

……まあ、良い。

今は当初の目的を果たす方が先だ。

「劉備殿、我らを戦列の端にお加えください！」

俺がそう言うと、義景も一緒に頭を下げる。

「ええっ！？ふっ、二人共本気！？」

桃香は驚いた表情でそう聞き返す。

「僕達は本気だよ。士陽も、そのためにわざわざ幽州から徐州に来たんだ。」

そう言って、義景は桃香の目を見つめる。

「みっ、皆、どうしよう？」

桃香は一人では判断しかねるといった様子で、四人の部下達に尋ねた。

「私は桃香様のご判断にお任せします。」

「鈴々もなのだ！」

黒髪の少女と、赤毛の少女は、そう言って桃香に判断を委ねる。

「うーん……朱里ちゃんと雛里ちゃんもそれで良い？」

桃香は背中に隠れる二人にも声をかける。

二人はブンブンと首を縦に振り、肯定の意思を示す。

「……ねぇ、士陽君、義景君。私はね、皆が笑って過ごせる争いのない世の中を創りたいの。私は今までいろんな人からこの考えを否定された。世の中はそんなに甘くない、そんな世の中なんて創れるはずがない、私の考えは甘い幻想だってね？……二人はどう思う？」

桃香は真剣な表情で、俺達にそう問いかけた。

俺はふと隣の義景に目をやる。

義景はどう答えようか迷ってるみたいだな。

って言うか、義景の奴、何で迷ってるんだ？

こんなの答えは一つだろうが。

「別に甘くても良いんじゃね？」

「えっ？」

俺の言葉に桃香は目を丸くする。

「俺には難しいことはわからねぇ。けど、桃香の理想に何か問題でもあるのか？」

「それは色々あるだろう？全ての民を救い、全ての民を笑顔にするなんて不可能だ。悔しいことだが、必ずどこかで歪み生じてしまうからな。」

義景は隣で苦々しげに呟く。

「いや、そうじゃなくてよ、理想ってのはその人が望む最高の形のことだろ？なら、大事なことは、どんな理想かじゃなくて、その理想に近付くためにどんな目標を立て、どんな努力をするかじゃねぇの？」

俺はこの場にいる全員を見渡してそう言った。

金髪の少女と銀髪の少女は何かに気付いたようにハッとした表情をしている。

どうやら、俺の言いたいことを理解してくれたらしい。

「桃香は俺のお袋の弟子だぞ？だったら、馬鹿であるはずがねぇ。全ての民を救うなんて実際に出来ねぇことくらい、お前だって本当はわかってんだろ？」

俺は桃香に視線を向ける。

「……わかってるよ。それでも、弱い民が虐げられてしまうこの時代を、私は変えたい。そのために、私は義勇軍を立ち上げたの。」

桃香はまっすぐ俺を見据えてそう言った。

「なら、お前はそれで良いと思うぜ？理想はあくまでも理想でしかねぇ。けどよ、その理想を現実のものにするための明確な目標と弛まぬ努力さえしっかりやってりゃ、理想通りにはならなくとも、近付くことは出来る。少なくとも、今のこんな世の中よりかは遥かにマシな世の中にはなるんじゃねぇか？」

俺はそう締め括って話し終えた。

「……失念していたな……。だが、士陽の言う通りだ。桃香はどう思う？」

義景はそう呟いて、桃香に視線を向けた。

桃香は俺達の方に向き直る。

「私は……死ぬまでこの理想を追い続けると思う。それでも、二人は私についてきてくれる？」

「僕はそのつもりさ。皆さん、今日からよろしく頼みます。」

義景はそう言って皆に頭を下げる。

「俺はそのためにここまで来たんだ。皆、俺の名は陳登、字が元龍、んでもって真名は士陽だ。よろしく頼むぜ！」

そう言って、俺も義景に並んで頭を下げた。

それにしても……死ぬまで……か。

下手したら、一生甘ちゃん呼ばわりされるかもしれないのにな。

桃香の奴……随分な覚悟を持ってるじゃねぇか。

上等だ。

俺は友の足は引っ張らねぇとあの時決めた。

俺にとって桃香は大切な友だ。

ならば、必ず助けになってやろう。

俺は心にそう決めて、頭を下げるのだった。

side　out

side　一刀

義雄様の下へ挨拶に行ってから、早いことでもう三ヶ月が過ぎた。

士陽と義景の二人と別れたあの日、俺は一般兵の募集場所に向かい、義勇軍の一般兵となった。

当然、扱いも他の一般兵と一緒なので、様々な雑用をやらされる。

まあ、義遠様の城でも同じようなことをしていたので、今更苦にはならない。

もしかして、権陽様はこのことを見越して俺達に雑用をやらせたのか？

だとしたら、権陽様の先読み能力は半端ねぇな。

まあ、実際あの雑用の仕事が役に立っているのは俺だけなんだけどね。

士陽と義景は義勇軍の幹部になったから、雑用なんてしないだろうし。

ちなみに、士陽は関羽将軍の副官に、義景は諸葛亮、鳳統、両軍師の副官になったそうだ。

まあ、コネで副官になったとしても、実際かなり優秀な二人だから、問題はないだろう。

それより問題なのは、俺の上官だ。

「おい！もっと早く動け！死にてぇのか！？」

俺の上官、張元は口汚く罵りながら、一般兵に怒鳴り散らす。

出陣を明日に控えた今、ちょうど最後の調練中で、俺達の小隊は張元（ちょうげん）という者が指揮を執っている。

だが、この張元が問題だ。

彼は元々、漢王朝の武官として、官軍に在籍していた。

だが、自分のいた部隊が黄巾賊によって全滅したため、義雄様の統治する徐州にまで逃げ延びた。

そして、たまたまそこで劉備の義勇軍が兵を募集していたので、参加することにしたそうだ。

本人曰く、軍での指揮経験があるらしく、それ故にこの小隊を任されたようだが、はっきり言って猛烈に迷惑だ。

確かに、指揮はそこそこ出来るようだが、所詮そこそこ程度で、模擬戦をしても他の小隊に勝った試しがない。

しかも、自分の実力不足は決して認めず、いつも俺達一般兵の所為にして怒鳴り散らし、他人よりも自分が成り上がることを優先するような男だ。

正直、何でこんな奴が上官なんだと思うが、それも仕方ないことなのかもしれない。

劉備の義勇軍は、まだまだ弱小勢力だ。

いくら幹部層が実力者揃いだとしても、小隊長単位まではそれが行き届いておらず、早い話が人材不足なのだ。

いくら彼が小者だとしても、指揮が出来る人がいないのだから、彼を任命するしかない。

まあ、その辺りがこの義勇軍の問題点だろうなぁ…。

そんなことを考えながら、俺はゆっくりと隊列に加わる。

「貴様ら！どうして俺の言う通りに動かない！？貴様らが動かない所為で、俺はいつも恥をかいているのだぞ！？」

そう怒鳴りながら、張元は顔を真っ赤にする。

俺は周りに目を配ると、皆ウンザリした表情になっていた。

まあ、そりゃそうだよな。

アイツの指示はいつも突発的で、先を見越していない。

故に、いつも後手に回ってしまう。

それに俺達は毎回付き合わされている。

流石に、俺もウンザリしてきた。

「まあまあ、落ち着いて下さい、張元隊長。」

「あ？何だ貴様！？」

張元の下に歩み寄った俺は、そう言って宥(なだ)めるが、張元は真っ赤な顔で俺を睨む。

超うぜー。

自分の隊の兵を貴様呼ばわりかよ……。

コイツ……マジで一回ぶん殴ろうかな？

まあ、そんなことしたら、もっと話がややこしくなるからやらないけどさ……。

「申し遅れました。私は北郷という者です。隊長は以前、官軍で指揮を執っていらしたのですよね？」

「そうだ！だからこそ、その経験があるこの私が、貴様らを導いてやろうというのに、貴様らは揃いも揃って屑ばかりの集まりだな！？」

そう叫んで、張元はギロリと周りを見渡す。

もう何なのコイツ？

何様だよ？

馬鹿なの？

お前の実力不足を俺達の所為にしてんじゃねぇよ！

俺はそう思いながらも、表面は努めて笑顔を装う。

「そうは言いましても、官軍の兵は最初から調練された軍人でしょう？ですが、ここの義勇兵達は一般の民達の方が多い。故に、練度に差が出るのは致し方ないのではないでしょうか？」

そう言って、俺は張元の目を見る。

まあ、その差をどう埋めるかが、指揮官の腕の見せ所なんだけどな。

「ちっ…今日の調練は終わりだ。」

張元は苛立った様子で舌打ちすると、そそくさと調練場を出て行った。

やれやれ……。

こんな調子で、明日からは本当に大丈夫なのか？

俺は一抹の不安を感じながら、小さく溜息を吐いた。

その日の夜、俺は士陽と義景の二人に会うため、とある酒場に足を運んでいた。

義景とは、この三ヶ月でだいぶ仲良くなった。

まあ、それもこれも、士陽が気を利かせて、今日のような飲み会を頻繁にやってくれたからだけどな。

「一刀！」

声がする方へ目を向けると、義景の隣に座る士陽が満面の笑みで手を振っていた。

「悪い、待ったか？」

俺はそう言って席につく。

「いや、問題ねぇ。なあ？」

「あぁ…。僕達も来たばかりだからね。気にしなくても良いよ。」

士陽と義景は気にした様子もなく、あっけらかんとそう言う。

「とりあえず、飲もうぜ！」」

士陽の言葉に頷き、俺は机にある杯へ酒を注ぐ。

「「「乾杯！」」」

そう言って、俺達は酒に口をつけた。

「なあ、明日はどんな予定になってるんだ？」

俺は義景の方へ向き、酒を注いでやりながら尋ねる。

「この城から二十里ほど西へ行った所に、黄巾賊が陣を張っている場所がある。明日は朝一にこの城を出て、その陣がある手前まで進軍する。」

「戦闘はあるのか？」

「君の所はどうだろう……？。僕の記憶が正しければ、確か君は張元小隊だったよね？」

「よく覚えてるなぁ…。」

俺が義景の記憶力の良さに感心していると、

「うわっ、お前アイツの小隊にいるのか？」

士陽が残念なものを見るかのような目で俺に視線を移す。

「……やっぱりあの人、お前らの中でも評判悪いの？」

「当たり前だろうが！超うぜぇもん、アイツ。」

俺が尋ねると、士陽は忌ま忌ましげにそう言う。

「まあ、士陽の感情的な好き嫌いは置いておくとしても、評判自体はあまり良くないね。実力がないのに威張り散らすあの性格、一応指揮官の経験があるから小隊の隊長をやらせてはいるけど、正直我が軍には要らないね。」

そう言って、義景は溜息を吐く。

「それでも、人がいないから、現段階で辞めさせるわけにはいかないって感じか？困ったもんだねぇ……。」

そう言って、俺は酒を口に運ぶ。

「まあ、僕達の主はまだまだ無名だからね。仕方ないと言えば仕方

ないさ。だけど、この現状はあまりよろしくない。どうしたものか……。」

義景はそう言って酒を一気に呷(あお)る。

……多分、ストレス溜まってるんだろうなぁ。

「つーか、お前の小隊、明日の戦闘は大丈夫なのか？あの野郎がお前を上手く使えるとは思えねぇんだけど？」

士陽は酒が回った赤い顔で俺を指差しそう言う。

「んなもん、俺に言われても困るわ！」

俺はそう言って酒を呷る。

「それについては心配ない。張元小隊は偵察任務について貰うからね。偵察だけの簡単な任務だ。余程の事が起きない限り、戦闘にはならないと思うよ。……まあ、自分の武を試したい一刀には悪いけど、今回はそういうことで頼むよ。」

義景はそう言って俺の杯に酒を注いだ。

「まあ、明日は新生劉備軍の初陣だし、絶対失敗出来ないもんな……。俺もそれくらいわかるから、義景は気にしないで良いよ。」

義景の杯に返杯しながら、俺はそう言う。

「それにしても、偵察任務なんて、張元の野郎がよく引き受けたな。奴の性格なら、“この私にそんなくだらない任務を与えるな”とか

言って、絶対引き受けねぇだろ？」

士陽は不思議そうな表情でそう尋ねる。

俺もそれは思った。

張元は自分が成り上がることしか考えていない。

故に、すぐに成果が出る戦場にこだわるはずだ。

まあ、俺も成り上がる気はあるけど、流石に空気くらいは読める。

新生劉備軍の初陣だからな。

まずは、どんな形であれ、勝利を収めなければならない。

故に、今は個人の武よりも、軍の勝利を第一にすべきだ。

だけど、今日の張元の様子を見るに、絶対そんなことは考えてない、いつも通りの張元だった。

そんな張元をどうやって説得したんだ？

「簡単だよ。“この偵察任務は、今回の初陣で最も重要な任務だ。故に、君以外、任せられる人がいない。”と、僕が言ったら、上機嫌で受けてくれたよ。」

フッ、と思い出し笑いをしながら、義景は酒を呷る。

「なるほど、要するにハッタリかましたのか。」

義景に視線を向けた士陽はニヤリとする。

「人聞きの悪いことを言わないでくれ。嘘は言ってないだろう？」

そう言って、義景は意地の悪い笑みを浮かべる。

まあ、確かに嘘は言ってないな。

張元の実力から考えて、実戦はまず無理だし、かと言って何もやらせなければ文句を言ってくるだろう。

なら、残っているのは連絡係か偵察係のどちらかだ。

まあ、張元の性格を考えて、偵察係が妥当だろうなぁ。

だいたい、連絡係は地味だけど、超重要な係だ。

連絡係がいないと、軍の情報伝達はめちゃくちゃになる。

故に、連絡係はわりと信用度の高い者にしかやらせない。

となれば、張元など論外だ。

「ああ、ちなみに、言い忘れてたけど、副官として一刀を推薦しておいたぞ？」

「はあっ！？」

おいおい！

俺が副官！？

「義景、ちょっと待て！そんな話、聞いてないぞ！？」

寝耳に水とはまさにこのことだ。

「そりゃそうさ。この辞令は明日の明朝に伝達する予定だったからな？」

義景はニヤリと笑って俺を見る。

「いきなり過ぎんだろ……。」

俺はがっくりと肩を落とした。

正直、あの張元の副官としてやってける自信はない。

だいたい奴は俺の話を聞かない。

そんな奴の副官とか、正直やってられない。

「おぉ！一刀が副官か！なら、何があっても大丈夫だな！はっはっはっ！」

人の気も知らず、士陽は俺の肩をバンバンと叩きながら爆笑している。

この酔っ払いめ……！

自分のことじゃないからって余裕こきやがって！

「士陽の言う通りだ。君なら、最悪敵に偵察がバレたとしても対処出来るだろう？」

義景はそう言って杯の酒を飲み干す。

「いや、いくら張元でも、敵にバレるなんてポカはやらかさないだろ！？」

「僕だってそんなことはないとは思うけど、軍師というのは、常に最悪を想定して動くものだ。今回ばかり君しか適任がいないんだよ。大変だろうけど、頼む。」

義景はそう言って俺に頭を下げる。

ずるいな……。

……ここまでされちゃ、断れねぇじゃねぇか……。

「ワハハハ！おい、一刀！義景がこうまでして頼んでんだ。引き受けてやれよ！」

相変わらず士陽は俺の肩を叩きながら笑っている。

……うぜぇけど、今はほって置く。

「……わかったよ。その代わり、どうなっても知らねぇからな？」

俺は義景の顔を見てそう言った。

「君なら悪いようにはならないさ。まあ、何も起きなければそれに越したことはないけどね。」

義景は微笑みながら俺の杯に酒を注ぐ。

「やれやれ……」

俺は溜息を吐きながら返杯をする。

その時、

「見つけたぞ、士陽！」

凛とした声が辺りに響く。

隣に座る士陽がビクリと肩を震わせた。

「これは関羽将軍、こんばんは。」

俺はこちらに歩いてくる少女、関羽将軍に挨拶をした。

士陽は関羽将軍の副官である。

故に、その関係で俺も何度か顔を合わせているので、お互いに顔見知りだ。

「おっ？義景殿と北郷殿、こんばんは。」

関羽将軍は俺達を見るなり顔を綻ばせた。

だが、一瞬で眉間にシワを寄せ、士陽を睨みつける。
「よっ、よう愛紗。お前も一緒に飲むか？」
士陽は顔を引き攣らせながら苦笑する。
「とても魅力的なお誘いだが、私はまだ仕事中だ。」
関羽将軍はとても綺麗な笑顔を浮かべる。
だが、目が笑ってない。
「ところで士陽、お前から私に届くはずの報告書が“一枚も”来ていないのだが、これはどういうことなんだろうな？」
「へっ、へぇー。不思議なこともあるもんだな？」
士陽は関羽将軍から目を逸らしながら、ダラダラと冷や汗を流す。
……あぁ、そういうこと。
また、士陽の“要領が良い”所が出たわけだ。
俺は義景に目を向ける。
義景は呆れたように溜息をつきながら酒を飲んでいた。
「今日という今日は逃がさんぞ！来い！」

関羽将軍は士陽の首根っこを掴む。

「かっ、一刀！義景！助けて！」

士陽は情けない声でそう叫ぶ。

「では、義景殿、北郷殿。ごゆっくり。」

関羽将軍は俺達に微笑みかけながらそう言うと、そのまま士陽をズルズルと引きずっていく。

「さっ、飲み直そうか。」

「そうだね。」

俺達はそう言って、士陽からの視線を無視した。

「裏切り者ーーー！！」

その断末魔を残し、士陽は関羽将軍に連れていかれた。

俺達は何も見ていないし、何も聞こえなかった。

そう思い、現実逃避しながら、俺達は酒を飲み直し始めた。

side out

ｓｉｄｅ　陶応

一刀達（士陽は途中で消えたが）との飲み会を終えた僕は、途中で一刀と別れ、酔い醒ましのために城壁を歩いていた。

僕はふと、月光に照らされた城下町に視線を向ける。

僕の慣れ親しんだこの町とも、今日でお別れだ。

明日からは、桃香達と共に、黄巾賊の討伐に向けて出陣する。

賊討伐が終わっても、多分僕はここに帰ってくることはないだろう。

今後、漢王朝の腐敗により、恐らく群雄割拠の時代が来る。

その時、桃香はどのように動くのだろうか……？

桃香の理想は全ての人が幸せに暮らせる世の中を創ること。

その理想に最も近付くためには、当然だが天下統一する必要がある。

桃香が大陸の王として君臨し、桃香の望む政（まつりごと）をする。

桃香の理想を達成する方法はこれしかない。

故に、明日から始まる黄巾賊討伐で、何としてでも桃香の名を広める必要がある。

明日の出陣は、そのための第一歩なのだ。

……それにしても、感慨深いものだ。

普段はさほど感じなかったが、いざ出陣を明日に控えると、途端に寂しさが胸に込み上げる。

……朱里と雛里は、僕と同等かそれ以上の知略を誇っている。

この劉備軍において、僕の必要性って何だ？

正直、朱里と雛里さえいれば、十分だと思う。

僕がここを出る必要なんてないんじゃないか？

そこまで考えて、僕は歩きながら一人苦笑した。

何を今更考えてるんだ、僕は。

桃香の理想は甘い。

だが、もしそれが現実に実現出来たら、どんなに素晴らしいことか。

桃香に仕えると決めたあの日、僕は確かにそう感じたはずだ。

ならば、僕の為すべき行動はただ一つ。

理想の実現のため、僕の出来うる全てを実行する。
ただ、それだけのことだ。
何を迷う必要がある？
僕はそう思いながら、前方に視線を向けた。
すると、見慣れた姿を見つけた。
彼女は桃色の髪を夜風になびかせ、月光に照らされた城下町を眺めている。
「桃香？」
「あっ……義景君……」
桃香は僕に気付くと、微かに頬を緩めた。
「どうしたんだい？こんな夜に？」
「義景君こそ、どうしてここに？」
桃香は不思議そうな表情で僕に尋ねる。
「ちょっと酔い醒ましに散歩さ。それに……この景色も今日で見納めだしね。」
僕はそう答えながら、桃香の隣に並んで城下町を眺める。

「そっか……。ここは義景君の故郷だもんね？」

「まあ、今生の別れってわけじゃないけど、しばらくは帰って来ないだろうからさ。忘れないために…ね。それより、桃香はどうしてここに？」

俺は横目で桃香を見ながらそう尋ねる。

「私は……どうしてだろうね？」

「えっ？」

俺は予想外の答えに、おもわず桃香の方へ振り向く。

「何かさ……出陣を明日に控えたら、急に怖くなっちゃって……」

「怖くなった？」

「うん……。私ね、士陽君と義景君が私に仕えてくれるって言ってくれた日から、士陽君に言われたことをずっと考えてたの。」

「理想に近付くためにって話か？」

「そう、それ。私ね、士陽君の言葉のおかげで、私の理想は間違ってないって自信が持てたの。」

桃香はそう言って微かに微笑む。

「へぇ……良かったじゃないか。なら、怖いことなんて何もないだ

ろう？」

「違うの……。」

「えっ？」

「そうじゃなくてね、私は不甲斐ないの……。確かに自分の理想には自信が持てた。でも、それを実現するに値する実力が、私にはない。愛紗ちゃんや鈴々のような武も、義景君や朱里ちゃんや雛里ちゃんのような頭脳も、私には……ないっ…！」

頬につたう雫を払い、桃香は悔しそうに顔を歪めながらそう呟く。

「……」

僕は突然泣き出した桃香に驚き、何も言葉が出ない。

「思い返せば、私はいつも誰かに手伝ってもらってた。この義勇軍を最初に立ち上げた時だって、白蓮ちゃんが手を貸してくれたから、実現出来たこと。私は結局……誰かの助けがなければ、何も……出来ない……！もしこの先、皆が大変な時、何も出来ないまま、見ていることしか出来ないって考えたら……私……怖くてっ……」

そう言って、桃香はむせび泣く。

まさか……桃香がそんな悩みを抱えていたなんて……。

普段の明るく元気な桃香の姿からは想像出来ない今の桃香の姿に、僕は衝撃を受ける。

それと同時、僕は自分に対して激しい怒りを感じていた。

桃香はそんな闇を抱えながら、心配をかけまいと、それをおくびにも出さず、皆の前では明るく振る舞っていたのだ。

何が歴代陶家最優秀だ！

主君がここまで追い込まれていたにも関わらず、それに気付かないとは何たる失態だ！

僕はおもわず拳を握り締める。

そして、父上の言っていた、経験不足の本当の意味を理解した。

なるほど、確かに今日、たまたま僕がここを通らなければ、僕は一生桃香の悩みには気付かなかっただろう。

僕は勘違いしていた。

臣下に要求されることは、その頭脳や武だけではない。

主君の心と体を支えることこそが、本当の臣下にあるべき姿だったのだ。

ならば、今僕がすべきことはただ一つ。

「桃香、それは違う。」

桃香の誤解を解いてやることだ。

side　out

side　劉備

私はずっと悔しかった。

何も出来ない、不甲斐ない自分が憎かった。

でも、どうすることも出来なくて、せめて皆が不安にならないように、無理に明るく振る舞った。

だけど、とうとう見られてしまった。

義景君は、こんな私に失望したかな？

まあ、それも仕方ないか……。

主君として、こんな情けない姿を見せちゃったもんね……。

「桃香、それは違う。」

「えっ……？」

義景君はまっすぐ私を見てそう言った。

違う？

何が違うの？

「桃香、もし君が天才的な頭脳と、天下無双の武勇を誇っていたとしよう。その時、君はどうする？」

「どうするって……当然今みたいに義勇軍を立ち上げるよ。だけど、誰の迷惑もかけず、私一人の力で立ち上げる。」

もし、そんな力が私にあったなら、多分私はそうするはず。

「そうか……。なら、一つだけ聞かせてくれ。」

義景君はそう言って私を見つめる。

「もし君にそんな力があるなら、僕達にも頼らないで、たった一人で天下統一する自信はあるかい？」

「そっ、それは……」

私は即答出来なかった。

流石にそれは無理だ。

いくら天下無双の頭脳と武を持っていたとしても、私一人では限界

がある。

「いくら何でも、流石にそれは無理だよ。私の体は一つしかないんだし……。」

「わかっているじゃないか。」

私がそう呟くと、義景君はニヤリと笑った。

「桃香、僕達臣下は、何のためにいると思う？」

「それは……」

明確な答えが出ない。

どのように答えれば良いのか、私にはわからなかった。

「僕達はね、君がこの大陸を平和に出来ると信じて仕えたんだ。皆、君の手助けがしたいんだよ。」

「でも、私には何の力もないよ？」

「そんなことはない。君は本気でこの大陸を平和にしたいんだろう？そのために、義勇軍を立ち上げた。その行動力と、高い志こそが君の力だ。」

義景君はそう言って、優しく微笑む。

私の行動力と、志が私の力……。

そんなことを言われたのは初めてだ。

「良いかい、桃香？君主に必要なものは、天下無双の武でも、天才的な頭脳でもない。それらは全て瑣末事だ。君主とは、その国で最終決定権を持つ者のことであり、君はその立場にいる。つまり、君主としての君に要求されることは、僕達臣下が進むべき道を示すことだ。」

「皆が進むべき道を示す……」

私はその言葉を呟く。

「そして、君はもう僕達にその道を示してくれただろう？」

「えっ？」

義景君はそう言うけど、私が具体的に何かを指示した記憶はない。

「わからないかい？」

義景君の言葉に、私は無言で頷く。

「君は僕達に言ったじゃないか。全ての人が笑顔になれる世の中を創りたいってさ。これこそが、この義勇軍の結成理由にして、最終目標だろう？」

「あっ……」

義景君は私の目を見てそう言った。

その通りだ。

それこそ、私の理想にして、最終目標。

「君は君主としての役割を、ちゃんと果たしているじゃないか。それにね、たった一人で何でも出来る人なんて存在しない。皆、日々誰かの力を借りて生きている。僕達だって、桃香が道を示してくれているからこそ、安心して力を奮えるんだ。」

そう言って、私の頭を撫でる義景君の目はとても優しかった。

「良いのかな……？頼っても……。」

「良いんだよ。適材適所さ。桃香が出来ないことは、僕達がやる。その代わり、僕達に出来ないことは、桃香がやる。それで良いんだ。」

義景君の言葉が、スッと私の胸に入ってくる。

そうだよね……。

私は……自分のことしか考えてなかったのかもしれない。

私に力を貸してくれた人達の気持ちも考えないで、いつの間にか、他人に頼ることがいけないことだと勘違いしてた。

誰にも頼らないなんて、出来るはずもないのに……。

「ハハッ……カッコ悪い……。」

私はおもわず苦笑する。

情けないな……。

そう思っていると、また涙が出てきた。

「ごめんね、義景君。みっともない所を見せちゃった。」

慌てて涙を拭いていると、義景君は私の両肩を掴んだ。

「構わないさ。いくら君主だとしても、君の中身は普通の女の子なんだ。悩みの一つや二つあって当たり前だ。それに、僕の方こそ、君に謝らなければならない。君の臣下としても、友としても、悩んでいることに気が付かなかったことは、完全に僕の失態だ。本当にすまない。」

どうしてそんなに優しい言葉をかけるの？

涙が止まらなくなっちゃうよ……。

「こんなっ…所…誰にもっ…見せられないよぉ……。」

「心配しなくても、今夜のことは、誰にも言わないよ。桃香のことだ。士陽達には心配かけたくないんだろう？」

「ヒッ…ヒック……うん……」

私は泣きながら、その言葉に頷く。

「なら、もしこれから先、辛くて泣きそうになったら、僕の所に来

ると良い。辛さを和らげてあげることなら、僕にも少しは出来ると思うからね。」

そう言って、義景君は優しく私を抱きしめた。

「うぅ……うわぁぁぁぁ！」

溜め込んだ物を吐き出すように、私はひたすら義景君の腕の中で泣いた。

そして、私は一つ決心した。

義景君達の期待を裏切らないために、もっと強くなろう。

心も、体も。

だから今だけは……弱い私でいさせて欲しい……。

そう思いながら、私は子供のように泣くのだった。

～第五話～侍、徐州の地を踏む（後書き）

どうしてこうなった？

気付いたら、義景×桃香のフラグが建っていたｗｗ

そんな予定なかったんだけどなぁ（，～、；）

さて、今回はやっと恋姫勢を出せました。

そして、話的には桃香の理想云々についてでしたね？

私は別に桃香の理想は嫌いじゃないんですよ。

だいたい、理想なんて所詮、妄想とたいして変わらないと思ってます。

だから甘くても良いんですよ。

行動さえ、しっかりしていれば、ですけどね？

って言うか、原作でも、行動自体はしっかりしてた様な気がします。

まあ、この辺は賛否両論でしょうね。

少なくとも、私は蜀ルート好きですよ？

つか、所詮エロゲーなんで、そこまで期待してないってのが本音ですｗｗｗ

まあ、その辺りも好みでしょう。

さて、次回はいよいよ、黄巾賊との直接対決です。

では、また次回で！

～第六話～侍、仕えるべき主に忠誠を誓う（前書き）

大変遅れました！

とりあえず、どうぞ！

～第六話～侍、仕えるべき主に忠誠を誓う

side　陶応

明朝に城を出た僕達は、黄巾賊が陣を張っているという場所まであと三里程といった場所で陣を張っていた。

先程、桃香から張元へ偵察任務の辞令を出し、早速彼らは出陣した。

まあ、その時、非常に面倒なことだが、一悶着があった。

当初、張元は五百名の兵士を引き連れるはずだった。

だが、いつの間に息をかけていたのか、さらに五百名の兵士が張元についていってしまい、総勢千名の兵士が偵察任務に行ってしまったのだ。

正直、僕は愕然とした。

朱里と雛里はハワワアワワと目を白黒させ、桃香に至っては呆然と立ち尽くしていた。

まあ、当然の反応だろう。

偵察のために千もの兵士を引き連れる者など、一体何処の世界にいるだろうか。

だが、最早行ってしまったので、どうすることも出来ない。
僕は新ためて、この軍はまだ未完成なものなのだと思い知らされた。
張元と、途中から張元について行った者は、後で厳罰に処さなければならない。
恐らく、今頃一刀は大変な思いをしているんだろうな……。
……無事帰ってきたら、酒でも奢ってやろう。
僕はそう思いながら、自分の陣営を見据えた。
僕達の陣営は、出陣してしまった張元達を除いて、総勢八千人。
対する黄巾賊の陣営は、今のところ一万人程の人数を想定している。
兵の数では負けているが、向こうは所詮雑兵の集まりであり、兵の質ではこちらが上だ。
さらに、こちらには愛紗や鈴々など、一騎当千の将が控えている。
故に、例えこちらの人数が足りなくとも、賊風情にならば勝てる、というのが朱里と雛里の考えだ。
だが、僕の考えは若干違う。
下調べの段階で、今向かっている敵陣は、各地に散らばる黄巾賊

達に送るための補給物資が保管されている場所であることがわかっている。

故に、黄巾賊にとってはとても重要な場所だ。

にも関わらず、そんな場所にたった一万程の兵しか置いていない。

どう考えてもおかしい。

朱里や雛里は、逆にそんな重要な場所に一万程しか置いていないからこそ、敵は雑兵であると判断したようだ。

確かに、朱里と雛里の考えていることは正しい。

本来なら、重要な場所だからこそ、しっかりと守らなければならない。

しかし、実際これだけ手薄だということは、その重要性に気付ける将がいないということだ。

故に、そこにいる敵は雑兵でしか有り得ない。

確かにその判断は正しいだろう。

これから戦う敵の部隊が、“官軍を倒した”という実績さえなければの話だが……。

そう、これから戦う敵の部隊は、官軍を倒しているのだ。

この情報は、今朝入ってきたばかりで、あまり知られていない。

なんせ、情報源はあの張元だ。

張元曰く、彼がまだ官軍に所属していた頃、彼の部隊を壊滅にまで追い込んだのが、これから戦う敵の部隊だったのだそうだ。

偵察任務の辞令を出した時に、怨みがましく顔を歪めながらそう言っていたので、間違いないだろう。

彼の性格から考えて、自分に屈辱を与えた者達を忘れるはずがない。

そうなると、一つ問題が出てくる。

いくら今の漢王朝の軍事力が衰退しているとは言え、腐っても漢王朝直属の部隊だ。

以前、父上に連れられ、官軍の調練の様子を見学したからこそわかるが、実際、世間で言われているほど酷いものではなかった。

故に、雑兵程度に負けるはずがない。

だが、実際は負けている。

もしかすると、敵は僕達が思う以上に、手強いのではないだろうか？

さらに言えば、敵の将は中々の策士である可能性も捨て切れない。

もし、自分達は雑兵だと僕達に思わせることが敵の狙いだとする

ならば……少々、いや、かなりまずい。

今回、僕達の作戦は、力押しの正面突破。

とても作戦とは言えない稚拙なものだが、もし敵が雑兵であるならば、これが一番手っ取り早い。

例え二千程兵の差があったとしても、所詮は雑兵の集まりである。

愛紗や鈴々の部隊ならば、さほど問題はない。

そう結論づけ、正面突破という方法を取るに至った。

だが、もし敵の将が策士だとしたら？

僕達はすでに、敵の手の平の上で転がされているのではないだろうか。

だいたい、黄巾賊は各地で官軍を破っているのだ。

にも関わらず、何故僕達は安易に敵を雑兵だと決め付けた？

……もう一度、状況を整理しよう。

何故、各地で官軍が敗れているのか？

それは、敵を雑兵と侮り、何の策も用いず突撃したから。

逆に言えば、ただ突撃してくるだけの部隊ならば、撃退することが出来る将が黄巾賊の中にもいるということだ。

もしそれが出来る将ならば、自分達の補給の要所を無下に扱ったりするだろうか？

……そんなことは、有り得ない。

ならば何故、敵陣には一万程しかいないのか？

それはつまり……僕達をおびき寄せるため……？

「っ！？」

僕はあることに気付き、戦慄した。

僕達は今、まさに敗れていった数多くの官軍と、まったく同じ行動を取っているじゃないか！？

まずい。

まず過ぎる。

このままでは、僕達は潰される。

クソッ！

僕は何をやっているんだ！

冷静になって考えれば、わかることだったのに！

僕はそう思いながら、桃香達がいる天幕へ歩みを進めようとした。

その時、

「陶応様！張元小隊副官、北郷殿からの伝令です！」

伝令兵が息を乱しながらそう言った。

「どうしました？」

嫌な予感がする……。

「張元小隊は今、この先の森林地帯にて、賊の伏兵の襲撃を受け、応戦中です！」

伝令兵の言葉は、今、僕が一番聞きたくないものだった。

side out

side 一刀

「貴方は一体、何を考えてるんですか！？」

本陣から二里程離れた森林地帯で、俺は怒鳴り声を上げた。

今、俺は猛烈に怒っている。

当たり前だ。

現在俺達は、当初の予定より二倍近く多い兵を引き連れてしまっているのだ。

もし俺達が普通に戦う部隊だったのならば、この状況は喜ぶべきことなのだろう。

だが実際、俺達は偵察部隊だ。

偵察任務を遂行し易くするならば、兵はならべく少ない方が良い。

にも関わらず、俺達は千人もの兵を引き連れている。

「さっきからうるさいぞ、北郷。この森林を抜けた先には敵の本陣があるのだぞ？だいたい、この小隊における権限は私にある。貴様のような小者が口を出す権利はない」

勝ち誇った顔で張元はそう言った。

「そういう問題ではないでしょう！新しく五百人も追加するなんて、本陣の劉備様は許可していない！これは軍規違反になるぞ！？」

「軍規違反……ね。はっ、それがどうした？」

張元は俺の言葉を鼻で笑う。

「そもそも、私はあんな小娘ごときに仕える気などない」

「……どういう意味だ？」

俺は敬語を使うことも忘れ、そう聞き返した。

「どうもこうもない。言葉通りの意味だ。私はいつの日か、この大陸を支配する王になる。この義勇軍など、我が名を広めるための通過点でしかないのだよ」

張元はそう言って腰から直刀を抜き、俺に向けた。

なるほど……。

そういうことか。

確かに、指揮官の不足しているこの義勇軍ならば、上手く行けばすぐにでも将になれる。

将にさえなってしまえば、ある程度の名声と権力が手に入るし、後は息をかけた兵士達と共に抜けてしまえば、簡単に独立出来るだろう。

張元の狙いはこれだったわけだ。

ふざけやがって……。

「劉備様を裏切るつもりか？」

俺はそう言って、千代桜の柄に手をかける。

「裏切る？違うね。見限るんだ。それに、言っただろう？私はあの小娘に仕える気などないと」

サッと張元が手を挙げると、十人程の兵士が俺を囲んだ。

「北郷、貴様はこの小隊の中では、圧倒的な武を誇っている。正直、こんな所でみすみす手放すのは少々惜しい。どうだ？私の部下にならないか？今なら、私に対する数々の無礼も許してやる」

張元はそう言って、ニヤけながら俺を見た。

だが、俺の答えなどすでに決まっている。

「ハッ……ナメたこと抜かしてんじゃねぇよ。お前のような小者なんて、お呼びじゃねぇんだ！」

俺はそう叫ぶと、千代桜を抜いた。

「そうか……残念だ。愚かな北郷殿は、不運にも選択肢を間違えたようだな」

忌ま忌ましげにそう言った張元は、兵士達に攻撃命令を下した。

だが、その瞬間、何かを貫いたような鈍い音が響いた。

「……ぐっ！？」

苦悶の表情を浮かべる張元の胸に、一本の矢が刺さっている。

「ばっ……馬鹿……な」

そう呟き、張元はその場に崩れ落ちた。

それと同時に、周囲から悲鳴が上がる。

「てっ、敵襲だーー！」

ある兵士の一人が、そう叫んだ。

「敵襲だと！？」

おもわず俺もそう叫びながら、周囲を見渡す。

すると、黄色い頭巾を被った兵士達が、俺達を囲んでいた。

黄巾賊！？

まさか、伏兵か！？

俺がそんなことを思っていると、周囲の黄巾賊から次々に矢が放たれ、兵達が討たれていく。

それに伴い、こちらの兵達はパニックを起こし、まったく連携が取れていない。

これは……まずい。

唯一の救いは、連携が取れていないだけで、隊列自体は乱れていないということ。

これならば、まだ立て直せる可能性は残っている。

でも、状況はかなり厳しい。

降り懸かる矢を避け、飛び掛かってくる敵を斬り捨てながら、俺は焦った。

もし、このまま俺達が全滅した場合、黄巾賊達は本陣を次のターゲットにするはずだ。

恐らく、黄巾賊の本隊が、俺達の本陣に突撃したとしても、負けることはないだろう。

だが、甚大な被害は免れない。

今後も戦い続けなければならない俺達としては、今、大きな被害を出すことは致命的だ。

ならば、このままこの小隊が全滅するわけにはいかない。

今俺達がすべきことは、本陣が策を練り直すための時間を稼ぐこと。

そして張元亡き今、この小隊の責任者は……俺だ。

副官である俺が、この小隊の指揮を執るしかない。
なら、今俺がすべきことは……？
「皆！落ち着くんだ！」
俺は声の限り叫んだ。
すると、兵達が応戦しながらも、俺の言葉に耳を傾けている気配を感じた。
皆、まだ俺の声を聞く余裕が残っているのか？
これなら何とかなるかもしれない！
「応戦しつつ、森の奥に撤退だ！皆、急げ！」
俺がそう叫ぶと、兵達は一斉に動き出した。
森の奥へ逃げれば、とりあえずしばらくの間、本陣の位置はバレないはずだ。
「伝令兵はいるか！？」
「はっ！」
「本陣の陶応殿に、今の現状を伝えてに行ってくれ」
「御意！」

他の兵達と一緒に撤退しながら、俺は伝令兵に指令を出す。

伝令兵が本陣へ向かったことを確認し、俺は皆と共に森の奥へ急いだ。

しばらく走り続けると、賊の伏兵からの攻撃が、止んでいることに気が付いた。

何とか撤いたか？

なら、一旦隊列を組み直さなければ。

「全隊、止まれ！今一度、隊列を組み直すぞ！」

俺の言葉に応じるように、皆は隊列を組み直す。

それにしても……トップが変わるだけで、こうも全体が変わるとは……。

そういえば、昔じいちゃんが言ってたな。

『人の上に立つ者は、人の痛みがわからなければならない。ただ優秀であれば、部下がついて来るわけではない。その者の人格、真心、そして気高い生き様が、人を率いて行くのだ。良いか一刀、部下も人だ。人は機械ではない。部下が心からついて行こうと思わない上

司など、上司失格なのだ。』

当時の俺は、返事をしながらも、その意味がよくわからなかった。

だけど、今、その状況に直面して、初めてじいちゃんが言った意味を理解した。

張元が隊長だった時、何故皆動きが鈍かったのか？

それは、皆が心の底から張元について行きたいとは思っていなかったからだ。

実際、皆、仕方ないからついて行くという雰囲気が漂っていた。

でも、今はどうだ？

皆、キビキビ動いてくれる。

まあ、今が危機的状況だからってのもあるかもしれない。

それでも俺は、皆が俺に従ってくれることが嬉しかった。

ふと、整列している兵達に目を向ける。

隊列の状況から見て、今残っている兵の数は、八百人程だろうか。

その八百人が、俺に視線を向け、俺の指示を待っている。

俺は今、責任ある立場なのだということをはっきりと自覚した。

ならば、例え代理の隊長であっても、しっかりと務めなければならないな。

そう思いながら、俺は皆に声をかけた。

「皆、改めて自己紹介するけど、俺は北郷　一信という。張元隊長が亡くなったことにより、代理で隊長を務めさせてもらう。よろしく頼む」

俺はそう言って、皆に頭を下げた。

皆は隊長らしからぬ俺の行動に、驚いた表情をしている。

「今回、こういうことになってしまったのは、張元の勝手を止められず、周囲の警戒を怠った、副官である俺の責任だ。まず、そのことを謝らせてくれ。申し訳なかった」

俺はそう言うと、再び頭を下げた。

そう、今回のことは、完全に俺に非がある。

確かに、勝手なことをしたのは張元だ。

だが、副官としてそれを止められず、加えて周辺への警戒を怠った。

その所為で、二百人もの尊い命が失われてしまったのだ。

この事実だけはどう足掻いても変えることは出来ない。

故に、俺は心から謝罪した。

散ってしまった二百人の兵達と、今ここにいる八百人の兵達に。

謝罪して済む問題ではないが、そうせざるを得なかった。

「北郷殿、頭を上げてください」

一人の老兵が俺にそう言った。

俺はおもわず顔を上げる。

「北郷殿、貴方は私達のような雑兵に、本気で謝ってくれた。私はそんな上官を今まで見たことがない。貴方のその気持ちだけで、私達は十分です。そうだよな、皆!?」

野太い声で老兵がそう言うと、周りの兵達はそうだそうだと同意した。

「北郷殿、これが我等の総意でございます。我等は貴方について行きます故、どうかご指示を」

そう言って、老兵は俺の前にひざまづいた。

ゾクリとした。

皆、俺について来てくれるようだ。

なら、やるしかない。

いや、やってみせる！

「皆……ありがとう。ではまず、この周辺の地理に詳しい者はいないか？」

戦をする上で大事なことは、まずその地域の地理を把握すること。

それによって、様々な策を練ることが出来るからだ。

美玲様に教わったことを思い出しながら、俺は周りを見渡す。

すると、臙脂（えんじ）色の着物を着た一人の少年が、怖ず怖ずと手を挙げた。

「俺、少しならわかります！」

「そうか、ならこっちへ来てくれ。他の皆は、周辺への警戒を頼む」

俺の言葉に従い、少年はこちらに歩み寄った。

「君の名は何と言う？」

「俺は、姜維（きょうい）と言います」

ん？

姜維？

どっかで聞いたことあるような……。

まあ、今はどうでも良いか。

「姜維、早速この辺りの地理を教えてくれ」

俺はそう言って、持ってきた地図を広げた。

「えっと……今いる森がここで、敵の本陣はこの位置になります」

姜維は地図を指差しながら、様々な場所を言っていく。

「あと、ここから一里ほど離れた所に川があるんですけど、この川はもう死んでます」

「ん？死んでるとはどういうことだ？」

「枯れちゃってるんですよ。水なんて影も形もありません。今は谷になっちゃってるらしくて……」

「ちょっと待った！谷だって！？」

俺は姜維の言葉に驚いた。

「ってことは、今、そこは峡間（きょうかん）になってるのか！？」

「まあ、川が干上がって出来た谷ですからね。そりゃあ、峡間にもなるでしょう」

姜維は俺の様子を見て、不思議そうな表情をする。

俺は頭をフル回転させ、状況を整理した。

今、俺達に残された兵力は約八百。

対する黄巾賊は約一万。

どう逆立ちしたって勝てるわけがない。

それはわかってる。

だが、ここでただ待っていても、賊の兵に見つかるのは時間の問題だ。

今、この場で戦っても、勝てる見込みは少ない。

ならば、他の道を選ぶのみ。

もし、姜維の言う、川が干上がって出来た谷に辿り着ければ、何とかなるかもしれない。

美玲様だって、自軍が敵軍よりも圧倒的に少ない場合は、迷わず峡間で戦えと言っていたじゃないか。

しかも、これによって敵の将が“勘違い”する可能性もある。

これだ。

やるなら今しかない。

「……俺達は、この谷まで移動する」

俺は姜維を見てそう言った。

「正気ですか！？ここから谷まで行く間に、賊の本陣の前を通り過ぎなきゃいけないんですよ！？」

そう言って、姜維は驚愕の表情を浮かべる。

「もちろん正気だよ。姜維、君の言いたいこともわかる。でも、だからと言ってここにいても、結局戦うハメになる。なら、より生き残れる可能性に、俺は賭けたい」

俺はたじろぐ姜維をまっすぐ見据えそう言った。

「で、でも……」

「良いんじゃないでしょうか？」

姜維が迷っていると、先程の老兵がそう呟いた。

「貴方はさっきの……」

「先程は名乗りもせず申し訳ありません。私は徐晃と申す者です。北郷殿、現状ではそうするしかないのでしょう？」

「俺としては、それしかないと思います」

老兵、徐晃さんの問い掛けに、俺はそう答えた。

「ならば、そうしましょう。貴方は代理とは言え隊長だ。貴方が決めたならば、我等はそれに従うのみです」

微笑を浮かべながら、徐晃さんはそう言った。

「……俺は、どうなっても知りませんよ？」

姜維も、渋々だが納得してくれたようだ。

「二人共、ありがとう。ついでのようで悪いんだけど、今だけ副官をやってくれないか？流石に、八百人を一人で纏めるのはちょっとキツイ」

「わかりました。この徐晃にお任せください」

「……嫌と言ってる場合じゃないですね。俺も了解しました」

二人はそう言って、持ち場に戻った。

「伝令兵、いるか？」

「はっ！」

俺は伝令兵に、一言だけ伝えた。

「あの……これだけで良いんですか？」

「良いんだ。陶応殿ならこれだけで十分だからな。じゃ、頼んだよ」

「御意！」

そう言って、伝令兵は本陣の方へ駆けた。

あまり多くのことを言っても、伝令兵を混乱させるだけなので、一言しか伝えなかったが、義景なら俺の意図に気付いてくれるはずだ。

俺はそう思いながら、整列している兵達を見据える。

準備は整った。

後は実行あるのみだ。

「皆、聞いてくれ！」

俺がそう叫ぶと、兵達の視線が俺に集まった。

「これより、我等はここから一里先にある谷に移動する。その途中、賊の本陣の脇を通るが、決して応戦するな」

俺の言葉に、兵達がざわつく。

「落ち着け！俺はただやられろと言っているのではない。まずは、谷まで賊を誘い込む。その後、反転し賊を迎え撃つ」

ざわつきは収まったものの、兵達の目には不安が浮かんでいた。

「皆が不安になるのは最もだ。俺も、皆にこんな無茶な要求をして、申し訳ないと思っている。だけど、考えてみて欲しい。このままここに隠れていても、いずれは見つかり、この場で戦わなければならないだろう。そうなれば、俺達が勝てる見込はない。守りたいものも守れず、ただ死んでいく。皆はそれで良いのか？」

俺の問い掛けに、首を横に振る者、何も言わずただ聞いている者と様々だが、全員真剣に俺の話を聞いている。

ならば、俺は真心を込めて言葉を紡ぐだけだ。

「良いわけないよな？俺だって、そんなの嫌だ。だからこそ、行動するんだ。意味もなく死んでいくなんて、冗談じゃない！俺達は勝って、生き残るんだ！」

俺の言葉に呼応するように、そうだそうだと兵達がまくし立てる。

「故に、俺はここに宣言する！代理とは言え俺が隊長になった以上、皆を犬死になんてさせない！俺は必ず皆を勝利に導いて見せよう！だから、皆にお願いしたい。俺に協力してくれ！」

俺は想いの丈を全て叫び、頭を下げた。

すると、兵達から歓声が上がる。

「俺達は北郷隊長について行くぞー！」

「俺も協力する！」

「俺もだ！」

所々で、興奮した兵達がそう言っていた。

自分が本気でぶつかれば、相手に想いは伝わる。

昔じいちゃんがそう言っていたけど、本当だった。

兵達は皆、良い顔をしている。

「ありがとう！皆……勝つぞ！」

『おぉぉぉ！』

総勢八百人による咆哮は、まるで雷のようだ。

やってやる。

絶体絶命のピンチの傍には、必ず千載一遇のチャンスが眠っているはずだ。

俺達は、絶対に生き残る！

俺は改めて心にそう誓い、行動を開始した。

side out

side ???

「程遠志将軍！官軍が攻めて来ました！」

「……何？」

私は兵の言葉に疑問を覚えた。

先程、伏兵による襲撃は成功したと報告を受けた。

先程の部隊は先遣隊だろうな。

だが、その部隊は撤退したと聞いた。

撤退した先は、恐らく本陣だろう。

我等はまだ、敵本陣を確認していない。

ということは、敵本陣はまだ遠くにあるはずだ。

私の経験から考えるに、官軍の本陣は三里程先だろう。

故に私は、今はまだ攻めてこないと考えていた。

にも関わらず、今、攻めてきただと？

いくら何でも早過ぎる。

敵は官軍ではないのか？

今まで我等が戦った官軍は、全て事前に位置を把握出来ていた。
だからこそ、我等は策を用いて迎え撃てた。
今回の官軍は今までと違うのか？
「それで、敵の人数は？」
私はそう思いながら兵に聞いた。
「はっ、それが……」
「どうした？」
「敵は総勢八百人。今攻めてきた部隊は、先程我等の伏兵が襲撃した部隊かと」
「何だと！？」
馬鹿な！？
たった八百人の兵で、一万の兵を相手取るつもりか！？
「して、前線の状況は？」
「それが、これまた不可解な動きをしていまして……」
「どんな動きだ？」
「戦う気が感じられないのです。我等の目の前を、北西の方角に全

速力で駆け抜け、我等との戦闘を極力避けようとしています。まるで、どこかに逃げるようで……」

「ふむ……」

私は地図を広げた。

この地図は、私が官軍に在籍していた時代に持っていた物だ。

故に、一般的に出回っている地図より詳しく載っている。

私は地図を凝視した。

ここから北西は川しかない。

……待て。

川だと？

あの川は確か干上がっていて、船などは……っ！

そうか！

敵は、干上がって出来た谷で我等を迎え撃つつもりだな？

なるほど。

確かに、今まで戦った官軍より賢いじゃないか。

だが、一つだけ不可解なことがある。

この部隊は何故、本陣に戻らなかった？

いくら狭間とは言え、八百と一万では結果など見えている。

にも関わらず、何故わざわざ自分から死地へ向かうのだ？

……まさか、この部隊自体が本隊か？

そう考えれば、色々と納得がいく。

だが、そうだとすれば、難儀な話だ。

官軍の上層部は、恐らく撤退を許さない。

今までの戦いで、我等のような賊風情にここまで無様を晒しているのだ。

恐らく、あの部隊の将も、撤退が許されていないからこそ、峡間で戦うという選択に至ったのだろう。

そこそこ優秀なのにも関わらず、ここで散らせてしまうとは、何と哀れなことだろう。

だが、敵対した以上、情け容赦をかけるわけにはいかない。

あの部隊の将には悪いが、討ち取らせて貰おう。

「波才はいるか？」

「波才将軍ですか？波才将軍は今、陣頭指揮を執っているはず…」

「もういるぜ」

兵の言葉を区切るように、言葉を発した者がいた。

天幕の入口に目を向けると、そこには黄巾賊の将軍、波才が立っていた。

「来ていたか……。お前はもう下がって良いぞ」

そう言って、私は兵を下がらせ、波才に話しかけた。

「お前は陣頭指揮を執っていたんじゃなかったのか？」

「あ？てめぇは馬鹿か？あんなもん、わざわざ俺が指揮を執るまでもねぇよ。敵は全員逃げ帰ったぞ？」

波才はけだるそうにそう言った。

「奴らは逃げ出したわけではない。あれは、ここから北西に一里程離れた川まで全速力で向かっただけに過ぎん。今あの川は干上がって谷になっているはずだ。恐らく、奴らはその谷で我等を迎え撃つつもりなのだろうな」

「へぇ……峡間なら数の差をひっくり返せるってか？敵の将は随分と面白いことを考えるんだな」

そう呟いて、波才はニヤリと笑う。

「程遠志、俺が兵を率いて討伐に向かう。異論はないな？」

面白い玩具を見つけたように笑う今の波才には、何を言っても無駄だろう。

「……良いだろう。して、お前は何人連れていく気だ？」

溜息をつきながら、私は波才に尋ねる。

「たかが八百人の部隊だ。多めに見積もっても、二千くらいで十分だろ？」

「……いや、三千だ。敵の将は中々に頭が回ると見た。何か策がある可能性も否めない。だから、三千だ」

「あぁ？敵はたかが八百だぞ？どう考えてもそれは多過ぎだろう？馬鹿かてめぇ？」

「馬鹿でも何でも良いから、三千だ」

異論など、許さぬという気迫を込めて、私は波才の目を見ながらそう言った。

何かあってからでは遅いのだ。

「……ちっ、わかったよ！」

舌打ちをしながらそう言って、波才はめんどくさそうに天幕を出た。

やれやれ……。

しかしながら、敵の将は我等を侮り過ぎだな。

例え峡間だとしても、八百人しかいなければ、全滅するのは時間の問題だ。

まあ、お手並み拝見といこうじゃないか。

名も知らぬ将に、心の中でそう言いながら、私は波才達が出陣する様を眺めた。

side out

side 諸葛亮

はわわ……大変なことになっちゃった。

敵将にここまで頭が回る人がいるなんて……。

隣にいる雛里ちゃんも、想定外の出来事に、顔を青くしてる。

「状況としては最悪だ」

先程天幕に駆け込んできた義景さんは、そう言って顔を歪めた。

伝令兵によると、張元さんが敵の伏兵により戦死。

それに伴い、副官の北郷さんが代理で隊長を務めているようだ。

「まんまと罠に嵌められた。このままでは、僕達は大きな損害を出す」

「それでも、負けることはないだろ？そりゃ、損害が出ないことに越したことはねぇけど、起きちまったことは仕方ねぇ。なら、今から迎え撃つしかねぇだろ」

そう言って、士陽さんは難しい表情をした。

確かに、士陽さんの言う通り、私達が負けることはない。

でも……

「確かに、負けることはないだろう。でもな、士陽、僕達の目的は何だ？」

「そりゃあ……ああ、そういうこと」

士陽さんは苦々しい表情をしながら納得した。

そう、私達は目の前にいる黄巾賊だけを倒せば良いだけではない。

桃香様の理想を実現するため、まだまだ戦いは続く。

だからこそ、今、こんな所で余計な犠牲は出せない。

「桃香、今回は敵を雑兵だと侮った僕の失態だ。本当に申し訳ない」

そう言って、義景さんは桃香様に頭を下げる。

「あっ、あの、ちょっと待ってください！今回の基本方針を決めたのは私達です！」

「ぎっ、義景さんは、私と朱里ちゃんが決めたものを最終確認しただけですぅ……」

私と雛里ちゃんは驚いた表情でそう言った。

多分、義景さんは一人で責任を負うつもりだ。

でも、そんなことさせられないよ！

「えっ？えっ？あの、私はどうしたら良いの！？」

桃香様も、突然謝られてびっくりしている。

「……まあ、責任の所在は後で考えれば良い。現段階で、不幸中の幸いは、一刀の機転によって、僕達が策を練る時間を得たことだ。

今は、この現状をどうするかに集中しよう」

義景さんは頭を切り替えたのか、机に広げた地図を凝視した。

「……そうだね。じゃあ、朱里ちゃん、雛里ちゃん、今私達はどうなってるのかな？」

桃香様が私達の方を見ながらそう言った。

「当初の予定では、敵に見つかる前に突撃をして、奇襲のような形にしようとしました。ですが、現在は敵の部隊がこの森林地帯まで侵攻していますので、私達が見つかるのは時間の問題です。故に、奇襲はもう出来ません」

私は自分でそう言いながら、悔しさが込み上げ目元が潤む。

どうして敵を侮ってしまったのか。

自分の至らなさが、堪らなく悔しい。

「さらに、現在私達は敵に誘い込まれた形になっています。もし、このままただ突撃したら、どんな罠が仕掛けられているかわかりません……」

私は隣でそう言う雛里ちゃんに視線を移す。

雛里ちゃんも泣きそうになっていた。

「そっか……。義景君、それで、これからどうするの？」

桃香様は義景さんに尋ねる。

「敵の出方次第だな。敵がどんな行動に出るか予測出来ない以上、僕達が下手に動き回れば、反って危険だ」

義景さんは眉間にシワを寄せながらそう言った。

「で、一刀達はどうすんだ？」

愛紗さんの隣にいた士陽さんが呟く。

「一刀達は……自力で何とかしてもらうしかない……」

「はぁっ！？お前本気で言ってんのか！？」

「現状では、僕達は動き回れない。それは君もわかるだろう？」

「……ふざけたこと言ってんじゃねぇぞ！」

士陽さんはそう叫んで、義景さんの胸倉を掴む。

「「ひゃっ！」」

私と雛里ちゃんは驚いて、桃香様の背中に隠れた。

こっ、怖い……。

士陽さんがいつになく怖い。

「お前、一刀を見殺しにする気か！？一刀は俺達の親友だろうが！」

「……」

「黙ってないで何とか言えよ！」

「っ！……仕方ないだろう！？僕だって、こんなことしたくないさ！でも、他にどうすれば良いんだ！？そこまで言うなら、君こそ当然何か策の一つでもあるんだろうな！？どうなんだ！士陽！」

義景さんも負けじと、士陽さんの胸倉を掴んでそう叫んだ。

「お前……！」

そう呟いて、士陽さんは拳を握り締める。

はわわ、喧嘩に発展しちゃいます！

「よせ、士陽！落ち着け！」

「義景君も！熱くならないで！」

愛紗さんと桃香様が、間に割って入り二人を宥める。

良かった……。

何とか落ち着いたみたい。

その時、

「失礼します！伝令です！」

一人の伝令兵が、息を乱しながら天幕へやって来た。

「それで、内容は何だ？」

愛紗さんが伝令兵に声をかける。

「北郷隊長代理より、陶応様に伝言です！」

「僕に？それで？」

「北郷隊長代理は一言だけ、我々は、ここより北西に一里離れた峡間にて待つ、と」

「はっ？それだけか？」

士陽さんは驚いた表情でそう尋ねる？

「はい。北郷隊長代理は、陶応様ならば、これだけで十分だと……」

伝令兵も困った表情を浮かべた。

「にゃー？愛紗、鈴々には何のことだかさっぱりなのだ」

「私に言うな。私だってさっぱりだ」

鈴々ちゃんと愛紗さんも、首を傾げている。

私は義景さんに視線を移した。

「……」

義景さんは顎に手をやり、何かを考えていた。

「……っ！朱里！雛里！ちょっと来てくれ！」

何かに気付いたように、義景さんは地図に飛び付いた。

私と雛里ちゃんは、それに続き地図を見つめる。

「張元小隊は、この森林地帯にいた。ここから北西に行くと、この川にぶつかる。二人共、今この川がどうなっているか知ってるか？」

「えっと……ここ数年続いた日照りの所為で、枯れてしまったはずですけど……っ！？」

雛里ちゃんも気付いたみたい。

多分、北郷さんが言っている峡間は、ここのことだと思う。

でも、どうしてここで待つなんて……っ！

まさか、北郷さんの狙いって！？

「朱里も雛里も気付いたみたいだね。それにしても……ククッ……一刀の奴、やってくれたな」

心底可笑しそうに、義景さんは笑う。

北郷さんは本当にすごい。

これなら！

「おいおい、お前らだけで納得するなよ。俺達にもわかるように説明してくれ」

士陽さんが困った表情でそう言った。

あっ、そうだった。

皆さんに説明しなきゃ。

でも、どう説明したら……？

「僕が説明しよう。朱里と雛里は、兵達に出陣の用意と、これからの予定を説明しに行ってくれ。……副官である僕が、上官である君達にこんなことを言うなんておかしいってわかってる。けど、今は一瞬でも時間が惜しい。申し訳ないけど、頼む」

義景さんはそう言って、私達に頭を下げた。

「そんな！頭を上げてください！現状が現状ですので、身分を気にしてる場合ではありませんから。では、私達は行ってきますね？雛里ちゃん、行こう！」

「うん！朱里ちゃん！」

そう言って、私と雛里ちゃんは天幕を飛び出した。

義景さんの言う通り、今は一瞬でも時間が惜しい。

焦る気持ちを抑えて、私達は兵達の下へ急いだ。

side out

side 陶応

朱里と雛里を見送った後、僕は伝令兵に休むように指示を出し、桃香達に向き直った。

「さて、まずは皆に吉報だ。この戦、僕達が有利に立ち回れる可能性が出て来た。まず、この地図を見てくれ」

僕がそう言うと、桃香達は驚いた顔をした。

「一刀……北郷隊長代理がこの峡間に向かってくれたおかげで、恐らく敵の目はこの小隊に向いただろう。これにより、僕達が奇襲する条件が整った」

僕はそう言って、桃香達を見る。

「ですが、私達から注目が逸れたと何故言いきれるのですか？」

愛紗は怪訝な表情を浮かべた。

「簡単さ。愛紗、森林地帯から、北西にある川まで一直線に線を引いてみてくれ」

「一直線に？……っ！これは！？」

「わかるだろう？森林地帯から、この川まで一直線に線を引くと、ちょうど敵陣の脇を通る軌道になる。これなら、敵はどうしても北郷隊長代理が率いる小隊を注目せざるを得ない」

愛紗は僕の言葉に納得した表情を浮かべた。

「あの、こんなことは考えたくないけど、もし北郷さん達が峡間に辿り着く前にやられていたらどうするのかな？」

桃香は怖ず怖ずとそう言った。

「本当に考えたくないことだね……。まあ、もしそうなったとしても問題ない。桃香、例えば君が先遣隊の隊長として、千の兵を率いていたとしよう。自分達の近くには一万の敵兵がいる。その時、君ならどうする？」

「えっ？それは……当然、一度本陣に戻ると思う。だって、普通に千と一万じゃ勝ち目がない……あっ！」

どうやら、皆気付いたようだな。

「そうだ。普通なら、本陣に戻る。ところが、北郷隊長代理は、あえて狭間で戦うことを選んだ。こんな時、ある程度頭の回る敵将ならば、どう思うだろうか？」

「この部隊は帰る場所がなく、戦うしかない。つまり、小規模だが、この部隊こそが本隊だ。……俺なら、そう思うだろうな」

士陽は頷きながらそう呟く。

「つまりはそういうことだ。さらに、もし北郷隊長代理が峡間に辿り着いた場合、敵はこの小隊をほって置かないだろう。例え小規模でも、奇襲されたら困るからね。故に、敵は全員ではないにしろ、ある程度人数を揃えてこの小隊に突撃するはずだ。その時、敵本陣の人数は減り、尚更僕達が攻撃し易くなる。これが、現段階での全体像だ」

僕はそう言って説明を締め括った。

「ほぇ～……北郷って人はすごいのだなぁ……」

鈴々が溜息をつきながら、そう呟く。

「まったくだ……」

僕は鈴々に同意した。

これでは、どちらが軍師かわからないな。

「とりあえず、一刀達がやられてたとしても、俺達の有利は変わら

ないんだな？」

士陽は僕に向き直りそう尋ねた。

「ああ、変わらない。それに、一刀が簡単にやられると思うか？」

「ハッ！有り得ねぇな。森林地帯にいるならまだしも、もう動き出してんだろ？一刀は俺と肩を並べられる程の実力者だ。今頃、峡間で俺達を待ってるだろうよ」

僕の言葉を鼻で笑いながら、士陽はそう言った。

「フッ、僕もそう思う。……さて、桃香、方針は決まった。後は君の決定次第だ」

そう言って、僕は桃香に向き直る。

桃香は真剣な表情で、僕達全員を見回した。

「……私達は、義景君が言った通り、これから奇襲をかけるよ。各隊の編成は、軍師陣に任せるね？それじゃあ皆、準備をお願い！」

「「「御意！」」」

「鈴々に任せるのだ！」

鈴々らしい返事に苦笑しながら、僕達は行動を開始した。

まったく……今回は一刀の機転に助けられたな。

これじゃあ、酒を奢る程度では足りなくなってしまったじゃないか。

僕はそう思いながら、隊の編成作業に取り掛かった。

side out

side 程遠志

波才が出陣してから、もう半刻が過ぎた。

峡間での戦闘は、苦戦を強いられているのだろうか？

状況がまったくわからん。

波才は大雑把な男だ。

故に、伝令で状況を報告するなんて真似はしない。

私としては、こまめに情報伝達をして欲しいところだが、奴の場合、何を言っても無駄だろう。

それにしても……戦闘は半刻で終わると思っていたが、存外あの敵将もやるじゃないか。

やはり、殺してしまわず、こちらに引き込むべきだったか？

……まあ、今更遅いか。

私はそう思いながら、地図を眺めた。

念のため、こちらに七千程兵を残したが……この胸騒ぎは一体何だ？

まさか波才の奴、敗れるなんてことはないだろうな？

まあ、三千対八百という戦いで、敗れることなど有り得ない。

もし、そんなことが起きようものなら、笑い事では済まされないな。

……仕方ない。

こちらから伝令兵を送って、様子を見るか。

そう思い、伝令兵を呼ぼうとしたその時だった。

「敵襲！官軍だ！官軍が攻めてきたぞ！」

外からそう叫ぶ声が聞こえた。

何？

今、何といった？

「程遠志将軍！敵襲です！」

そう言って、一人の兵が血相を変えて天幕に飛び込んできた。

「何だと！？」

有り得ない。

敵本隊は今、狭間にいるはずだ。

まさか、波才の奴、やられたのか！？

そう思いながら、私は天幕を飛び出した。

「馬鹿な……」

その目に飛び込んできたのは、先程の部隊とは比べものにならない規模の部隊が、我等の部隊に奇襲をかけている所だった。

……ああ、なるほど。

やはり、先程の部隊は先遣隊だった。

恐らく、目の前にいる部隊が、本物の本隊だろう。

つまり、敵を罠に嵌めたと思っていたら、実際は我々が罠に嵌まっていた、ということか……。

「侮っていたのは……私の方……か」

私は自嘲ぎみに苦笑する。

「あの、程遠志将軍？我等はどう動けば……？」

兵が不安げな表情を浮かべる。

「全員で応戦する！敵を一刻も早く排除するぞ！」

「はっ！」

部下にそう命じて、私は薙刀を手に戦場へと走った。

恐らく、この戦はもう駄目だ。

敵の兵と我等の兵では練度が違うし、こちらより格上の相手の突撃を許してしまった以上、もう我等に敵本隊を撃ち破る術（すべ）はない。

だが、賊に身を堕とした私は、最早止まれないのだ。

いつの間にか、黄巾党は賊に成り下がり、民を救うはずが、民の恐怖の対象になってしまった。

私は……一体何がしたかったのだろう？

何のために官軍を辞めたのか？

こんなはずではなかったのに……。

今まで、何度となく自問自答し、ついに今日まで答えが出なかった。

答えが出ない段階で、私にはその程度の器しかなかったということなのだろう。

私は走りながら、敵本隊を睨みつける。

恐らく、私はここで死ぬだろう。

ならば、一人の武人として、一矢報いるまで。

「うおぉぉぉ！」

そう叫びながら、私は敵の本隊に突っ込んだ。

side out

ｓｉｄｅ　陳登

「どけぇぇぇ！」

俺はそう叫び、漆黒の青龍偃月刀“覇黒”を振り回しながら、敵兵を蹴散らしていた。

義景の言う通り、賊の本陣は完全に隙だらけで、俺達の奇襲は見事に成功した。

さらに、森林地帯で捕らえた敵兵の情報から、今一刀達は狭間で戦っていることもわかっている。

それに伴い、一刀達の援軍には、鈴々が率いる張飛隊が向かった。

今、流れは完全に俺達のものだ。

愛紗が率いる関羽隊も、どんどん敵を押している。

この流れは、無駄にはしない。

「士陽！ちゃんと着いてきているか！？」

愛紗は敵兵を吹き飛ばしながら、そう叫んだ。

「ハッ、当たり前だ！俺を誰だと思ってるんだ！？」
「ならば良い。鈴々がいない今、私の背中はお前に任せるぞ！」
そう言って、愛紗は走り出す。
その時、愛紗の前にいた義勇兵達が吹き飛んだ。
俺達は警戒しながらそこに視線を向けると、一人の男が薙刀を持って立っていた。
「むっ？何者だ！」
愛紗が叫ぶ。
「我が名は程遠志。黄巾党が将の一人。貴様は敵軍の将か？」
「いかにも、私が義勇軍の将、関羽　雲長だ！」
「義勇軍だと？……まあ良い。関羽とやら、貴様が将と言うのなら、いざ尋常に勝負！」
薙刀を構えた男、程遠志はそう言って、愛紗を睨みつける。
「良いだろう。行くぞ、程遠志！」
愛紗もそれに応じて、己の獲物を構えた。
「はっ！」

「くっ！」

愛紗の突きを弾き、程遠志は薙刀の刃を愛紗に振り下ろす。

しかし、愛紗はそれを後ろに飛んでかわすと、縦横無尽に偃月刀を振るう。

「ぬっ……ぐっ！」

程遠志はそれを何とか捌(さば)くが、堪らず後ろに飛び退いた。

「どうした！その程度か！？」

「黙れぇぇぇ！」

愛紗の挑発に、程遠志は咆哮を上げ突進した。

「はっ！」

愛紗は程遠志の突きを薙刀ごと弾く。

くるくると薙刀が宙を舞う。

「決まったな……」

傍から見ていた俺はそう呟く。

事実、己の獲物を弾き飛ばされ、ガラ空きになった程遠志の胴に……

「やぁぁぁぁっ！」

愛紗の偃月刀が突き刺さった。

「がっ……！」

程遠志はドサリと地面に両膝を着く。

「私の……勝ちだ！」

愛紗はそう叫ぶと、ズブリと音を立て偃月刀を引き抜いた。

「ぐぁっ……はっ……！……見事……」

程遠志は微かに笑い、そう呟くと地面に倒れ伏した。

「敵将程遠志、義勇軍が将、関羽が討ち取った！」

愛紗が高らかに宣言すると、義勇兵達が咆哮を上げた。

周りを見回すと、敵兵達の目に恐怖が浮かんでいる。

今が絶好の好機だ。

「お前ら！この勢いで敵を押し潰す！行くぞ！」

俺はそう叫び、士気が下がっている敵兵に突進していく。

それに従い、士気の上がった義勇兵達も敵兵に突撃した。

敵陣が崩壊するのも時間の問題だな。

後は、一刀達だけか……。

これぱかりは、一刀達の粘り強さと、鈴々の部隊が間に合うかに懸かっている。

無事でいろよ、一刀！

俺はそう思いながら、敵兵を斬り捨てるのだった。

side out

side 一刀

敵本陣の前を何とか通り過ぎた俺達は、川が干上がって出来た谷

に到着した。

「全隊、止まれ！」

俺がそう叫ぶと、兵達はそれに従い止まる。

「徐晃さん、今兵達はどれくらい残っていますか？」

俺は徐晃さんの方に向き直り、そう尋ねる。

「ざっと七百くらいでしょう」

徐晃さんは顔を歪めながらそう答えた。

やっぱ、全員無事とはいかなかった。

わかってはいたけど、胸が痛くなる。

「大丈夫ですかな？」

徐晃さんが心配そうな表情を向ける。

いかんな……。

今はとにかく、戦場に集中しよう。

悲しむのは、戦いが終わってからだ。

「大丈夫だ……。恐らく、敵もすぐに追って来る。いつでも迎撃出来るよう、皆に準備するように言ってくれ」

「……御意」

徐晃さんはそう言って兵達の下へ向かった。

気を使わせちゃったかな？

申し訳ない気持ちを感じながら、俺は兵達を眺める。

皆、大小様々な怪我をしているが、それでも戦う意思は消えていない。

強いな……。

俺は心からそう思った。

そして、権陽様に以前言われたことを思い出した。

『高い志と、斬った相手に恥じぬ気高き生き様が、周りの者に真の武人と呼ばせるのだ。』

果たして俺は、皆にこう思って貰えているのだろうか？

……まあ、こればかりは、自分ではわからない。

でも、だからこそ自己研鑽を忘れてはならないのかもしれないな。

そんなことを思っていたその時、

「隊長！敵の部隊を確認しました！あと数分でこちらに突撃してき

ます。どうします？」

そう言って、姜維が俺の所へ駆けてきた。

来たか！

「もちろん迎撃だ。いつでも突撃出来るよう、皆に徹底してくれ」

「御意！」

姜維はそう言って、兵達の下へ戻る。

俺もそろそろ行くか……。

俺はそう思いながら、気を引き締め隊の先頭に向かった。

先頭に着くと、敵が近くまで来ていることが、立ち昇る砂煙の様子でわかった。

「皆、見てわかるように、敵はもう真近に迫っている。いよいよ決戦だ。俺達はこれから、敵の部隊に突撃する」

馬上にいる俺の言葉に、兵達は緊張した面持ちを向ける。

「緊張している者も多くいるだろう……。だが、どうか今だけは、心を奮わせて欲しい！　断言しよう！　皆の勇気は、必ず勝利に繋

がる！」

俺は心の底から叫ぶ。

「俺達は、誇りを懸けて戦う！故に、誇りなどない賊共に、見せつけるのだ！誇り高き狼が、負けることなど在りはしない！勝鬨（かちどき）をあげるのは、俺達だ！」

俺は腰に差した千代桜を抜き、天に掲げた。

「さあ、皆！行くぞ！全隊、突撃！」

俺はそう言って、馬の腹を軽く蹴り、敵の部隊へ向けて走り出した。

『おぉぉぉぉ！』

それに従い、咆哮を上げながら兵達も走り出す。

生き残りを懸けた俺達の戦いが、今、幕を開けた。

「はあっ！」

馬上から、俺は敵兵を斬り捨てた。

今斬った敵兵で、何人目だろうか？

五十人を超えた辺りから数えていないのでわからない。

両軍がぶつかってから、だいたい三十分ほど経ったが、俺達の本隊からの援軍はまだ来ない。

だが、今は援軍が来ることを信じて戦うしかない。

「どうした！？臆せずかかって来い！」

俺は敵兵を睨みつけ、そう叫ぶ。

敵兵は俺を警戒しているのか、中々かかって来ない。

「どけ！俺がやる！」

そう言って、一人の男が俺の前に躍り出た。

「黄巾党が将の一人、波才だ！俺はてめぇとの一騎打ちを所望する！」

その男、波才はそう叫び、その手に持つ槍を構える。

「……わかった。その一騎打ち、受けて立とう！」

俺は馬から下りてそう言って、千代桜を構えた。

「良いねぇ……。ノッてくれるのは嬉しいぜ。てめぇの名は何だ？」

「張元隊、隊長代理、北郷　一信だ」

「北郷か……。聞いたことはねぇ名だが、まあ良い。せいぜい俺を楽しませてくれよ！？」

そう叫ぶと、波才は突進した。

俺は波才の突きを左にかわし、槍の刃が空を斬った所で、波才の右脇に横一閃を叩き込む。

だが、それを波才は引き戻した槍で受け止めた。

「やるじゃないか。一撃で決まると思ったんだがなぁ……」

「ナメるな！」

ニヤリと笑う波才を強引に押し返し、俺は千代桜を上段から振り下ろす。

波才はそれをヒラリとかわし、突きを出すために腕を引いた。

そうはさせまいと、俺は下段から斬り上げ、波才の槍を弾く。

そこから、打ち合いが始まった。

一合、二合、三合……。

互いに、一歩も退く気はない。

当然、俺は初動をひたすら狙い、振り切られそうなものは避け、じっくりと波才が隙を見せるのを待つ。

対する波才は、時折舌打ちをしながら、強引に槍を押し込む。

苛立っているようだな。

悪いが、俺は我慢比べで負ける気はしないんだ。

俺は心の中でそう言いながら、ひたすら波才の初動を潰した。

「ちっ！うざってぇ！」

そう言って、波才は体ごと俺にぶつかる。

「うっ！」

その衝撃で、俺は僅かに体勢を崩す。

それを見逃さず、波才は突きを放った。

俺はおもわず後ろに飛び退き、波才から距離を取る。

中々隙を見せないな……。

俺は心の中で舌打ちをしながら、槍を構え直した波才を観察する。

“あれ”を使うか……。

俺はそう思い、千代桜を下段に構え、微かに腰を落とす。

あれとは、北郷御影流剣術奥義、“双閃（そうせん）”のことだ。

これは、その名が示す通り、二撃必殺の業。

蛇歩で敵の懐に潜り込み、その勢いを殺さず下段からの斬り上げで相手の武器を弾き、二撃目でガラ空きになった胴へ上段から斬り付け、相手にとどめを刺すのだ。

この業は、最初の蛇歩がキーポイントとなる。

もし、蛇歩自体が避けられれば、この業は完成しない。

外せば決定的な隙が生まれてしまい、俺にとっては色々とリスクの大きい業だ。

だが、幸い波才はまだ、蛇歩を見たことがない。

故に、簡単にかわすことなど出来はしないし、させるつもりもない。

これで、終わらせる。

俺は心の中でそう決め、波才の動きを凝視する。

少しの隙さえ、見逃してなるものか！

ジリッ、ジリッ、と互いに間合いを探り合う。

刹那、微かに波才の足が踏ん張る。

ここだ！

俺は足に力を込め、蛇歩を発動し、一気に波才に詰め寄る。

「なっ！？」

驚いた表情の波才を尻目に、俺は下段から千代桜を斬り上げ、波才の構える槍を弾く。

その瞬間、波才の胴が開いた。

「おぉぉぉ！」

俺は反す刀で、上段から波才の胴目掛けて、千代桜を一気に振り下ろした。

そして……

「馬鹿……な……」

左の肩口から、右の下っ腹まで一直線に断ち斬られた波才は、驚愕の表情を浮かべながら、仰向けに倒れた。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

息を乱しながら、俺は波才を見る。

微かな呼吸しかしていない波才は、視線だけ俺に向け、微笑を浮かべ、やがて静かに目を閉じた。

終わった……。

俺は……勝ったんだ！

「敵将、北郷　一信が討ち取った！」

俺は高らかに叫んだ。

「おぉぉ！隊長が勝ったぞ！」

「すごい！隊長がいれば、生き残れる！」

周りから、張元隊の兵達の歓声が聞こえる。

「皆！このまま敵を殲滅するぞ！」

『おぉぉぉ！』

俺の声に答えるように咆哮を上げた兵達は、士気の下がった敵兵達へ次々に突撃していく。

だが、兵数の差が徐々に出始め、次第にこちらが押されだした。

いくら狭間とはいえ、やっぱ七百じゃ厳しかったか……？

俺はそう思い、これからどうするか考え始めたその時、敵の部隊の後方で、敵兵が吹き飛んだ。

吹き飛んだ！？

何で！？

俺はそう思いながら、敵の部隊の後方を凝視した。

すると、“張”の文字が入った軍旗が見えた。

あれは……張飛将軍か！？

ってことは、義景はやっぱり俺の意図に気付いて援軍を送ってくれたんだ！

良かった……。

何とか間に合った。

「皆！張飛将軍の率いる援軍が到着したぞ！これでもうじき戦いは終わる！だから、あと少しだけ頑張ってくれ！」

俺は激化する戦場で戦う義勇兵達にそう叫んだ。

ここで張飛将軍の援軍は、かなり助かる。

張元隊の皆も、張飛将軍が来たとなれば、心強いはずだ。

「よしっ！」

俺はそう思いながら、再び気合いを入れ直すと、敵兵の群れに飛び込んだ。

張飛将軍が援軍に来て僅か二十分後、敵兵は完全に戦意を失い、次々に投降していった。

まあ、投降していった理由のほとんどが、張飛将軍の武を見て意気消沈したことなんだけどね。

「お兄ちゃんが、隊長代理の北郷って人なのかー？」

投降していった敵兵を眺めていた俺に、張飛将軍が話しかけてきた。

「はい、私が今回隊長代理を務めさせてもらいました。北郷　一信です。この度は、張飛将軍のおかげで助かりました。ありがとうございます」

俺はそう言って、張飛将軍に微笑む。

「気にすることはないのだ！鈴々は、鈴々の仕事をしただけなのだからなー」

そう言って、張飛将軍は元気な笑顔を浮かべた。

「それでも……です。私達が助かったことは事実ですから」

俺は頭を下げながら、感謝の気持ちを伝える。

もし、張飛将軍が援軍に来なかったら、本当にやばかった。

「にゃはー……そこまで言われると、何だか照れるのだ。ま、そんなことより、北郷のお兄ちゃんが、勝鬨を上げるのだ！」

「私が……ですか？張飛将軍がおやりになられた方が、兵達も喜ぶと思いますが……？」

張飛将軍の言葉に、俺は呆気に取られた表情を浮かべる。

って言うか、何で俺？

こういうのって、普通将軍がやるものじゃないの？

俺が疑問に思っていると、張飛将軍が答えた。

「むー……鈴々は難しいことはよくわかんないけど、義景のお兄ちゃんが、北郷のお兄ちゃんのおかげで戦に勝ったと言っていたのだ。」

「義景がそんなことを？」

俺は別に、何かすごいことをやったわけじゃない。

必要最低限の仕事をしただけだ。

「それに、北郷のお兄ちゃんはここの敵将を討ち取った人なのだ。だから、鈴々は一番活躍した北郷のお兄ちゃんに譲るのだ！」

張飛将軍はそう言って、満面の笑みを浮かべた。

素直で良い子だなぁ……。

って、そんなこと考えてる場合じゃなかった。

「わかりました。では、私が代わりに務めさせてもらいます」

俺はそう言って、兵達に向き直る。

「皆！聞いてくれ！」

俺の声が聞こえたのか、兵達が俺の方へ顔を向けた。

「今回、俺達張元小隊は、張飛将軍率いる張飛隊の援護もあり、無事勝利を収めることが出来た。これは偏(ひとえ)に、皆の頑張りと協力のおかげだ。改めて言わせてくれ。本当にありがとう！」

俺はそう言って、皆に頭を下げた。

頭を下げてばかりで、皆は情けない隊長だと思ったかな？

でも、俺はこういうことは大事だと思う。

ありがたいと思った時に頭を下げることは、俺にとって当たり前

のことだ。

そこに身分は関係ない。

まあ、これを誰かに押し付ける気はない。

これは俺だけの決まりのようなものだからね。

俺はそう思いながら、頭を上げて兵達を見る。

兵達は、真剣な眼差しを俺に向けていた。

気持ちって、伝わるもんだなぁ……。

まあ、チンタラ話すのもあまり良くないし、そろそろ締めるか。

「我等が義勇軍の戦いは、これからもまだまだ続く。でも、今日だけは勝利に酔いしれよう！皆、勝鬨を上げろ！」

『おぉぉぉ！』

俺の叫びに伴い、兵達の咆哮が天に響いた。

ああ……本当に無事終わって良かった。

俺は天を仰ぎ、しみじみそう思った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　陳登

愛紗が程遠志を破った後は、一方的な展開だった。

敵は指揮官を失ったことにより瓦解。

その隙に、俺達が一気に攻め込んだため、敵兵達は恐れをなしてぞくぞくと投降し、実質的にこの部隊は崩壊した。

その後、戦後処理を終えた俺達は、敵陣の天幕で束の間の休息を取っていた。

「ふぅ……とりあえず何とかなったな？」

俺は隣にいる義景に話しかける。

「ああ……一刀のおかげで何とかなったが、僕達軍師陣は落第点も良いところだ。」

義景はそう言って、溜息をついた。

一刀達のことは、先程伝令兵を通して聞いた。

伝令兵曰く、一刀は立派に隊長を務め、しかも敵将まで討ち取ったらしい。

あの野郎……大活躍じゃねぇか。

さらに、活躍したことは誇らず、兵達のおかげだと言っていたようだ。

アイツらしいと言っちゃアイツらしいが……相変わらず真面目な野郎だ。

まあ、そこが良いところでもあるんだがな。

「まあ、最悪の事態にはならなかったんだ。お前もあんまり気にすんな。」

俺はそう言って、義景の肩を軽く叩く。

「はぁ……。君に心配されるとは、僕もまだ未熟な証だな」

「お前……存外失礼な奴だよな」

俺は義景に訝しげな視線を向けるが、義景は気にするそぶりも見せずに溜息をついた。

まあ、そんな状態を飛ばせる辺り、義景はまだ元気だろう。

朱里と雛里において言えば、さっきまで桃香の胸でわんわん泣いていた。

そんな二人を優しくあやし、次は頑張ろうと諭す桃香の姿は、君主というより二人の姉のようで少し笑えた。

「お前は桃香の胸で泣かないのか？」

「馬鹿か君は……」

義景は俺の言葉に呆れたように溜息をつく。

「へぇ？お前も朱里や雛里のように泣くと思ってたんだがな？」

「誰が泣くか。あの二人は確かに優秀だが、まだ精神的に幼い部分もある。今回はそれが出てしまったのだろう。……まあ、今回のことは、僕達軍師陣にとっては厳しい教訓になったよ。僕は生涯忘れないだろうね……」

義景はそう言って苦笑した。

その時、

「失礼します。張飛隊、張元小隊、共に帰還しました」

伝令兵は一礼すると、そう言った。

「おぉ！来たか！それで、鈴々も一刀も無事か？」

「張飛将軍も、俺も無事だよ」

聞き慣れた声のする方へ視線を向けると、一刀が天幕の入口に立っていた。

「ありがとう。もう下がって良いよ？」

「はっ」

一刀はそう言って伝令兵を下がらせると、俺達の方へ向き直る。

「一刀！お前、大活躍じゃねぇか！」

そう言って、俺は一刀の肩を叩く。

「そうでもねぇよ。隊の兵達が頑張ってくれたんだ。褒めるなら、彼らを褒めてやってくれ。それに……」

一刀は義景に視線を向ける。

「一刀……僕は……」

「義景、すまん！」

「……はっ？」

一刀の突然過ぎる謝罪に、義景はあんぐりと口を開けた。

「おいおい、お前何を突然謝ってるんだ？」

流石に俺も驚いたので、口を出した。

「いや……俺、張元を止められなかったからさ……。その所為で、兵達にも犠牲を出しちゃったし……」

一刀は申し訳なさそうな表情で頭をかく。

「それは一刀の所為じゃないさ。むしろ、謝らなければならないのは僕だ」

そう言って、義景は一刀に視線を向ける。

「一刀、今回君達が襲撃に遭った件だが、あれは僕達がもっとしっかり考慮していれば回避出来たことだ。完全に、賊だと思って慢心していた。本当に済まない」

義景はそう言って、一刀に頭を下げた。

「よっ、止せよ！頭を上げてくれ！俺はこの通りピンピンしてるし、誰にでも失敗の一つや二つくらいあるさ！なぁ？士陽？」

「……まあな」

その理論で行くと、お前も謝る必要はなかったと思うんだがな。

そんなことを考えてるいると、俺はあることを思い出した。

「おい、義景。そういえば、さっき桃香が、一刀が来たら連れて来るように言ってなかったか？」

「ああ……そういえばそうだったね。一刀、桃香達がいる天幕まで、着いて来てくれるかい？」

義景は思い出したように一刀に尋ねる。

「俺は別に構わないけど……一体何だろう？」

一刀は不思議そうな表情をした。

「さあ？まあ、行ってみればわかるんじゃねぇか？」

俺は一刀にそう声をかける。

「そう……だな」

一刀はそう呟くと、桃香達の天幕に向かう義景の後ろを追う。

俺はその後ろに静かに着いて行くのだった。

side out

side　一刀

義景の後ろに着いて行くと、とある天幕の前で止まった。

「桃香、北郷隊長代理を連れて来たぞ？」

義景は天幕の中にいると思われる劉備様に声をかけた。

「あっ！義景君！じゃあ、入ってくれる？」

劉備様はそう言って、俺達に天幕へ入るよう促す。

「失礼します」

俺は一礼して、天幕に入った。

天幕の中には、円卓の机が置いてあり、中心に劉備様、その両サイドに諸葛亮軍師と鳳統軍師、さらにその両側に、関羽将軍と張飛将軍が座っていた。

「あっ、北郷さん。お疲れ様でした。とりあえず、座ってくれるかな？」

「はい、失礼します」

劉備様に促され、俺は劉備様の正面にある椅子に座る。

義景と士陽も、空いている席に座った。

「えっと……とりあえず、今回は北郷さんのおかげで、私達は勝利を収めることが出来た。北郷さん、本当にありがとう」

劉備様はそう言って、俺に笑いかけた。

「評価して頂けることは大変嬉しいです。ですが、褒賞ならば、私ではなく張元隊の兵達に与えてやってください。彼らの協力と頑張りがあったおかげで、私も自分がやりたいように出来たのですから」

俺はそう言って、劉備様の目を見る。

「もちろん、兵の人達にも褒賞は与えるよ。でも、北郷さんにもないとね？」

劉備様は笑顔でそう言った。

「一刀、遠慮している君の気持ちもわからなくはないが、ここは貰っておけ。じゃないと、今後の兵達の士気に関わってくる」

義景は横目で俺を見ながらそう言った。

……ああ、そういうこと。

俺はあることに気付き、一人で納得した。

義景が言っていることは、多分、信賞必罰のことだと思う。

確かに、これがしっかりしていないと、軍は纏まらないもんなぁ……。

「わかりました。ありがたく頂戴致します」

俺はそう言って、劉備様に頭を下げる。

「良かったぁ！貰ってくれなかったら、どうしようかと思ったよ！」

劉備様はそう言って苦笑する。

「話しは纏まったようだね？なら、北郷　一信、君に言い渡す。君は今日から、劉備隊の副官、及び新たに小隊を率いる権限を与えよう。これで良いね？桃香？」

「うん！北郷さん、そういうことでお願い。あと、私の真名を預けるよ。私の真名は桃香って言います」

劉備様は花が咲いたような、満面の笑みを浮かべてそう言った。

それにしても、一気に劉備様の副官に昇進か……。

まあ、自分でありがたく頂戴するって言っちゃったし、言ったからには言葉に責任を持たないとな。

俺はそう思いながら、劉備様……いや、桃香様に頭を下げた。

「私こと、北郷　一信は貴女様に改めて忠誠を誓いましょう。その証として、我が真名、一刀を預けます。どうぞこれからは、一刀と

お呼びください。他の幹部の皆様も、同様です。若輩者ですが、どうぞよろしくお願い致します！」

桃香様に一生従う覚悟を、俺は今決めた。

受けたからには、本気で忠誠を誓おう。

真名は、その証だ。

桃香様の理想は、本当に美しい。

いつか、それが現実に出来るように、俺は主君である桃香様を支えていこう。

そう思いながら、俺は頭を下げ続けるのだった。

～第六話～侍、仕えるべき主に忠誠を誓う（後書き）

まず、遅れてごめんなさい！

いやぁ……今回はすごく悩みました。

まあ、ポイントとしては二つです。

まず、義景達軍師陣の失敗をどう描くか、という所ですね。

私は蜀√で、軍師陣が楽観的過ぎるだろうと思っていました。

なので、今回はちょっときつ目の灸を据えました。

次に、一刀の活躍についてです。

義景達が失敗するので、その尻拭いという形で活躍させました。

まあ、ウチの一刀君は、美玲様から兵法を学び、義遠様と権陽様の下で一年研修期間のような日々を過ごしていたので、当然あれくらいの策は立てられます。

その辺りも踏まえて、一刀を活躍させましたが、ご都合主義だったでしょうか？

ご都合が過ぎるぞ馬鹿野郎って感じた方は、どうぞ感想の方へお書きください。

さて、内容の話はここまでにして、次は文章の話です。

若干書き方を変えましたが、どうでしたか？

読みにくいと感じた方も、感想の方へお願いします。

それにしても、私は相変わらず文を纏めるのが下手ですね。

書きたいことが多すぎて、気付いたら二万字を超えていましたｗｗ

まあ、少なすぎるよりは良いのかもしれませんが、私の場合描写が下手なので、くどく感じてしまう方もいるかもしれませんね。

そう感じた方も、感想の方へお願いします。

では、今回はここまで！

また次回でお待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6996x/

真・恋姫†無双～冷静と情熱の狭間～

2011年11月29日19時56分発行